

富山県福光町

梅原落戸遺跡群III

1996年3月

福光町教育委員会

富山県福光町梅原落戸遺跡Ⅲ —正誤表—

頁	行	誤	正
5	14	S E 01	S E 04
6	21	5・12・15~17 12は須恵器杯	5・15~17 削除
		15・19は	15・20は
	23	21・27は	22・27は
	24	24は	25は
10	19	S K 03・04と	S K 03と
	30	右岸	左岸
12	31	206・307は	206・207は
13	15	緑灰色してあり	緑灰色をしており
14	12	口傾部	口縁部
	22	76は	276は
15	18	(第19図・図版13)	(第24図・図版13)
	20	(第19図・図版13)	(第24図・図版13)
	28	洞部と	脣部と
16	24	方計に	方形に
18	17	珠洲の蓋	珠洲の壺
	31	380・391は	380・381は
21	8	110,000 m ³	111,000 m ³
22	20	試掘調査では遺物に	試掘調査では遺構に
36		S E 04 (6~11)	S E 04 (6~12)



梅原落戸遺跡 7 地区全景



同上出土品

序

福光町の東部に位置する北山田地区は山田川と大井川にはさまれた水田地帯であります。東海北陸自動車道関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（梅原地区）の実施に伴う梅原落戸遺跡の発掘調査です。遺跡の大半は盛土により保存することになりましたが用排水路用地及び水田部分の一部について本調査を実施しました。

調査の結果、平安時代前期の竪穴住居跡や倉庫跡、平安時代末期の住居跡や川跡が発見されるなど多くの成果がありました。

本書は、その調査結果をまとめたもので、出土品とあわせて郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバーアイ材センター・富山県農林水産部・ほ場整備事業梅原地区委員会を始め、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成8年3月

福光町教育委員会
教育長 吉江 正二

例　　言

- 1 本書は、県営低コスト化水田農業人区画は場整備事業（梅原地区）に伴う富山县福光町梅原落戸遺跡並びに梅原加賀坊遺跡、梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成7年6月19日から同年10月18日までである。梅原落戸遺跡4か所の調査面積はあわせて3,235m²、梅原加賀坊遺跡の調査対象面積は23,400m²、梅原胡摩堂遺跡の調査対象面積は87,600m²である。
- 2 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
- 3 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長鳥越知証が調査事務を担当し、教育次長兼生涯学習課長辻沢功が総括した。調査担当者は以下のとおりである。

梅原落戸遺跡（本調査） 富山県埋蔵文化財センター 主任 久々忠義

福光町教育委員会 文化財保護主事 佐藤聰子

梅原加賀坊遺跡、梅原胡摩堂遺跡（試掘調査）

富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事 島田修一

同 池田恵子

本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行った。執筆分担は各文末に記した。

- 4 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。
- 池野正男・上野章・越前慶祐・往藏久雄・片田良治・上村清・河合豊・岸本雅敏・神保孝造・太嶋勇・山矢一郎・中澤高義・西井龍儀・橋本米次郎・林敏三・前田廣・溝口博文・宮田進一・桃野真晃・吉田敏信・金森淑子・西川和美
- 5 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準上色帖』日本色研事業株式会社を用いた。

目　　次

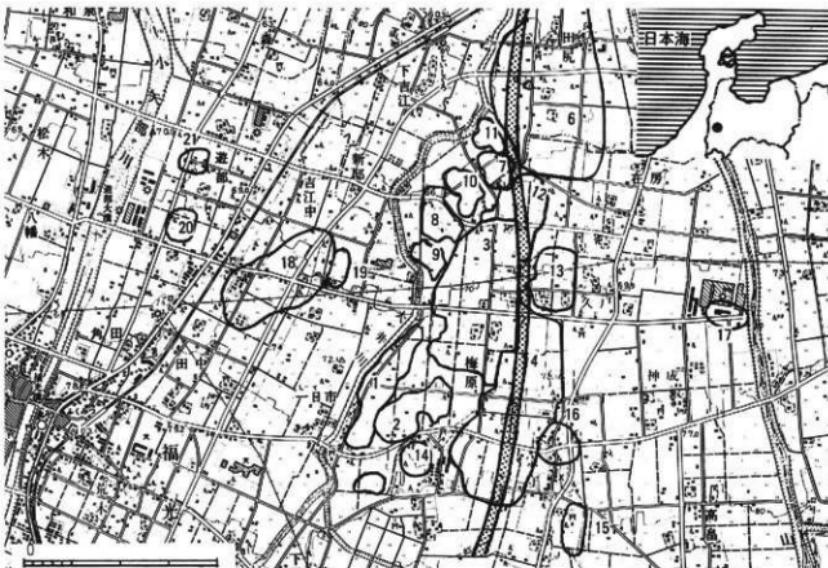
I 位置と環境	1	V 試掘調査の概要	21
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第7図 6・7・8地区の地形と区割	23
II 調査にいたる経過	2	第8図 6地区の遺構	25
第1表 遺跡の概要	2	第9図 6・8地区の遺構	26
第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置	3	第10~16図 7地区の遺構	27
III 調査の概要	4	第17~18図 9地区の遺構	34
1. 調査の経過	4	第19図 6地区的遺物	36
2. 調査の方法	4	第20~23図 7地区的遺物	37
3. 6地区的概要	4	第24図 7・8地区的遺物	41
第3図 6地区の基本層序	4	第25~27図 9地区的遺物	42
4. 7地区的概要	7	第2表 試掘調査結果一覧	45
第4図 7地区的基本層序	7	第28~29図 試掘調査位置と遺跡範囲	46
第5図 遺構配置図	9	第30~31図 試掘調査の遺物	49
5. 8地区的概要	15	図版1~24	
6. 9地区的概要	16	付図1 梅原落戸遺跡6地区	
第6図 9地区的基本層序	16	付図2 梅原落戸遺跡7地区	
付載 梅原落戸遺跡泥土の寄生虫分析	19	付図3 梅原落戸遺跡8地区	
IV まとめ	20	付図4 梅原落戸遺跡9地区	
参考文献	20		

I 位置と環境

梅原落戸遺跡は、富山県西砺波郡福光町梅原地内に所在する。福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部に位置する。県境には養老3年(719)、泰澄大師によって開山されたといわれる靈峰医王をはじめとするなだらかな山脈が連なる。南側に位置する上平村との境にある大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

遺跡は、小矢部川の支流である大井川と山田川にはさまれた河岸段丘上に立地する。標高70m前後を測る当遺跡の周囲には梅原安丸・梅原出村・梅原胡摩堂・梅原上村・梅原加賀坊・久戸・田尻の各遺跡が密集している。(第1図)このうち、梅原安丸・梅原胡摩堂・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡は、東北北陸自動車道を建設する際に発掘調査が行われ、12世紀中頃から17世紀にかけての大集落跡が発見された。この南側には、うずら山・宗守・竹林I・竹林II・東殿・徳成などの绳文時代を中心とした遺跡がある。また、梅原胡摩堂遺跡6・7地区では弥生時代中期の出土品があり、梅原安丸III遺跡で古墳時代の堅穴住居跡を検出している〔福光町教委1991・1994〕。このようなことから、梅原落戸遺跡の周辺では、原始時代から今日まで連續と人々が生活していたことがわかる。

文献史料では、古代には福光町の一部が砺波郡川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村とよばれ官倉が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家寺である梅原坊があった。(佐藤聖子)



第1図 位置と周辺の遺跡

1. 梅原出村遺跡
2. 梅原上村遺跡
3. 梅原落戸遺跡
4. 梅原胡摩堂遺跡
5. 梅原出村II遺跡
6. 田尻遺跡
7. 梅原安丸遺跡
8. 梅原安丸II遺跡
9. 梅原安丸III遺跡
10. 梅原安丸IV遺跡
11. 梅原安丸V遺跡
12. 梅原加賀坊遺跡
13. 久戸遺跡
14. うずら山遺跡
15. 宗守城跡・宗守寺屋敷遺跡
16. 宗守遺跡
17. 久戸東遺跡
18. 仏寺遺跡
19. 田中遺跡
20. 常楽寺跡
21. 道部城跡

II 調査にいたる経過

平成元年（1989）、遺跡の所在する梅原地区において、21世紀に向けての新しい農業に対応するために「低コスト化水田農業大区画は場整備事業計画」が策定された。同事業は平成2～9年を事業年度とし梅原地区93haを対象とする計画であった。しかし、計画地内は、東海北陸自動車道の建設に伴う調査で梅原加賀坊遺跡などの存在が知られていたことから、計画地内への遺跡の広がりが想定された。そのため、教育委員会では、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受けて、平成元年度に計画地内の約20haの遺跡分布調査を実施した。その結果、広範囲に遺物が散布することがわかった。そこで、平成2年度には、遺跡の範囲や遺存状況を確認するため、国庫補助を受け試掘調査を行った。その結果、遺構の残りがよいことがわかり、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ね、遺跡の大半は盛り土を行うことで地下に保存し、一部の面工事・農道建設・排水路部分については本調査を実施することとなった。残り73haについても、同年秋に分布調査を実施したところ広範囲に遺跡が広がることがわかり、平成3年度以降引き続き試掘調査と本調査を継続して実施している〔町教委1991・1992・1993・1994・1995〕。これまでの調査面積は次のとおりであり、遺跡の内容は第1表のとおりである。

平成2年度の調査　（試掘対象面積）約164,000m²（本調査遺跡・面積）梅原安丸II遺跡、梅原安丸III遺跡、梅原安丸IV遺跡、梅原安丸V遺跡の計2,186m²。

平成3年度の調査　（試掘対象面積）約124,500m²（本調査遺跡・面積）梅原安丸遺跡、梅原安丸II遺跡、梅原安丸III遺跡の計5,238m²。

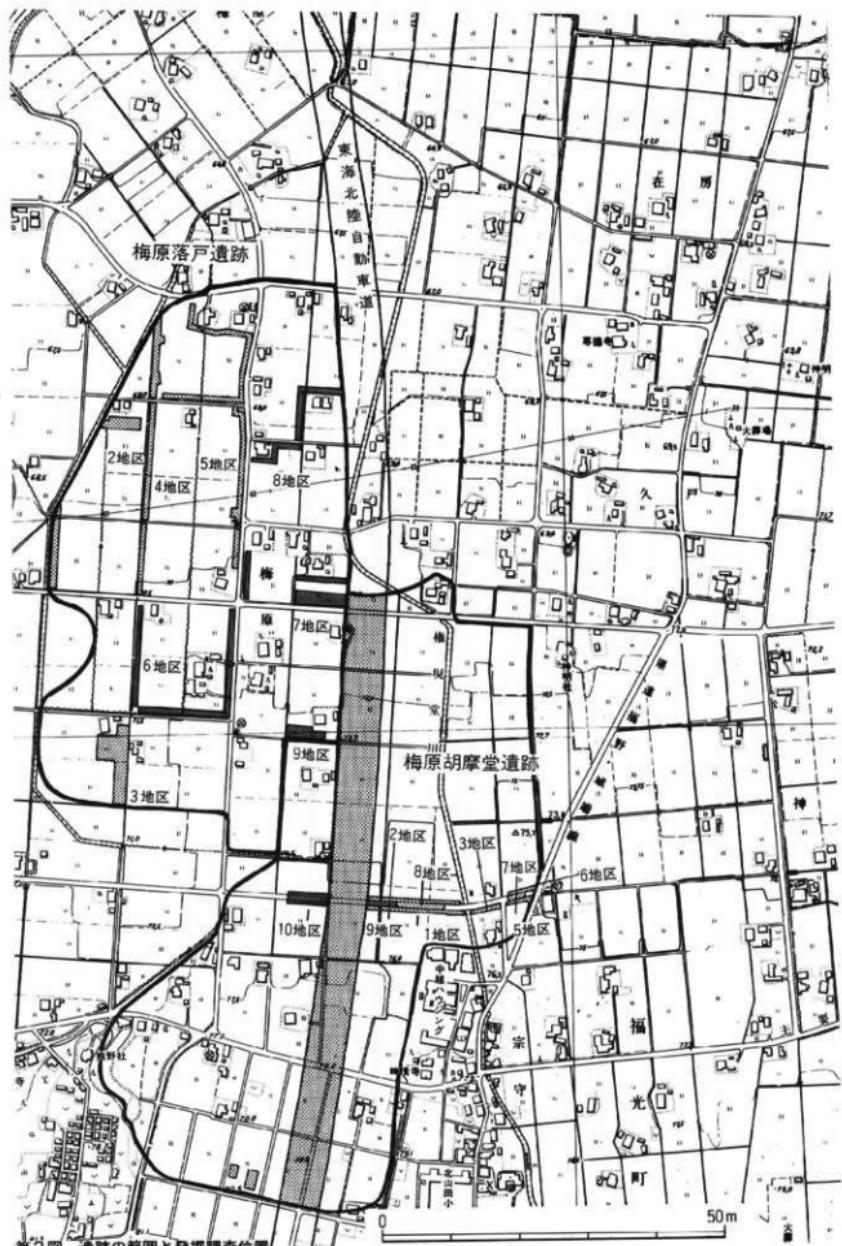
平成4年度の調査　（試掘対象面積）約145,000m²（本調査遺跡・面積）梅原上村遺跡、梅原出村II遺跡、梅原出村III遺跡の計4,700m²。

平成5年度の調査　（試掘対象面積）約116,000m²（本調査遺跡・面積）梅原落戸遺跡、梅原出村II遺跡、梅原上村遺跡の計3,900m²。

平成6年度の調査　試掘対象面積約130,000m²（本調査遺跡・面積）梅原落戸遺跡計3,450m²　（久々忠義）

第1表 遺跡の概要

No.	遺跡名	所調時代	発見された遺構	発見された遺物
1	梅原安丸	縄文、中世、近世	掘立柱建物柱穴、穴、溝、堅穴状遺構、井戸、池状遺構	土師質土器、珠洲焼、磁器、漆器、五輪塔、石臼、下駄
2	梅原安丸II	縄文（後期）、古代、中世、近世	掘立柱建物、両向穴、溝、井戸、土器破片	縄文土器、石器、須恵器、漆器、土師質土器、珠洲焼、陶磁器
3	梅原安丸III	縄文（後期）、古墳、古代、中世、近世	堅穴住居跡（古墳）、掘立柱建物、柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、石器、須恵器、土師質土器、珠洲焼、陶磁器
4	梅原安丸IV	縄文か、古代、中世、近世	掘立柱建物柱穴、穴、溝、堅穴状遺構、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質上器、陶磁器
5	梅原安丸V	縄文か、古代、中世、近世	掘立柱建物、掘立柱建物柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、陶磁器、曲物底板
6	梅原出村II	縄文（晩期）、古代～中世	柱穴、穴、溝	縄文土器、石器、須恵器、土師質土器、珠洲焼、爾賀、耐熱キセル
7	梅原出村III	旧石器、縄文（前・後・卑・中期？）、古墳～中世、近世、近代？	柱穴、穴、堅穴住居跡、溝、井戸、遺物包含層（縄文・古代）	縄文土器、石器、須恵器（墨書き土器）、土師器、土師質上器、珠洲焼、越前焼、陶磁器、瓶貯
		縄文（前・中・後期）古墳、古代～中世、近世、近代	穴、溝、井戸、遺物包含層（縄文）	縄文土器、石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、土師質上器
8	梅原上村	縄文、古代～中世、近世	柱穴、穴、溝、遺物包含層（古代）	縄文土器、石器、須恵器、土師器、珠洲焼、越前焼、八尾焼？陶磁器、古鉢
		縄文（中・後期）、古代～中世、近世	穴、溝	縄文土器、石器、須恵器、土師器、珠洲焼、越前焼、石臼、陶磁器
9	梅原落戸	縄文（中・後・晩期）、弥生、古代、中世、近世	川、穴、遺物包含層（縄文）、掘立柱建物（合倉型）土坑（古代）	縄文土器、石器、弥生土器、内里土器（古墳）、須恵器、土師器、土製品、鉄斧、馬糞、炭化米、鐵了、骨片、木製品（古代）、土師質土器、珠洲焼、越前焼、廟戸、美濃焼、輪入陶器、土製品、木製品、小舟、鉄斧、薪荷（中世）陶磁器、漆器製品
10	梅原加賀坊	縄文、古代、中世、近世	柱穴、穴、溝	縄文土器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、磁器



第2図 遺跡の範囲と発掘調査位置

III 調査の概要

1. 調査の経過（第2・7図）

今回の調査は、平成5年度の協議に基づき、田面削平工事並びに用排水路付け替え工事に伴う本調査である。調査遺跡は梅原落戸遺跡で、調査地点は4か所にわかれます。

遺跡は、当該工事に先立つ平成2年に行った分布調査で発見された。平成4～6年度に試掘調査を行い、その範囲はこれまで梅原胡麻堂遺跡に含まれていた所を一部合わせて東西約430m南北約845m面積約279,000m²となった。本調査は、平成5年度に2か所（1地区・2地区・計1,710m²）、平成6年度に3か所（3～5地区・計2,450m²）について実施した。

これまでの調査では、縄文時代中期・後期・晚期・古墳時代、奈良時代、平安時代末～江戸時代の遺物が出土し、それぞれの時期に人々の生活が行われていたことがわかった。とくに昨年の調査では、利波郡川上里と記した和銅3年（710）の年号がある平城宮跡出土木簡が作られた時期に相当する奈良時代前半期の集落跡が発見され、川上の地が梅原一帯であった可能性が高まっています。

今回の調査地点は、平成6年度の本調査に続くので、6地区・7地区・8地区・9地区と呼ぶこととした。6地区は、遺跡中央南寄りに位置し、用排水路付け替え工事にかかる675m²を発掘した。7地区は遺跡中央東寄りで、田面削平工事にかかる1,460m²と用水路付け替え工事にかかる70m²を発掘した。8地区は遺跡の北部に位置し、230m²を発掘した。9地区は遺跡の南部東寄りに位置し、800m²を発掘した。

2. 調査方法

調査は、まず重機により耕作土の掘削を行った。その後、地区ごとに基準杭の設置及び調査区割を行った。調査区割は、調査区の形に応じておむね南北から北方向にX軸、西から東方向にY軸をとり、それぞれ2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリ及びヘリコプターにより撮影した写真から図化した。

3. 6地区の概要

（1）地形と層序（第2・3図、図版1）

6地区は海拔69.8～71.5mで、地形は西方と北方へゆるく傾斜しているが、おむね平坦である。地表から黄色土の地山面（遺構確認面）までの深さは30～80cmで、その間は大きく4層に分かれる。①層は現代の耕作土、②層は大正時代の堀整備時の盛土、③層は灰黒色土で江戸時代の堆積と考えられる。④層は黒色土で縄文時代から中世の遺物が含まれる。層の厚い所では、地山直上で打製石斧がまとめて出土している（図版3の1）ことから、④層は時期的に分層できる可能性があるが、肉眼では識別できなかった。

（2）遺構（第8・9図、図版1～4 付図1）

奈良・平安時代の井戸1・土坑2・溝3・柱穴4、中世の井戸1・土坑6・柱穴6・溝1などがある。また、地表

① 層耕土（現代）
② 層盛土（明治・大正）
③ 層灰黒色土（江戸）
④ 層黒色土（中世以前）
⑤ 層黄色土（地山）

第3図 6地区の基本層序

跡とみられる地割れがSE04付近で認められた。

A. 奈良・平安時代

井戸SE04（第8図、図版1・2）

SE04は、一辺約75cmの方形で、底までは地山面から約1.2mの深さである。井戸は径約2.2mの大きな穴を掘り、中央に木の板を組み合わせた井筒を据え、その周りを埋め戻して造られている。埋め土は地山土にわずかに黒色土の混じった土であるのに対し、井戸内側の土は黒色土で、その境はほぼ垂直である。このことから、井戸が埋まる時にはその境には井筒の板があったが、のちに板が腐ってしまったものと考えられる。出土遺物は、奈良時代の土師器、須恵器、炭化米がある。

土坑SK03・02・SE01（第8図、図版1・2）

SK03は井戸SE04のすぐ南にある。径1.2m深さ15cmの浅くて底が平坦なもの。暗渠排水路で分断されている。出土遺物は、奈良時代の須恵器・土師器があり、時期は8世紀後葉とみる。SK02とSE01からも土師器が出土したが、詳細な時期は不明。SE01は径55cm深さ40cmの穴で、発掘時井戸と判断したが、浅く井戸ではない。

溝SD05・01・04（第8図、図版3）

SD05はSE01の北方約30mにある。幅40cm深さ25cmの断面V字形の溝である。出土遺物は須恵器があり、8世紀中葉とみる。流れの方向は北に対して13度東にかたむいている。井戸の向きはほぼ南北であり、古代の造構群の配置に特に企画性は認められない。SD01・SD04からも8世紀中葉とみられる土師器や須恵器が出上した。

柱穴P 3・5・7・8（第8図、図版3）

P 3は径50cm深さ30cmの小さい穴である。須恵器が出上したが時期は不明。P 5・7・8からも土師器や須恵器が出土したが時期不明。

B. 中世

井戸SE03（第8図、図版4）

SE03は、底径85cm深さ1.5mの円形の井戸である。底は平坦で、長さ10~25cmの石が敷いたようにあった。出土遺物は土師器皿があり、時期は13世紀とみる。

土坑SK01・05~11（第8・9図、図版2~4）

SK01は底の断面が波打っている。幅30cm深さ15cm長さ3mの溝が近接して並んだような土坑である。出土遺物は土師器皿があり、時期は14世紀とみる。

SK09は径1.2m深さ25cmで底は円錐形である。出土遺物は土師器皿があるが時期は不明。

SK05・06・10・11は、径1~3m深さ30~60cmで底が平坦である。覆土が地山黄褐色粘土が攪はんされたような土であることから、粘土探査用の土坑と考えられる。遺物はSK07から土師器皿と常滑窯が出土しており、時期は13世紀中葉とみる。SK08・09からも土師器皿が出上したが時期不明。

溝SD03・08・09（第8図、図版3・4）

SD03は、幅1.8m深さ40cmで、ほぼ東西方向の溝である。出土遺物は土師器皿があるが時期不明。SD08・09は、幅20~30cm深さ5cmの溝である。出土遺物はないが覆土の状況などからここに含める。

柱穴P 1・2・4（第8図、図版3）

径30~40cm深さ30~50cmのもの。間隔は等間隔でないので、同一建物の柱列にはならないかもしれない。遺物はP 1から完形の土師器皿、P 2から白磁と土師器皿が出土しており、13世紀とみる。P 6・9・10からも土師器皿が出上したが時期不明。

地割れSX01（第8図、図版1・2）

幅20~40cm深さ60cmほどの溝が南北に走る。北側でこれに並行してひび割れが走る。地盤に伴う地割れと考えられる。奈良時代のSE04、中世のSK09を断ち割っており、それ以降のものである。

(3)遺物（第19図、図版13）

縄文時代後期前葉・後葉、奈良時代、平安時代、中世のものが整理箱（長さ65cm幅40cm深さ10cm、以下同じ）で12箱ある。ほかに、江戸～明治時代のものが1箱ある。

A 縄文時代（第19図、図版13）

縄文土器（1～3） 1は内湾する口縁部に押し引き沈線がある深鉢で、後期前葉（気屋式）である。2は内傾する口縁部に沈線が巡り、口縁端部が外反する深鉢で、後期後葉（本江広野新期）である。3は口唇部に沈線が巡る鉢で、後期後葉（本江広野新期）である。

打製石斧（4） 4は、刃部が広く着柄部が細い逆T字型をしたもの。他は短間型あるいは側刃が少しくびれる分鋒型である。打製石斧は、3本が重なって出土したところがある。（図版3の1）

B 奈良・平安時代（第19図、図版13）

須恵器・土師器・炭化米がある。炭化米はSE04の覆土を水洗いして採集した。

SE04（6～12） 6は胴部内外面刷毛目の中師器鉢、7は土師器小型甕の底部、9は土師器高杯の脚部、10は内面黒色の土師器高台杯、8・11は須恵器杯、12は須恵器高台杯である。11は底部と体部の境が角ばるもので、8世紀後葉と考える。8～10は中葉の時期の可能性がある。

SK03（13・14） 13は須恵器反頬甕、14は口縁端部が角ばる土師器甕である。時期は8世紀前葉または中葉と考える。

SD05（18） 18は口縁端部が三角になる須恵器杯蓋である。時期は8世紀中葉とみる。

その他の遺構と包含層（5・12・15～17・19～24・26・27） 12は須恵器杯。15・19は底部と体部の境が丸い須恵器杯。時期は8世紀中葉とみる。16・17・26は口縁端部が三角になる土師器甕で、時期は8世紀末～9世紀前葉。20・22・23は口縁端部が三角の須恵器杯蓋で、時期は8世紀中葉。21・27は口縁端部が屈曲して端部が外へ出る須恵器杯蓋で時期は8世紀後葉。24は口縁端部がつぶれた感じの土師器甕で時期は8世紀後葉か。5は口縁部が角ばる土師器甕で時期は8世紀中葉。28は櫛書き波状文がある須恵器甕の頸部である。

C 中世

土師器皿、珠洲、常滑、青花、磁石があり、時期は12世紀から16世紀までのものがある。

SE03（37） 37は口縁部をヨコナデする土師器皿（以下ヨコナデ土師器と呼ぶ）で、口縁部が内湾ぎみに立ち、時期は13世紀とみる。

SK01（38） 38はヨコナデ土師器皿。ナデ幅が広く端部が少し立ち、時期は13世紀とみる。

SK07（35・36） 35はヨコナデ土師器皿。ナデ幅が小さく、時期は12世紀後半～13世紀。36は常滑の甕とみられる。口縁部縁帯が広いので、時期は13世紀中葉とみる。

P 1～3（29～34） 29はP 1から出土したヨコナデ土師器皿。口縁端部が少し立つので、時期は13世紀前半か。30～32はP 2から出土したヨコナデ土師器皿。32は口縁部に煤が付着しており灯明甕である。30・31はナデ幅が広いので時期は13世紀後半とみる。33は口縁部が小さい玉縁の白磁碗で時期は12世紀。34はP 3から出土したロクロ成形の土師器皿（以下ロクロ土師器と呼ぶ）。外反する口縁部が薄く尖るので時期は15～16世紀とみる。

包含層（39～45） 39はヨコナデ土師器皿。40は珠洲叩き甕で、口縁部形態は珠洲第三期（13世紀後半）の特徴〔吉岡1994〕。39・40はいずれもSK07付近出土である。41～43は珠洲すり鉢、41・42は口縁部形態とおろし目の間隔から

珠洲第IV 2期（14世紀前半）、43は口縁部がやや丸く膨らむ。一緒に青花皿が出土しており、時期は16世紀か。44・45は白磁。45は口縁部が外反するので、時期は15～16世紀とみる。

4 7地区の概要

(1) 地形と層序（第2・4図）

7地区は、海拔約70.8mである。西側と北側に向かってゆるく傾斜する。調査の結果、調査区の東端は、13世紀までは川が流れていたことがわかった。この川は現在この東方約100mにある権現堂川のかつての流路あるいは分流であったと考えられる。

地表から地山面（黄色粘土層）までの深さは40～60cmで、その

① 層耕土（現代）
② 層褐色土（平安末～鎌倉）
③ 層黒色土（平安前・繩文）
④ 層黄色土（地山）

第4図 7地区の基本層序

間は大きく3層に分かれる。①層は現代の耕作土、②層は褐色土で平安末～中世の遺物が含まれる。③層は黒色土で、平安時代と繩文時代の遺物が含まれる。平安時代と繩文時代の堆積層は区別できないが、繩文時代の遺物は地山直山で認められる。なお、調査区西寄りで、②層と③層の間に黄褐色の砂層が堆積しているところがある。この砂層は9地区でも認められ、川の氾濫などで堆積したものと考えられる。また、調査区西側には、江戸～明治時代の屋敷跡があり、②・③層はその擾乱を受けているところがある。

(2) 遺構（第5・10～16図、図版5～9）

平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物7・土坑6・井戸1・溝2・川2・集石1、江戸時代末～明治時代の溝（SD03・04・05・09）、土坑（SK06・09～11）、井戸（SK12～14）などがある。江戸末～明治時代の遺構については、説明を省略する。

掘立柱建物（第5・10～13図、図版3・4）

SB01～06の7棟があり、川跡SD01のそばに集中して重なりがある。建物の棟方向はほぼ南北にあるが、真北に対して3～22度の幅で変動がある。建物SB06は側柱建物であるが、その他は総柱建物である。なお、SD01の右岸に、2.5mの間隔をおいて並ぶ3つの柱穴がある。これは、東海北陸自動車の建設に先立つ発掘調査で発見されているSB06の西側柱列にあたる可能性がある〔富文振1994〕。

SB01（第10図上、図版8）

SD01に最も近い位置にあり、他の建物と重なりがない。東西2間（4.8m）×南北3間（7m）の南北棟の総柱建物とみられるが、南側は調査区外へのびる可能性がある。また、東北側にはほぼ建物の柱列と並行する柱穴があり、張り出しをもつかもしれない。棟方位は北に対して約10度東へ振れる。床面積は約33.6m²で、建物群のなかでも小型である。柱間寸法は、桁行は2.2+2.3+2.5m梁行はともに2.4mで、桁行の柱間寸法が一定しない。また、西側柱列は、中央及び東柱列とはきれいに並ばず少し南へずれている。柱穴の掘方は30cm前後の丸いもので、深さは20～30cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから、柱の太さは10～15cmほどであったと推定できる。出土遺物は、上部器があり、時期は12世紀中頃とみる。P1・2・4・5の中央にはSK07があり、付属施設とみられる。

SB02（第11・12図・図版7）

SB03・05と重なりがある。東西4間（9.1m）×南北3間（7.7m）の南北棟の総柱建物である。棟方向の長さが短いが調査区南側へのびるのかもしれない。棟方位は北に対して約6度東へ振れる。床面積は約70m²である。柱間寸法は、梁行は2.0+2.4+2.5+2.2mで、桁行は2.3～2.6+2.8+2.5～2.8+2.6mである。梁行は外側の柱間が狭い。桁行の柱間寸法は一定でない。

柱穴の掘方は30～40cmの丸いもので、深さは20～50cmで、西側と東側柱列の柱穴は深い。柱は残っていないが、柱

穴の土層の違いから柱の太さは10~15cmほどであったと推定できる。出土遺物は、土師器・白磁・鉄滓があり、時期は12世紀後葉とみる。

SB03・05（第11・12図、図版7）

SB03とSB05は柱穴の大きさが異なることから別々の建物と考えられるが、SB03の建物の南側中央の柱穴がないこと、接続部分にSK01・02があることなどから、SB03はSB05に接続して建てられた建物と考える。SB02とは重なりがある。SB05は、建物の主体が調査区外にあるらしく、北側柱列だけである。梁行に相当するとみられる東西4間(9.4m)があり、柱間寸法は、2.3~2.4mである。柱穴は、径50~70cm深さ40~60cmの大型である。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは20~25cmほどであったと考えられる。出土遺物は土師器があり、時期は12世紀中葉とみる。

SB03は南側の棟持柱に相当する柱穴がない。そのため、SB03P3を南側の棟持柱として共有して、SB05の北側へ接続して建てられたのであろう。そうであれば、SB03は東西4間(9.5m)×南北5間(12.1m)の南北棟の総柱建物である。棟方位は北に対して約6度東へ振れる。床面積は約114.95m²である。柱間寸法は、梁行桁行とも2.3~2.5mである。

柱穴の掘方は30~50cmの丸いもので、深さは20~40cmである。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは15cmほどであったと推定できる。出土遺物は、土師器・製塙土器があり、時期は12世紀中葉とみる。

SB06（第10図下、図版5）

SB03・04と重なりがある。東西2間(4.7m)×南北3間か(7.5m以上)の南北棟の側柱建物である。棟方位は北に対して約8度東へ振れる。床面積は約35.25m²以上である。柱間寸法は、梁行2.35m桁行2.5~2.7mである。

柱穴の掘方は30~50cmの丸いもので、深さは20~50cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから、柱の太さは10~15cmほどであったと推定できる。出土遺物は、土師器・製塙土器・鉄滓があり、時期は12世紀後葉とみる。P7に接し南から土師器皿が5枚まとめて出土した。

SB04（第13図、図版5）

SB03・06と重なりがある。東西4間(9.5m)×南北3間か(7.7mか)の南北棟の総柱建物である。棟方位は北に対して約5度東へ振れる。床面積は約73.15m²ほどであろう。柱間寸法は、梁行は2.2~2.5m桁行は2.5~2.7mである。柱穴の掘方は径30~50cmの丸いもので、深さは15~50cmである。柱は残っていないが柱穴の大きさから10~15cmほどであったと考えられる。

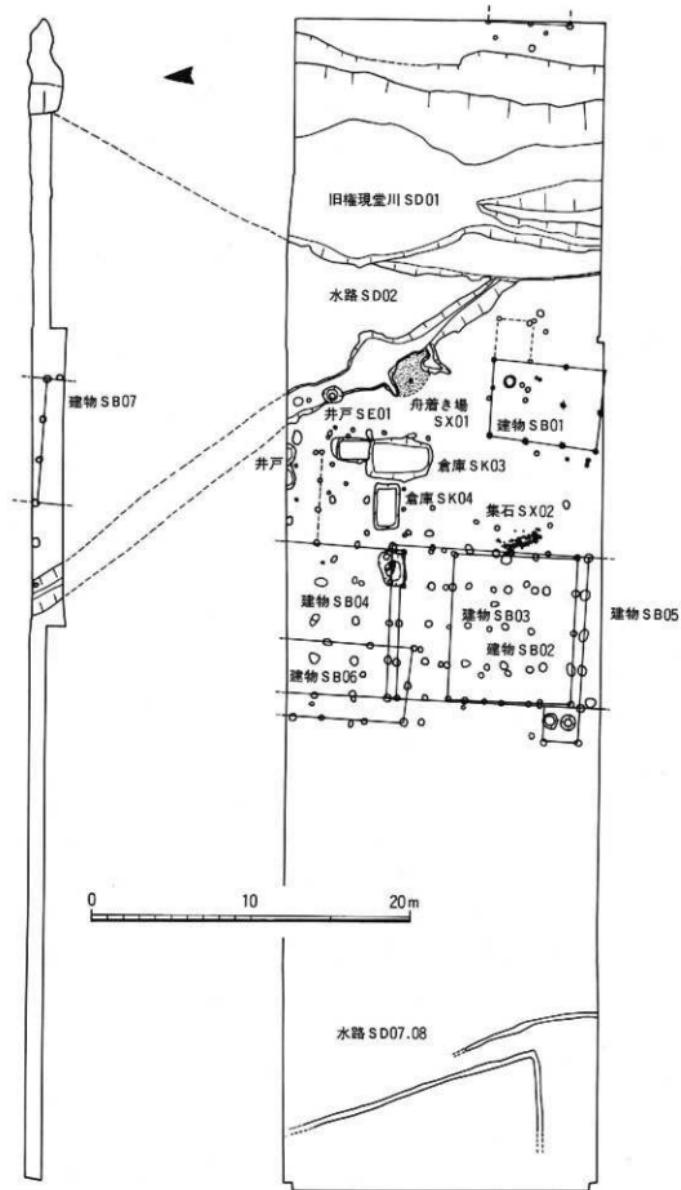
この建物の南東角に土坑SK05がある。その南側の柱穴は建物南側の柱列の並びから少し南へはずれており、SK05がこの建物に付属していた可能性が高い。出土遺物は、土師器・白磁があり、時期は12世紀中頃とみる。

SB07（第13図、図版9・10）

SB01~06建物群の北方約20mのところにある。用水路付け替え部分の調査で発見されたもので、東西方向の柱列3間分(7.9m)である。柱間寸法は2.6~2.7mである。SB02・04の桁行寸法に近いことから、東西棟の総柱建物と考えられる。棟方位は北に対して約10度東へ振れる。柱穴の掘方は約40cmの丸いもので、深さはP1が25cmと浅いが他は50~60cmで深い。柱は残っていないが、柱穴の上層の違いから柱の太さは20cmほどであったと推定できる。出土遺物はないので時期は不明である。遺物がないことや建物の方向がSB01と同じことから12世紀中頃の可能性が高い。
土坑（第11・13・14図、図版7~9）

SK01・02（第11図、図版7・9）

SB03の西側で、SB05と接続するところにある。SB03と05とが接続する建物であることは、これがあることでも推測できる。05の西側に接してある。柱穴が伴うことから、建物から張り出す上屋が架かっていたと考えられる。いず



第5図 平安時代末期の遺構配置図（約1/300）

れも上部径90cm底部径40cm深さ35cmで、約20cmの間をおいて並んでいる。覆土は、黒褐色の粘質土であるが、下層は黄色粘土のブロックが混じる。遺物は、SK01から土師器・常滑または越前、SK02から土師器が出土しており、12世紀中頃とみる。

造構の性格は、土坑が二つ並ぶことから、便所ではないかと考えられた。そこで、覆土を、富山医科薬科大学の上村清助教授に寄生虫の有無を調査していただいた。その結果は別稿のとおりである（付載）。

SK07（第10図）

SB01のP1・2・4・5で囲まれた一画の中央に位置することから、建物に付属するものと考えられる。径約70cm底径40cm深さ20cmで、覆土は黒褐色土である。SK01・02と形態が似ている。出土遺物は、土師器・常滑または越前があり、時期は13世紀前葉とみる。

SK03・04（第14図・図版8）

X6～9Y23・24区にある南北の長さ6.4mの方形の土坑。北側と南側では幅と深さが異なり北側は上幅1.45m底幅1.1m深さ20cm。南側は上幅2.6m底幅1.8m深さ40cm。上層が架かっていたと考えられる。東側辺に柱穴状の穴が並ぶが、その柱間は不揃いで相対する柱穴もないで、上屋建物の柱穴であるかは不明。覆土はいずれも黄褐色または黒褐色であるが、覆土の堆積状況をみると重なりがあるらしい。その場合南側の深いところが時期的に新しい。南側の底には川原石が点在する。出土遺物は土師器・珠洲・瀬戸・青磁・白磁・硯・製塙土器・鉄滓があり、時期は13世紀前半とみる。

SK04は、SK03の西に接する長さ（東西）2.75m幅（南北）1.55m深さ35cmの方形の土坑である。底面は平坦で長さ2.3m幅1.2m。上屋が架かっていたと思われるが、北側南側に柱穴状の穴があり、上屋建物の柱穴であるかもしれない。覆土は黒褐色土で、SK03・04と似ている。出土遺物は土師器・褐釉陶器があり、12世紀後半とみる。

SK05（第13図・図版8）

SK04の西側、SB04の南東隅に位置する。長さ（東西）2m幅（南北）1.5m深さ50cmの方形の土坑。底は長さ1.5m幅90cmで東側はさらに20cmほど深いところがある。そのなかに、焼けた河原石がまとまって入っていた。SB04に伴う炊事場のような場所であるかもしれない。覆土は黒褐色土で、SK04・05と似ている。出土遺物は、土師器・白磁があり、時期は12世紀後半とみる。

井戸SE01（第15図・図版8）

川SD02と重なっており、川が埋まった後につくられた井戸¹⁴。上部径約1m底径75cm深さ約1mで、底部中央に径30cm深さ約20cmの円形の掘り込みがある。覆土は黒褐色土で、途中に10～20cm大的の河原石がまとまって入っていた。この右は、井戸枠の一部として使われていたものかもしれない。出土遺物は土師器があり、時期は13世紀前半とみる。

川SD02・舟着き場SX01（第15図・図版9）

SD02は川SD01の右岸から出て西北方向へ流れる川。検出面での川幅は1.5mであるが、当時の川幅は約3mである。川の断面はV字形で、覆土は上層が灰褐色砂質土、下層が褐色砂礫土である。砂礫土は水の流れが強かったことを物語る。出土遺物は、土師器・白磁碗があり、時期は12世紀とみる。

SX01は、SD01から約10m入ったところである。SD02の左岸に褐色の細かい砂を敷き詰めている。砂は2.5m四方に約10cmの厚さで盛られており、硬く締まっている。盛り砂の両側は溝で区画され、川の岸辺と塙をつけている。盛り砂の上面はSD01側にゆるく傾斜している。盛り砂は川へ下りる際に滑らない工夫であろう。川はその部分では川底が平坦になっている。水の流れを緩やかにする工夫であろう。この場所の西側には倉庫と考えられるSK03・04もある。このようなことから、ここは、舟を係留し荷物の上げおろしをする舟着き場と考える。SD02は13世紀には埋まっているので、舟着き場の時期は12世紀である。

川SD01（第16図、図版8）

川幅約10m深さ1.5mの自然河川とみられる。この川は、東海北陸自動車道敷地の発掘調査で発見されているSD701となつがる〔富文振1994〕。川は、南東方向から流れてきて、この場所で北へ流れを変え、現在の権現堂川にはほぼ合流する。現在の権現堂川は、ここから約100m東に流れているが、かつてはここを流れていたかその分流があつたと考えられる。覆土は、上層が灰黒（褐）色土、下層は黄褐色砂礫土である。上層からは近世陶磁器が出土し、下層からは土師器・珠洲・常滑または越前・白磁が出土した。川は13世紀前半まで流れていたようであるが、それ以降は水の流れはなく、江戸時代には水田となっていたらしい。

集石遺構SX02（第16図、図版7・9）

SB02・03の東に接するところにある。SB03の東側柱列の柱穴を覆うので、SB03建物より新しい遺構と考えられる。一辺5~40cm大の河原石が長さ約5m幅1.5mの範囲にほぼ水平に集まっている。石の位置は地山面から30~40cm浮いた状態である。この高さは当時の地表面にあたるのであろう。

この集石の下を地山面まで掘り下げたところ、もう一群の集石があった。この集石は、5~10cmの小さい河原石を長さ（南北）1.7m幅（東西）60cmの範囲にほぼ水平に集まっている。集石の下は深さ10cmほどの浅い穴になっており、南端には径50cm深さ70cmの深い穴がある。上の集石と下の集石との間に、白磁の完形に近い桶があった。

上の集石の石は焼けているものが多い。炭や焼け土も混じっており、ここで火を使う作業が行われたことがわかる。また、石に混じって、上師器・白磁・瀬戸・製塙土器・鉄滓・フイゴの羽口が出土した。このようなことから、ここでは、製塙土器があるので製塙（焼き塙）作業が、鉄滓・フイゴの羽口があることから製鉄（小鍛冶）作業が行われたことが想定される。下の集石は焼けておらず、遺物も含まれていない。上の集石で行われる作業のための除湿を目的としたものであろうか。

この遺構で注目されることに、白磁が多いことがあげられる。白磁は集石の周辺出土のものを含めると23点以上で、皿・碗・花瓶・小壺などの種類がある。破片が多く、意図的に打ち欠いたものもある。上師質小皿には底部穿孔のものがある。そのようなことから、白磁は、製塙作業や製鉄作業にあたって祭祀がおこなわれ、その際に用いられたことが考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から12世紀後半とみる。

溝SD07・08（第15図、図版6）

建物群の西方約20mのところにある。その間には江戸末～明治時代の遺構があるが、埴物群と同時期の遺構は全くみられない。溝はいずれも幅30cm深さ30cmほどで、南から北へ西寄りに走る。SD08は途中で西へ屈曲している。覆土は褐色土で、基本土層の②層とよく似ている。溝のあたりの②層は酸化鉄分が多く含まれており、湿地であったことを思わせる。出土遺物は土師器があるが、詳細な時期不明である。

③遺物（第20~24図、図版第14~16）

縄文時代中期・後期、奈良時代末～平安時代初期、平安時代末～鎌倉時代前期、南北朝～室町時代のものが整理箱で約48箱ある。ほかに、江戸時代末～明治時代の陶磁器などが約14箱出土した。

A. 縄文時代（第20図、図版14）

縄文土器（46~51）・磨製石斧（52）・打製石斧（図版14）がある。

46は隆起線と半隆起線による曲線文様がある深鉢で、時期は中期中葉（古府式）。47は凹線文がある深鉢で、時期は後期後葉（井口式）。48は沈線文がある鉢で、時期は後期末（本江広野新期）。49は斜縄文の深鉢。50は口縁部内側にとぎれとぎれの沈線が巡る鉢で、時期は後期末（本江広野新期）。51は無文の碗。52は側刃が平な磨製石斧で、時期は中期であろう。石質は黒色で白い粒が混じる安山岩と思われる。

B. 奈良末～平安初期（第20～24図、図版14～16）

土師器（53～55）・須恵器（56・57）がある。

53は口縁端部が丸みのある鍋。54・55は口縁端部が三角形になる甕。56・57は底部が薄く平坦で、体部の外傾度約50度である。これらの時期は8世紀末～9世紀初期とみる。

C. 平安末～鎌倉前期（第20～24図、図版14～16）

土師器、珠洲、常滑または越前（渥美が含まれるかもしれない）、瀬戸、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器、製塙上器、石製硯、鉄滓、フィゴの羽口、炭化米がある。

獨立柱建物

SB01（58）58はP9出土のロクロ土師器碗（注1）。ほかにP3から土師器が出土した。

SB02（59・60）59はP20出土の土師器皿、60はP14出土の小さい玉縁の白磁碗。ほかにP2・P4・P18から土師器皿、P4から白磁、P18から鉄滓が出土した。

SB03（61～67）61はP11、62はP19、63・64はP2出土のロクロ土師器碗。64は底部に糸切り痕を残す。65はP18出土の土師器で、底部が厚く高台状になる。66はP16、67はP15出土のヨコナデ土師器皿（注2）で、口縁部のヨコナデが二段になるいわゆる二段ナデの皿。67は高台が付く。ほかにP4・P6・P10・P13・P14・P17・P18・P19から土師器、P15から製塙土器が出土した。

（注1・2）ここで、ロクロ土師器というのは、ろくろの回転力を使って成形した素焼き土器で、底部に糸切り痕を残す。ヨコナデ土師器というのは、手づくね成形の素焼き土器で、口縁部を横なでするもの。筆者はこれまで中世の素焼き土器について、土師質小皿、土師質土器、かわらけなどという用語を用いてきたが、近年は中世土師器と呼ぶ研究者が多いので、それにならう。なお、北陸地方の研究者は、ここでいうヨコナデ土師器を非ロクロ土師器と呼んでいる。

[宮田1995]

SB04（68～71）68はP8出土のロクロ土師器碗。69はP1出土のヨコナデ土師器皿。70はP8出土の土師器。底部が厚くいわゆる柱状高台のもの。71はP1出土の白磁小壺。ほかにP3～7・P9・10から土師器が出土した。

SB05（72～74）72はP2出土のロクロ土師器。底面はヘラケズリされ、刺突状のくぼみがある。73はP2、74はP3出土のヨコナデ土師器皿。74は二段ナデである。ほかにP1・4・5から土師器が出土した。

SB06（75・76）75・76はP4から出土したロクロ土師器皿。ほかにP1・2から土師器、P2・4から製塙土器と鉄滓が出土した。

建物付近の包含層（110～219）SB02～06建物群の包含層中から、土師器、珠洲、常滑、白磁が出土した。

110～114・116～119はロクロ土師器皿で、底部に糸切り痕が残る。115はロクロ土師器の柱状高台皿。底部は糸切り後ヘラケズリをしている。202・205も同様の皿と思われるが、202は底部が中空である。200はロクロ土師器碗。底部は糸切り。201は浅く復元したが土師器碗であろう。203・204はロクロ土師器。底部は糸切り後ヘラケズリをしている。203は底部がわずかに上げ底状になる。206・307は二段ナデ土師器皿。

208は珠洲甕。ラッパ状に開く頸部と口縁部断面が三角形に尖る特徴は、法住寺2号窯に類例を見いだすことができる。珠洲編年第Ⅱ期（13世紀前半）にあたると思われる〔吉岡1994〕。209は大きく開く頸部にやや受け口状の口縁部がつく。外面はあざき色の色調、内面は灰がかる。常滑または越前の広口甕とみられる。口縁部は狭い縁帯をなす特徴から、常滑第二段階（12世紀後半～13世紀中葉）にあたるものと思われる〔赤羽1977〕。210は灰白色をした甕の底部で、常滑と見られる。常滑とみられるものには、押印文があるものがある。また、灰黒色で弧状沈線文がある破片もあり、渥美ではないかと思われる。なお、ここで常滑または越前とするものは、梅原胡麻堂遺跡でも類似したものが出土している。吉岡康暢氏はそれを珠洲1期のものと位置づけている〔吉岡1994〕。

211・212は口縁部が大きい玉縁となる白磁碗IV類、213は縁の沈線を引く白磁小壺。214～216は白磁皿VII類。216は底部にわずかに高台状のものを削り出した白磁皿VII類。217～219は白磁碗の底部である。これらの白磁は、中国宋代の輸入品である。施IV類・皿VII類・VIII類は、わが国では11世紀後半から現れ、12世紀に入ると増加するといわれる〔横田・森田1978〕〔山本1995〕。

土坑

SK01 (77・78) 77はロクロ土師器碗。78は外反する口縁部で、外面はあざき色の色調、内面は自然釉がかかる。越前または常滑の變か壺とみられる。口縁端部が尖り縁帯がまだ無い特徴は、常滑第一段階（12世紀中葉）に類似する〔赤羽1977〕。覆土を水洗いしたところ、炭化米が出土した。

SK02 (79・80) いずれもロクロ土師器皿である。底部が厚く高台状になる。

SK03 (85～99) 85～95はヨコナデ土師器皿である。口縁部は外傾する。ヨコナデ幅が比較的狭い86・90・94・95とやや広い85・87～89・91～93に分けることができる。広いものには、85・95のほうに口縁端部が屈曲して立つものがある。93は二段ナデの名残りをとどめる。95は口縁部が直立ぎみに立つ。

96は白磁碗。97・98は青磁蓮弁文施。青磁蓮弁文施は龍泉窯系の輸入磁器で、わが国では13世紀初頭から出土がみられ中頃に増加するとされる〔山本1995〕。

99は石製の硯である。石材は緑灰色しており粘板岩とみられる。幅7cmの長方形であるが、長さは不明。上部に四葉形の彫り込みがある。同じ形態のものは知らないが、四葉形の装飾は福岡県太宰府跡や神奈川県千葉地遺跡などから出土している硯にみられ、水野和雄氏はその時期を13世紀代とする〔水野1985〕。このほかに珠洲の叩き變の胴部、瀬戸瓶子、製塙土器、鉄洋が出土している。SK03の北側に隣接するP19から、漆が付着した土師器が出土した（図版15下）。この土師器は、漆の喰製作業に用いた容器である。

SK04 (81・82) いずれもヨコナデ土師器皿。口縁部のヨコナデは狭く外傾するが、81はやや内傾、82は外反する。ほかに外面に褐色釉がかかる褐釉陶器とみられる胴部片（図版15下）が出土した。

SK05 (83・84) いずれもヨコナデ土師器皿。口縁部のヨコナデは狭く外傾する。ほかに白磁が出土した。

SK07 (100～102) 100・101はヨコナデ土師器皿。100は口縁部の幅が広く、端部が立つ。102は外反する口縁部で、外面は灰色がかったあざき色である。常滑または越前の広口壺とみられる。口縁端部が下方に垂れて縁帯をつくる特徴は、常滑第二段階（12世紀後半～13世紀中葉）に類似する〔赤羽1977〕。

SE01 (103・104) いずれもヨコナデ土師器皿。口縁部のヨコナデは広く外傾する。覆土を水洗いしたところ、炭化米が出土した。

X9Y18区一括 (105～109) いずれもヨコナデ土師器で、口縁部が二段ナデの土師器皿。ただ、66・67 (SB03・P16出土) の二段ナデ土師器皿の口縁部が外傾するのに比べ、これらはナデ境の稜線があまく、端部がやや内済する点で違いがある。

SX01 (220～244) 上師器、製塙上器、白磁、瀬戸、鉄洋、フィゴの羽口が集石の間から出土した。220～222はロクロ土師器皿、220・222は底部へラケズリ、222は底部を焼成前に穿孔している。223は高台が付く土師器皿であろう。224・225はロクロ上師器碗。226は二段ナデ土師器皿。下層集石南の穴から出土した。227～229は、赤褐色の色調、砂っぽい胎土、器表面の細かいひび割れや接合痕を残すなどの特徴があり、製塙土器と思われる。製塙土器は、細かく割れており全体を復元できるものはない。底部は厚さ1cmほどの厚みがあるので、比較的残りがよく、底径は約7.5cmである。口縁部が1点あるが、厚さ5mmと薄く小片であるので口径は不明。ラッパ状に開くらしい。胴部の破片は厚さ5～7mmのものがあり、それらをつないでみると、おおよそ口径15cm、高さ17～18cmほどの高さになるのではないかと思われる。製塙土器の量は、整理箱に1箱ほどあるが、底部の数は5個体ほどである。

230は、胴部に3本の沈線が巡る瀬戸灰釉小壺である。類例を知らないが、他の遺物との共伴から、その時期は12世紀後半と思われる。

231～233は小さい玉縁の白磁碗Ⅲ類、234は白磁輪花杯Ⅰ類、235～237・239～241は白磁皿VI類。242～244は白磁碗V類で内面に陰刻線体があり、猫搔風の波状文がある。口縁部は242はやや肥厚するが243はくの字に折れる。碗Ⅲ類・V類・VI類は、わが国では11世紀後半に現れ、12世紀に入ると増加するといわれる【横田・森田1978】【山本1995】。

SD01 (245～274・285～289) 下層から、土師器・珠洲・白磁・青磁・上層から土師器・珠洲・青磁・青白磁・越前などが出土した。245は、ロクロ土師器碗。底部には糸切り痕があり、くぼみがある。246は高台が付く土師器、247は二段ナデの土師器皿。248～267はロクロ土師器皿である。口径7.5～10cmの小皿と13～17cmの大皿がある。口縁部は外傾するが、248～254・256～260は口縁端部が屈曲して立つ。266はヨコナデ幅が広く外反ぎみである。267は口縁部が直立ぎみに立つ。268は珠洲の鉢で、体部上部と口唇部に捺書き波状文が巡る。吉岡康暢氏はこれを堤子と呼び珠洲第1期(12世紀中葉・後葉)に含める。269は口傾部が外傾口縁の片口鉢で、珠洲編年第二期(13世紀前半)である【吉岡1994】。270は小さい玉縁の白磁碗Ⅲ類。271は白磁碗の底部。272は白磁碗V類。273は白磁小壺の底部。274は白磁壺の底部。白磁はほかに水注の頭部もある。

280はロクロ土師器皿。281～284はヨコナデ土師器皿。281～283は口縁部のヨコナデ幅が比較的狭いが、284はやや広い。281は二段ナデの名残りをとどめ、282は口縁部が直立ぎみに立つ。285～288は珠洲片口鉢。285は269と同類であり珠洲編年第二期(13世紀前半)、286は口縁部が外傾するものでやや肥厚ぎみであり珠洲第三期(13世紀後半)、288は口端面が内側に傾斜し横口波状文を巡らす。西方寺2号窯に類例があり珠洲編年第六期(15世紀後半)にあてられる【吉岡1994】。288は断面に漆が付着し、補修されている。289は白磁。290は青磁。291は蓮弁文がある青白磁合子。292は青白磁合子の蓋である。青白磁合子は12世紀中頃から後半に増加が認められるという【山本1995】。図示していないが、青磁には、12世紀後半の指標とされる内面刻花文の範もある。

SD02 (275～277) 275はロクロ土師器皿、76は二段ナデ土師器皿である。277は小さい玉縁の白磁碗Ⅲ類である。その他の包含層 (278・279・293～308) 近世以降の造構や平安末～鎌倉前期の造構群とは離れた調査区の包含層出土のものである。278・279はSD04・05から出土したものだが、この造構は近世造構の水田の用水路とみられるものである。278・279・293～296はヨコナデ土師器皿。298・299はヨコナデ幅が広い。298は端部が立つ。293～295はヨコナデ幅が二段ナデの名残りを残す。296は口縁部が直立ぎみに立つ。297は小さい玉縁の白磁碗Ⅲ類。298・299・301は大きい玉縁の白磁碗IV類、300は白磁碗V類。302は口縁端部がI禿の白磁皿IX類。303は蓮弁文を弧線と縦線で表現する青磁碗。このような青磁碗は、16世紀前半から中葉に出現するといわれる。

304～307は珠洲。304・305は口縁部が方頭くの字口縁の甕で、馬縫窯に類例があり珠洲編年第三期(13世紀後半)。306は口縁部が水平口縁の片口鉢で珠洲第四期(14世紀前半)。307は胴部上位に横口波状文を巡らす小型壺で珠洲編年第二期(13世紀前半)。

308は常滑と思われる壺の口縁部。口縁端部を上下に拡張させる特徴は常滑第三段階(13世紀後半～14世紀中葉)にあたる【赤羽1977】。

309は瓦質すり鉢。軟質で内外面黒色。内面におろし目がある。畿内では瓦器すり鉢は14世紀末に出現するようである【菅原1989】。

5. 8 地区の概要

(1) 地形と層序

8地区は南側で海抜約69m北側で約68mで、北へ向かってゆるやかに傾斜している。地表から黄白色の地山面までの深さは25~50cmで、その間は大きく二層に分かれる。①層は現代の耕作土で約20cm、②層は暗灰黄色で10~30cmで、江戸～大正時代の堆積土である。中世以前の包含層は認められない。

(2) 遺構（第9図・図版10）

調査区南西部と北側中央部で中世の溝3（SD01・03・05）が発見された。また北側東寄りでは自然川跡とみられる落ち込みがあった。その他江戸～大正時代の水路SD02・04や穴SK01がある。

SD01（第9図・図版10）

幅3m深さ90cmで、底が平坦な溝である。東西にのび、西側で北へ流れ自然河川とつながるものと思われる。出土遺物は、土師器と磁石があり、時期は12世紀後半～13世紀とみる。

SD03（第9図・図版10）

幅2.2m深さ40~50cmで底が平坦な溝が約8.6mの間をおいて東西に並行する。この溝はコの字状につながるらしく、南溝の落ち込みがある。方形に巡るとすれば、敷地を区画する区画溝になる。出土遺物は珠洲・青磁があり、時期は13世紀後半とみる。

SD05（第9図）

幅1.2m深さ30cmで、底が平坦な溝。東西にのびる。出土遺物はないが、覆土が黒褐色でSD03と同じである。

(3) 遺物（第19図・図版13）

绳文時代後期、平安末～鎌倉時代のものが整理箱で1箱ある。

A 綱文時代（第19図・図版13）

绳文土器（310・311）・打製石斧がある。310は口縁部に凹線文が巡る後期後葉の深鉢、311は条痕文があり晩期後葉の深鉢と思われる。

B 平安末～鎌倉時代

土師器・珠洲・瀬戸・青磁・白磁・鉄滓・磁石がある。

SD01（312・313） 312はヨコナテ土師器皿。ヨコナテ幅が比較的狭い特徴から、時期は12世紀後半～13世紀前半と思われる。313は凝灰岩製の磁石。

SD03（314） 314は珠洲片口鉢。口縁部が外傾する特徴は珠洲編年第Ⅲ期（13世紀後半）になろう。ほかに珠洲甕洞部と青磁が出土している。

包含層（315～317） 315は玉縁口縁の白磁皿。316は青磁皿。317青磁蓮弁文碗で、13世紀前半か。このほかに瀬戸・鉄滓がある。

6 9地区の概要

(1) 地形と層序（第2・6図）

9地区は海拔約72.4mである。地形は、調査区南東から北西にむかってゆるやかに下降する。地表から地山面（遺構確認面）までの深さは60～70cmあり、その間は大きく4層に分かれる。①層は現代の耕土、②層は灰黒色土で江戸時代の遺物が含まれる。③層は黒褐色砂質土で中世の遺物を含み、⑤層は平安時代前期、鎌文時代の遺物を含む黒色土である。④層の黄褐色砂質土は部分的に含まれるもので、③層と⑤層の間にあることから、平安時代と中世の間で川の氾濫があったと思われる。

① 層耕土
② 層灰黒色土（江戸）
③ 層黒褐色土（中世）
④ 層黄褐色砂質土
⑤ 層黒色土（平安前・鎌文）
⑥ 層黄色土（地山）

第6図 9地区の基本層序

(2) 遺構（第17、18図、付図4）

平安時代前期の竪穴住居跡1・掘立柱建物1、中世の土坑8・井戸1・区画溝1・ピット群等がある。

A. 平安時代

竪穴住居跡SI01（第17図、図版11・12）

調査区中央部南より位置し、南北4.5m×東西3mを測る。建物の方位は南北方向より西に5度ふれる。床面積は約13m²である。ただし、東側半分をSK01に、南側を若干SK02によって切り取られているため、完全な形での検出は出来なかった。住居跡中央部分には貼床を施し、南西部隅にカマドが設けられている。カマドの南には、南北70cm余り、東西80cm～1m、深さ約10cmのP14が存在する。P14の埋土は焼土混りの褐色砂質土であることから、SI01のカマドに伴う煙道の役目を果たしていたと思われる。貼床は3～5cmの厚さで、暗褐色の砂質土を敷いており、かなり堅く締まっている。SI01の出土遺物は、須恵器の杯・蓋、土師器小型壺・壺の底部等、P14からは土師器の壺の体部が出土している。これらの遺物から、住居跡の時期は9世紀前半と考えられる。

掘立柱建物SB01（第18図、図版11）

調査区の西側、地山が疊で覆われた部分に位置する。2間（4.5m）×2間（4m）の、やや南北に長い縦柱建物である。棟方位は東に5度ふれる。面積は約18m²。SB01P1～P9の柱穴群の掘り方は方計に近い円形で、直径40～50cmを測る。深さは20～30cmで、疊層を掘り込んでいる。SB01P2の南30cmの所に、直径30cmのP7が存在する。P7からは須恵器の壺（時期不明）が出土しているが、建物の柱穴から出土遺物はない。そのため、建物の時代特定は難しいが、柱穴内の埋土が黒色砂質土であることから、古代の建築物と考えられる。

溝SD04（第18図、図版12）

SD04は調査区西側、SB01のP5とP6の中間から南に向かって真っ直ぐに伸びている。幅約80cm、深さは深い所で20cm、浅い所で約5cmである。埋土は黒褐色砂質土であるが、遺物は出土していない。先端部分でSB01P6に切られている。SB01の排水路的役割をになっていたとおもわれる。

ピット群（第17・18図、図版11・12）

規則性はないが、古代の遺物が出土しているものが幾つかある。そのなかでも、P15・P22・P5は3.5m～4mの間隔でP22を軸に南と西にはば直角に交わっており、建物跡を構成していたようである。P15からは須恵器壺の体部破片、P22・P5からはともに、土師器・壺の体部破片が出土している。また、P9は焼土混りのピットで、土師器・壺が出土しており、周辺からも遺構内・包含層からともに古代の遺物の出土が目立つ。

土坑SK01（第17図、図版11）

調査区中央部よりやや東側に位置する。長軸5m×短軸3m、深さは約90cmを測る。長方形の大型土坑である、基

本土層③層黒褐色土から掘り込んでおり、SI01の東側半分を切り取っている。出土遺物には中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁といった中世の遺物だけではなく、古代の土師器壺、須恵器壺、製塙尖底土器も出土しており、SI01で使用されていたであろう遺物を含んでいることがわかる。

SK02（第17図、図版11）

調査区中央部南側に位置する。ほぼ、方形をなし長軸2.5m×短軸2.3mを測る。東側約3分の一を深さ約45cm、残りの西側3分の2は深さ60cmで底が2段になる。深い所には、20~50cm大の石を詰め込んでいる。この石は河原石であるが1角を打ち欠いてある。うち欠いた面を外側にして石垣のように積み上げてあったものと推定される。（図版12の9）出土遺物には、SK01同様、SI01の遺物であろう土師器・須恵器を含む。中世遺物には、土師器皿、珠洲等がある。

その他の土坑（第18図、図版11・12）

SK03は一辺約2.8mの方形である。深さは約20cmで、覆土は黒褐色砂質土、礫を多く含む。出土遺物に、青磁・白磁等の中国製磁器が目立つ。その他、土師器皿、珠洲も出土している。

SK06は、長軸2.3m×短軸1.6mの南北に長い長方形をなし、深さは約20cmを測る。土師器皿らしき上器破片が出土しているが、時期は特定できない。

SK07は、長軸2.4m×短軸1mを測る。③層黒褐色砂質土より切り込んでおり、中世期の遺構と考えられる。土師器皿が出土している。

調査区中央部やや東寄りに位置するSK08は、その南辺が残っていないが、長軸3.5m×1.2mの東西に細長い土坑である。深さは約10cm。出土遺物は無かった。

井戸SE01（第17図、図版11・12）

SE01は調査区中央部南寄りに位置し、SK09、SK10に挟まれた形になっている。直径約1.5m、深さは約1.1mと、底に向かってすぼまっている。底に近い部分の埋土は、黄褐色砂礫土で、底の形は四角形をとっており、井戸枠の跡ではないかと考えられる。出土遺物には、土師器の壺・椀、珠洲のすり鉢があり、珠洲は第IV期（14世紀）に属する。

溝SD01・02（第18図、図版12）

SD01は幅約70cm、深さ平均50cm、SK01の東方3mの所に南から北に向かって走る。SD02は幅約60cm、深さ28cmで調査区北側の所で東西に走る溝である。SD02はSD01よりやや細く、浅いがSD01とつながる。溝の南西にある遺構を開むようにあることから、これらの遺構を外部から区画する溝と思われる。SD02からは遺構は出土していないが、SD01からは土師器皿、珠洲、青磁が出土しており、時期は12世紀後半から13世紀である。また、上層から青花が出土しており、16世紀後半以降の新しい溝が重なっている。

（3） 遺物（第25~27図、図版17・18）

縄文時代後期・晚期、平安時代前期、中世のものが整理箱で36箱出土した。

A. 縄文時代

縄文土器318~321がある。いずれも包含層より出土したものである。318は縦の手状の条線文がある深鉢の口縁部である。319は平行沈線文のある深鉢である。320は磨消縄文のある深鉢である。321は同心円文のある深鉢である。これらの土器は、後期中葉に属する。この他国示していないが、晚期の条痕文の深鉢、打製石斧1点が出土している。

B. 平安時代

SI01とその周辺（322~336）

322から324は須恵器の杯、325は杯蓋、326・327は土師器小型の壺。328は土師質の高台付きの杯であるが、須恵器

の生焼けのものであるかもしれない。330は土師器の鍋である。324は高台が付くものであろう。SI01に関連すると思われる土器が、SK01・02からも出土している。355・356は土師器の椀である。331・334は土師器の甕である。332・335は土師器の鍋である。333は、製塙尖底土器である。須恵器の杯蓋の端部が丸いこと、土師器の甕や鍋の口縁部が尖り気味に立つ特徴があり、9世紀前半に属する。

P15はSI01の東3mの所にある柱穴状の穴である。土師器の鍋336と須恵器の甕の胸部344が出土した。336の口縁端部はSI01様相り一段階古い特徴である。8世紀末～9世紀初頭か。外面頸部には煤の付着がある。

包含層 (337～343・345～348・361・362・374)

337～339・343は須恵器の杯である。340～342は須恵器の杯蓋である。345～347は土師器の甕である。348は双耳瓶である。361・362・374は土師器の椀である。338～343・348は、X5～10Y7～10の範囲からまとまって出土した。須恵器の杯の底部が丸いことや、杯蓋の端部が三角に尖る特徴は、SI01の特徴より一段階古い特徴で、時期は8世紀末～9世紀初頭とみる。

C. 中世

SK01 (349～354)・02 (355・358)・03 (359・360)

349は底部に糸切り痕を残す土師器の皿である。350・351は口縁部を横撫する土師器の皿である。352は珠洲のすり鉢（片口鉢）の底盤である。353は瀬戸の皿で口縁部が折れる。354は青白磁の合子の蓋である。珠洲の片口鉢はおろし目を米印に描く特徴から、珠洲編年第IV期（14世紀）に属する。

357は底部糸切りのロクロ土師器の皿である。358は珠洲の蓋の底部である。

359は体部に蓮弁文をもち、口縁部が屈曲する青磁の皿である。360は口縁部が大きな玉ぶちになる白磁の碗である。359は14世紀代に、360は13世紀代に出土が知られる。

SE01 (363・364)

363・364ともに珠洲のすり鉢である。珠洲編年第IV期（14世紀）に属する。夏土を水洗いした所、炭化した米、麦、マメ類が検出された。

SD01 (365～368)

365は口縁部を横撫する土師器の皿である。13世紀に属する。367は珠洲甕の口縁部である。珠洲編年第I期からII期で（12世紀後半から13世紀初頭）ある。368は内面に沈線文様のある青磁である。12世紀後半である。366は青花の皿である。上層の新しい溝に伴うものである。

その他の遺構 (369・370)

369は口縁部を横撫する土師器の皿である。370が手づくねの土師器の皿である。

包含層 (371～373・375～390)

371～373は土師器の皿である。375～381は珠洲焼である。375・376は甕の口縁部である。377・378は片口鉢である。379は盃である。380・391はすり鉢の底部である。珠洲編年第IV期（14世紀）に属する。382は瀬戸の灰釉碗である。13世紀後葉である。383は瀬戸美濃の天目茶碗、384は瀬戸のおろし皿である。385・387・389は青磁の碗である。385は14世紀、387は16世紀、389は15世紀とみる。386は青白磁の皿で16世紀に属する。388は白磁の碗である。12世紀とみる。390は瓦器の火鉢で、花紋のスタンプがある。14世紀に出土が知られる。

付載

梅原落戸遺跡泥土の寄生虫分析

富山医科薬科大学
医学部 寄生虫学教室
助教授 上村 清

検体 福光町梅原落戸遺跡 7 地区SK01、SK02 のトイレ跡と思われる遺構内の土壤

処理 直接法 グリセリンにて少量を直接検鏡

集卵法 ホルマリン・エーテル法 (MGL)	各土壤 1 g
硫酸食塩水薄遊法	同 上
1% リン酸第3ナトリウム過沈法	同 上
フッ素水素酸処理法 (25%)	同 上
アルカリ・酸処理過沈法	同 上

結果 SK01、02、2 検体共寄生虫卵陰性

考察 保存に強い花粉化石も見い出されないため、検体の保存状態が悪くて、寄生虫卵卵殻が保存されなかつた可能性が高い。

平成7年10月18日

IV まとめ

発掘調査の成果から、梅原落戸遺跡の性格などについて列記してまとめとする。

- 繩文時代中期・後期・晩期、奈良・平安時代、中世の遺物が出土し、奈良時代の井戸・溝、平安時代の堅穴住居跡・高床倉庫、平安末～鎌倉前期の掘立柱建物・井戸・集石・舟着き場・川・用水路が発見された。
- 7地区で発見された平安末～鎌倉時代前期の建物群は、大井川の支流である権現堂川の川縁に立地する。梅原地内では、中世に大規模な集落が形成されるようになるが、そのさきがけとなる集落跡である。出土品には、国内産の土師器・珠洲・常滑または越前・瀬戸と輸入陶磁器の出土比率はおよそ65% : 4% : 3% : 1% : 27%である。輸入陶磁器の割合がさわめて高い。土師器・珠洲は地元産とみても、3割近くが遠くはなれた県外あるいは国外から搬入されたものである。このような陶磁器組成や、建物群が権現堂川の川縁に立地し、舟着き場とみられる遺構もあることから、当時の物資の運搬は、舟運で行われたことを窺わせる。製塙土器は、10世紀段階で使われなくなるといわれていたが、今回の発見によって、12世紀後半にも用いられたことがあきらかとなった〔小島・宇野1989〕。また、これまで内陸で出土する製塙土器については、塩の運搬容器として持ち込まれたと考えられているが、この場所で製塙作業が行われていたことが明らかであり、古代末・中世初期における塩生産や流通のありかたについて、あらたな問題を提起するものといえる。この建物群の住人については、「源平盛衰記」や「承久記」にみえる武士団のひとつである河上氏ではないかと考えている。
- 9地区では平安時代前期の堅穴住居跡と高床倉庫が発見された。「越中國官倉納穀交替記」には、この時期のこととして砺波郡川上村に不動倉が置かれていたという記載がある。昨年度の調査では、川上村に先立つ奈良時代前葉の川上里の時期に相当する集落跡を発見しており、今回の発見によって、梅原周辺が古代の川上の地である可能性が一段と高まった。

参考文献

- 福光町教育委員会 1991 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅰ』
福光町教育委員会 1992 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅱ』
福光町教育委員会 1993 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅰ・梅原上村遺跡群Ⅰ』
福光町教育委員会 1994 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅱ・梅原上村遺跡群Ⅱ・梅原落戸遺跡群Ⅰ』
福光町教育委員会 1995 『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅰ』
富山県文化振興財团 1994 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)』
赤羽一郎 1977 「概説常滑」「日本陶磁全集8 常滑 濵美」
中野晴久 1995 「常滑・濱美」「概説 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会編
水野和雄 1985 「日本石硯考—出土品を中心として—」 考古学雑誌第70巻第4号
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』
山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会編
菅原正明 1989 「西日本における瓦器生産の展開」 国立歴史民俗博物館報告第19集
横田賛次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」 九州歴史資料館研究論集4
宮田進一 1995 「各地の土器様相 北陸」「概説 中世の土器・陶磁器」 中世土器研究会編
小島芳孝・宇野隆夫 1989 「北陸における塩生産」「北陸の古代手工業生産」 北陸古代手工業生産史研究会

V 試掘調査の概要

1 調査対象地

事業対象地を縦断する東海北陸自動車道の東側部分が調査対象地であり、これまでの調査から梅原加賀坊遺跡、梅原胡摩堂遺跡が広がっていると推定される部分である。現況は、標高63~78mを測る水田、畠地である。

2 調査の期日

平成7年9月19日~10月20日（実働20日間）

3 調査面積

調査対象面積は、110,000m²（このうち梅原加賀坊遺跡内23,400m²、梅原胡摩堂遺跡内87,600m²）。発掘面積は2,664m²で調査対象面積の約2.4%である。

4 調査の方法

重機（ピックホウ）及び人力でトレーナーを振り下すことによって行った。掘削深度は包含層に含まれる遺物を確認しながら順次振り下げ、最終的には遺構確認面までとした。トレーナーは幅約1mで調査対象地内に計106本設定した。

5 調査の結果

(1) 基本層序

第1層：耕作土、第2a層：黒褐色粘質土（中世の遺物包含層）、第2b層：黒色粘質土（古代の遺物包含層）、第3層：黄褐色粘質土（遺構検出面、地山）である。調査対象地は、遺物包含層が削平され、遺構検出面が耕作土直下に見られる箇所や逆に、耕作土の下に厚い盛土等を行っているところなどが見られる箇所があるなど、旧は場整備の影響を受けている。また、旧河川跡の影響を受けている箇所も多く見られる。

(2) 遺構（第28・29図、図版19・20）

検出した遺構は、掘立柱建物、溝状遺構、土坑、穴（柱穴）、井戸、礎石、川跡等である。

梅原加賀坊遺跡においては、ほぼ現在の権現堂川に沿うような形で旧権現堂川跡を検出した。この中から近代陶磁器がたくさん出土しており、ごく最近まで使われていたようである。この旧権現堂川の西側の11~17Tで、掘立柱建物、溝状遺構、穴等の遺構を多く検出した。遺構検出面は現地表面から深さ20cmと浅い。遺構の時期は、出土遺物から見て中世と思われる。

梅原胡摩堂遺跡においては、調査対象地全体にわたって遺構を検出した。ここでもほぼ現在の権現堂川に沿うような形で旧権現堂川跡を検出した。しかし川跡は、やや東へ振るようである。旧権現堂川の西側の27~53Tは、今回の調査対象地の中でも遺構密度が高い。遺構検出面は、現地表面から深さ約60cmである。遺構の時期は出土した遺物から中世と思われる。検出した遺構のうち、105T、31T、32Tで検出した川跡は、平成2年度に越後富山県文化振興財團が発掘調査を行った際に検出したSD71（中世前期の自然河川）と推定される。また、40Tでは、区画溝のコーナーと推定される部分を検出した。

当遺跡の東側への広がりについては、現在の権現堂川を一つの切りと予想していたが、旧権現堂川の東側部分の64~69Tにおいて出土遺物から古代と思われる遺構を多く検出した。遺構密度は調査対象地のなかでもかなり高い。遺構検出面は、現地表面から約20cmと浅い。ここは、南側から舌状に伸びる段丘上に位置し、現地形からしても権現堂川の西側部分よりも高い所である。今回の調査及びこれまでの調査結果から、遺跡の主体時期は、旧権現堂川の西側は中世~近世、東側は古代であり、よって川の東西において遺跡が形成された時期に差異があるものと推測できる。

県道田中・梅原線と金沢・井波線に挟まれた地区では中世~近世の遺構を検出した。このうち91T、92Tでは、現

地表面から深さ10~20cmほどの浅い地点で旧以速寺跡を示す礎石が見つかっている。91Tでは南側に拡張したところ、約4mの間隔をおいて別の礎石が見つかった。これらのトレンチでは、この他に旧以速寺に関連すると思われる遺構を検出しているが、今回の調査では、性格等までは把握できなかった。この他に、調査対象地の中央を南北に縦断する旧橋本川跡を検出した。現在の橋本川よりも東側にあり、これまでの発掘調査の成果から56T付近で西へ流れを変えるようである。

(3) 遺物（第30・31図、図版21・22）

出土した遺物は、繩文土器（後・晚期）、須恵器、土師器、灰釉陶器、中世土師器、珠洲、青磁、常滑、越前、瀬戸美濃、越中備戸、伊万里、唐津、打製石斧、石臼、砥石、羽口、鉄製品、鋳型等である。遺物は、調査対象地のはば全域で出土し、特に梅原胡摩堂跡でまとめて出土した。

第30図1~6は繩文土器、7~15は須恵器である。このうち7~9は杯蓋、10~13は杯で底部を回転ヘラ切りしている（13は調整不明）。14は高台杯、15は壺である。16は灰釉陶器の椀、17~20は土師器である。17、18は甕、19は小型甕の底部、20は鍋である。古代の遺物の時期は8世紀末~9世紀前半である。当時期の遺物は、主として梅原胡摩堂跡の64~69T付近でまとめて出土した。特に64、65Tでは、遺物の出土量も比較的多い。21は打製石斧である。

第31図22~43は中世土師器である。これらのうち29、41、43を除いては、49Tからの出土である。49Tの中世土師器は、トレンチ東端の現地表面から深さ60~90cmのところに見られる褐色がかる灰褐色粘質土から破片及び完形の状態でまとめて出土した。このように1カ所からまとめて中世土師器が出土したのは、今回の調査において49Tだけである。49T上の中世土師器は、非ロクロ製のもので、口径は8~9cm、12~13cmである。11縁部の形態から面取りするもの、内湾するもの、外反するもの、垂直気味に立ち上がるものなどにタイプ分けができる。24は底部の粘土が剥離している。遺物の時期は、全体的にみて13世紀前半から14世紀初である。これらは、試掘調査では遺物に伴うものとの確認はできなかったが、49Tの北側の63Tにおいて第31図46の鋳型が出土していること、1カ所からまとめて出土したこと、出土地点の褐色がかる灰褐色粘質土がここでしか確認されなかつたことなどから何らかの遺構に伴う可能性が考えられる。43は47T出土である。ロクロ製で口縁部内外面に模の付着が見られる。遺物の時期は15世紀前半である。44、45は珠洲で、このうち44は甕、45はすり鉢である。46は63T出土の中世の鋳型である。鋳型は緩く湾曲しており、直径約46cm（推定）である。周囲に3つの石を伴うような形で出土した。47は常滑または越前の甕、48~50は青磁碗で、50は底部内面に文字が見られる。51は瀬戸美濃のヒダ皿で、91Tからの川土である。52は唐津皿で、内面に砂目跡が見られる。53は伊万里である。

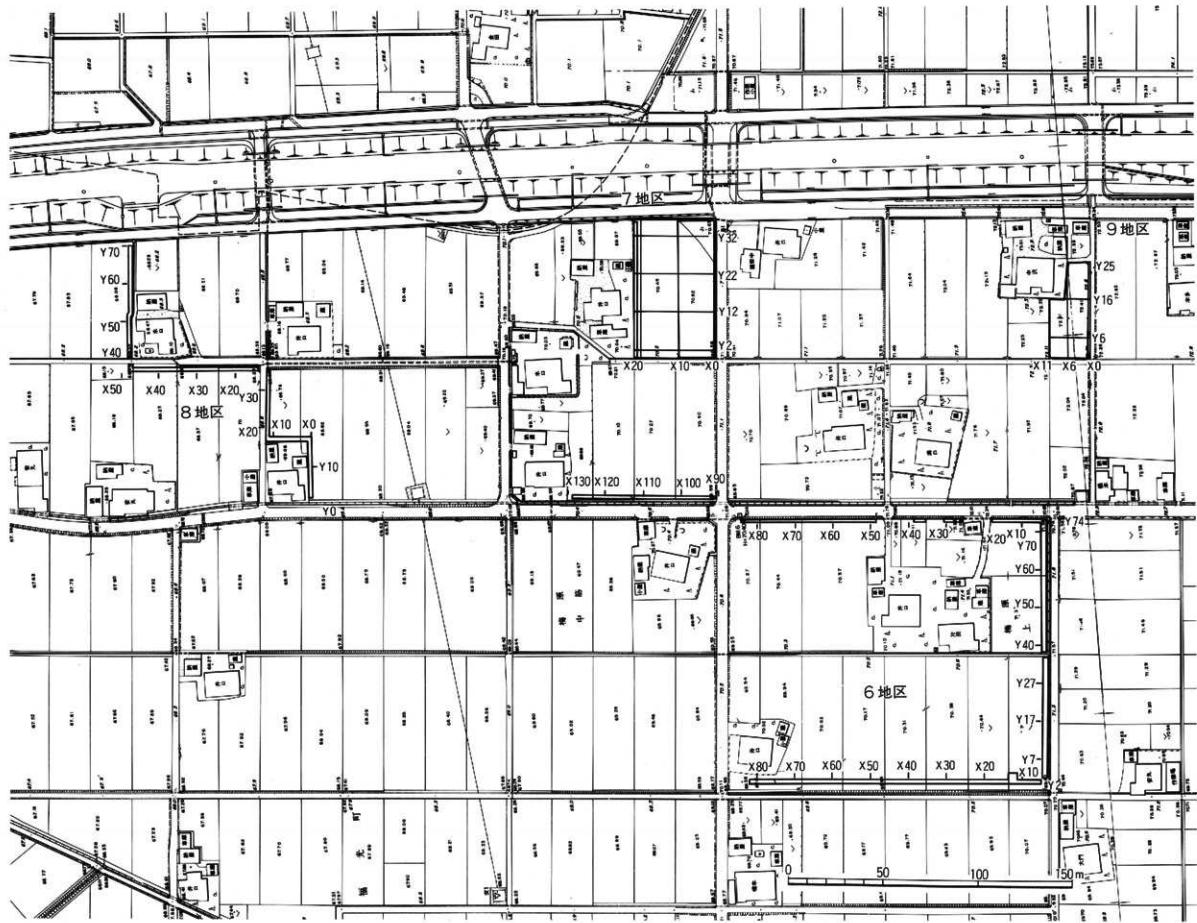
(4) 小結

今回の試掘調査により、調査対象地の全域で古代~中世の遺跡の広がりが確認された。これにより、梅原加賀坊遺跡及び梅原胡摩堂跡が東海北陸自動車道の東側へ広がるものとみられる。

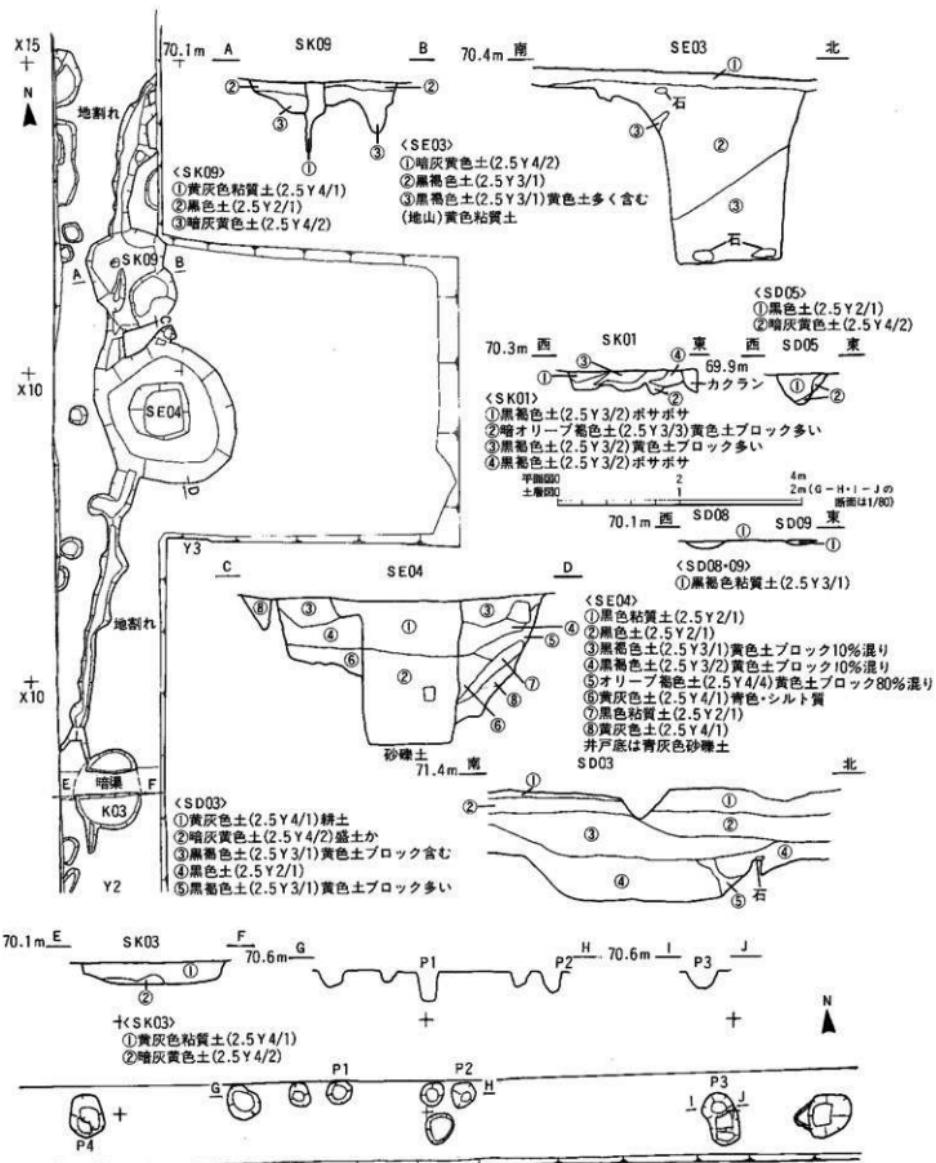
梅原加賀坊遺跡では旧権現堂川以東の遺跡の広がりについては今回調査対象外であったため確認できなかったので、現時点での遺跡の広がりは、旧権現堂川まで（調査対象地全域）とする。

梅原胡摩堂跡では、県道田中・梅原線以北の区域において旧権現堂川跡を検出したが、その西側は、遺構・遺物から東海北陸自動車建設に伴って行われた発掘調査結果とほぼ似た様相を示し、中世（13~15世紀）を主体とした遺跡が広がる。しかし、現在の権現堂川の東の段丘上には古代を主体とする遺跡が広がっており、旧権現堂川を境にその様相に変化がみられるとともに、遺跡はさらに東へ広がるものと推定される。また、調査対象地の南側においても遺跡はさらに南へ広がるものと思われる。今回の調査で確認された各遺跡の面積は、梅原加賀坊遺跡が24,000m²、梅原胡摩堂跡が94,650m²となる（宅地、道路等を含む）。

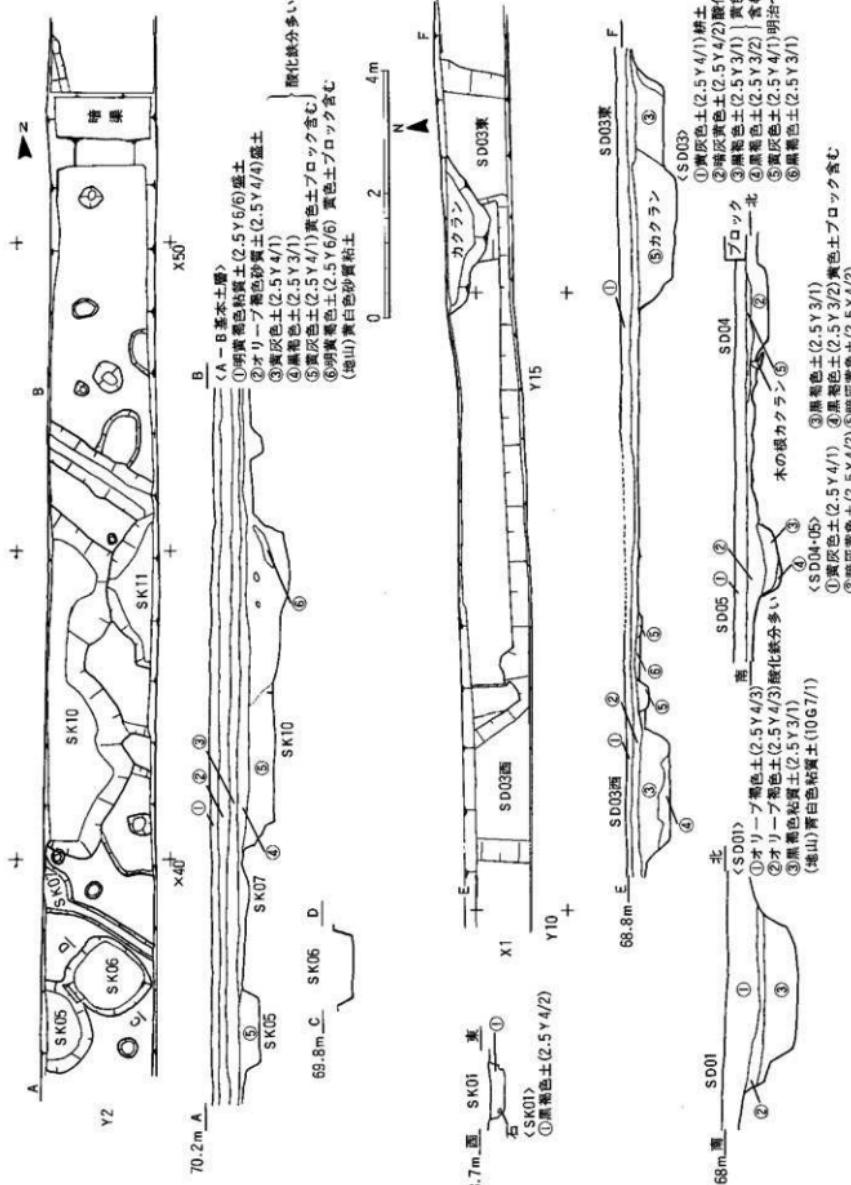
（池田 恵子）



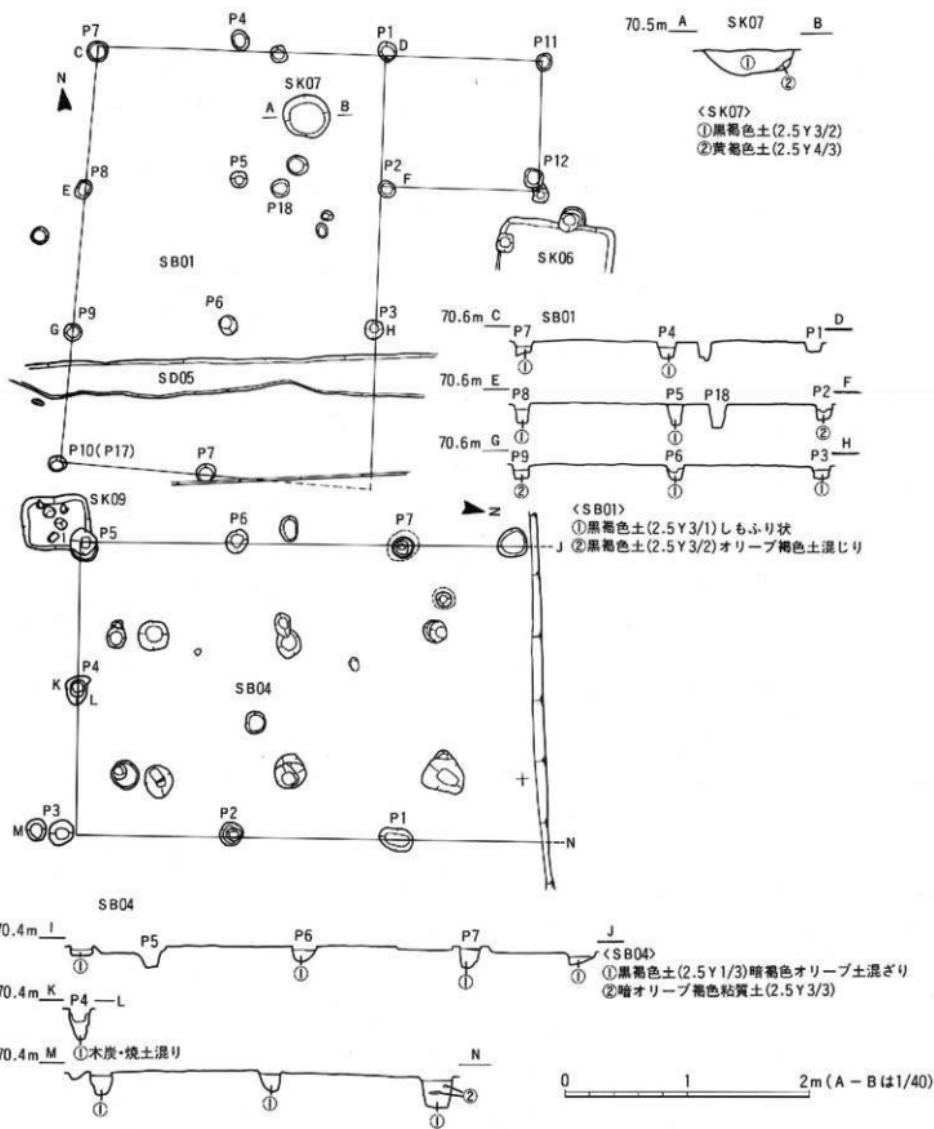
第7図 梅原落戸跡6・7・8・9地区的地形と区割 (1/2,000)



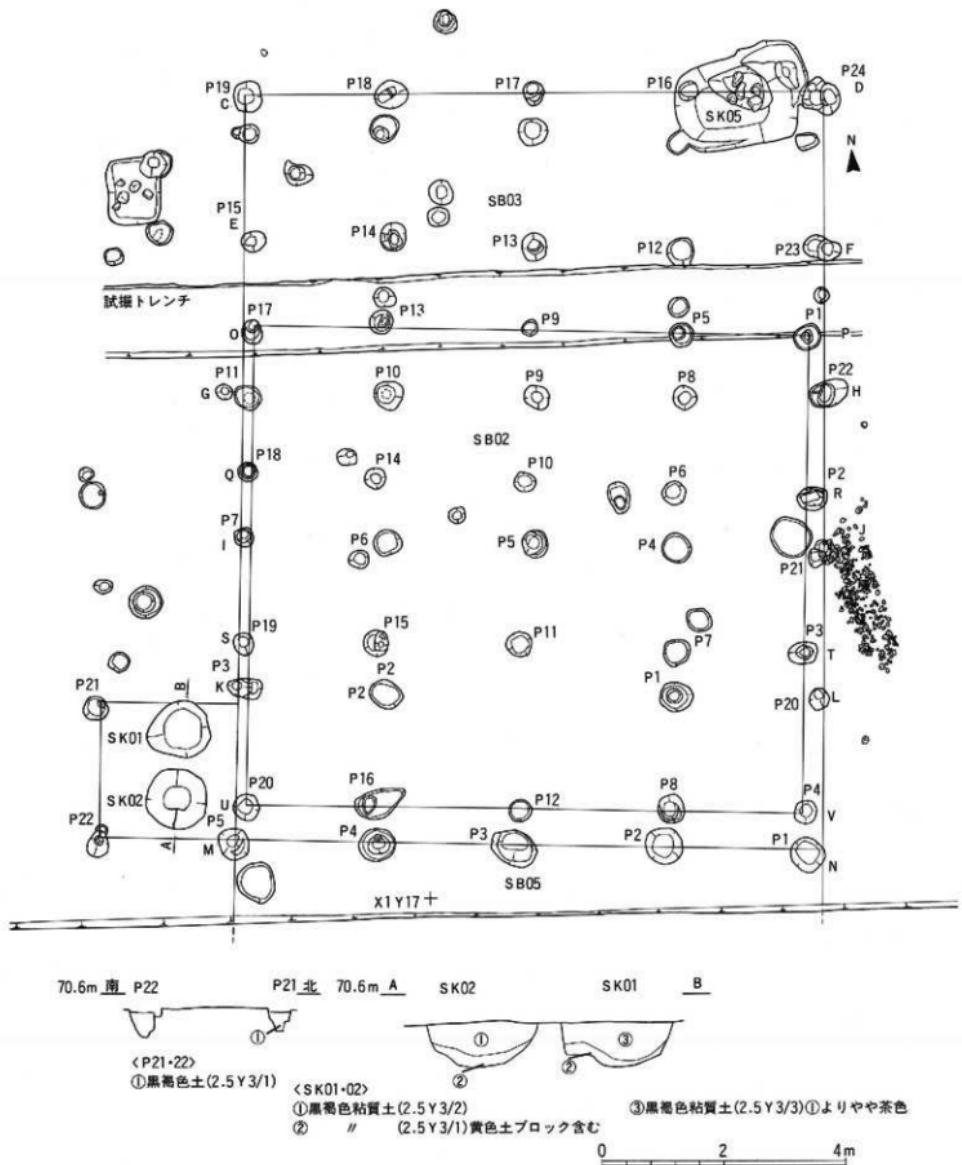
第8図 6地区の造構 SK03-04・SK01-03-09・SD03・P1-3



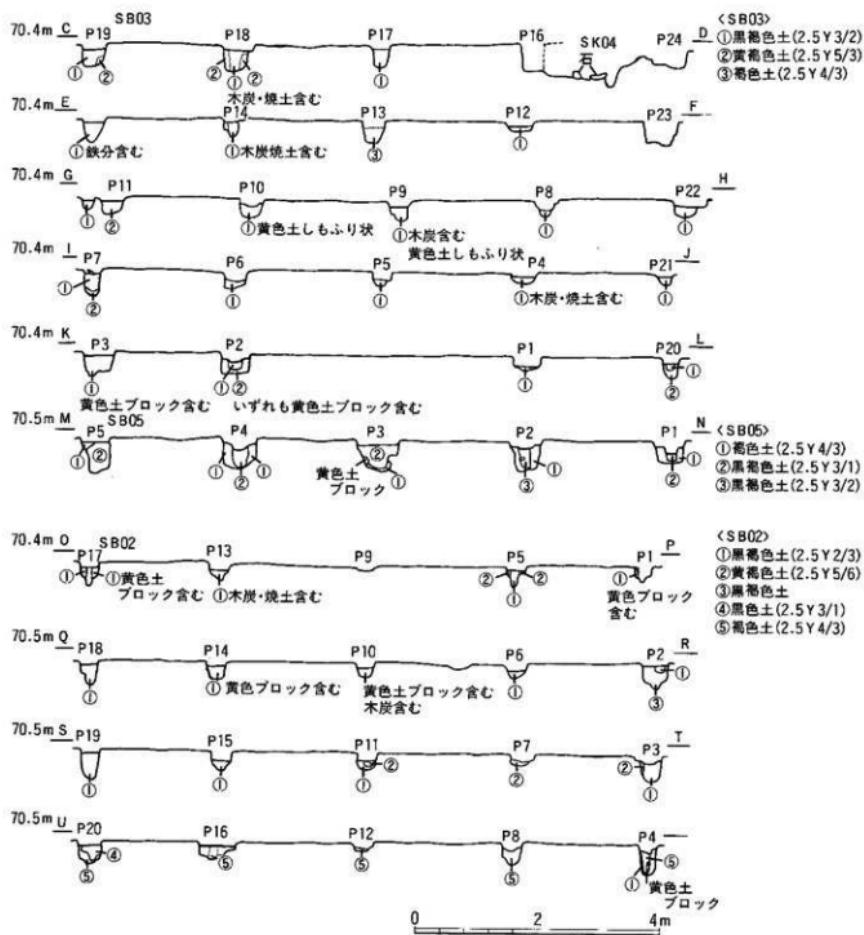
第9図 6地区(左)・8地区(右)の構造([]:80)



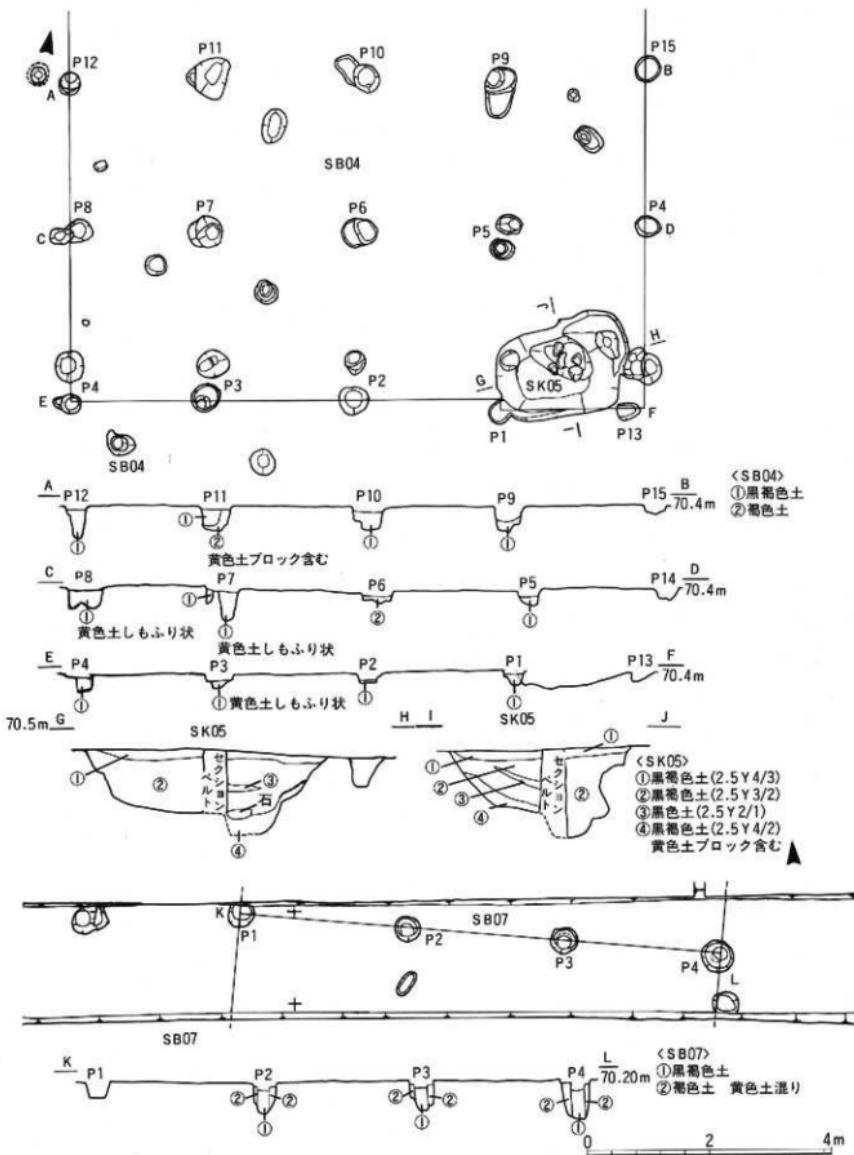
第10図 7地区の造構(1) SB01-04・SK07



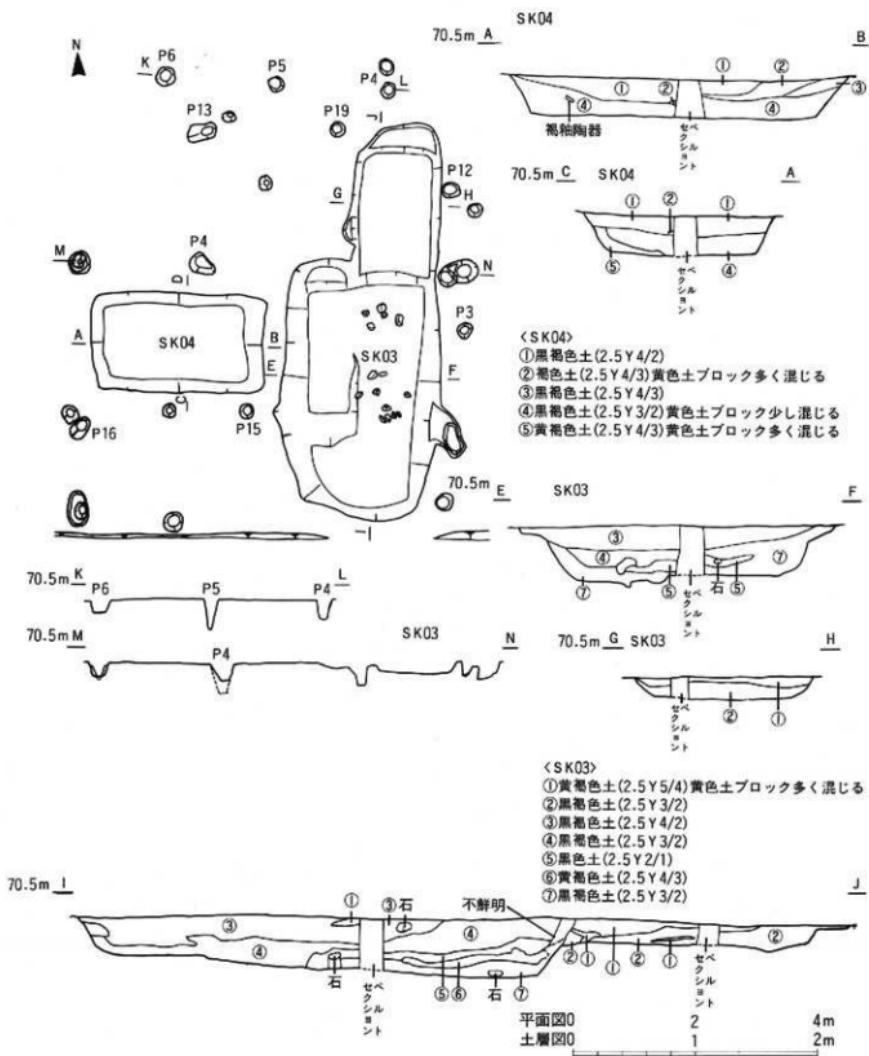
第11図 7地区の遺構(2) SB03-05-02-SK01-02



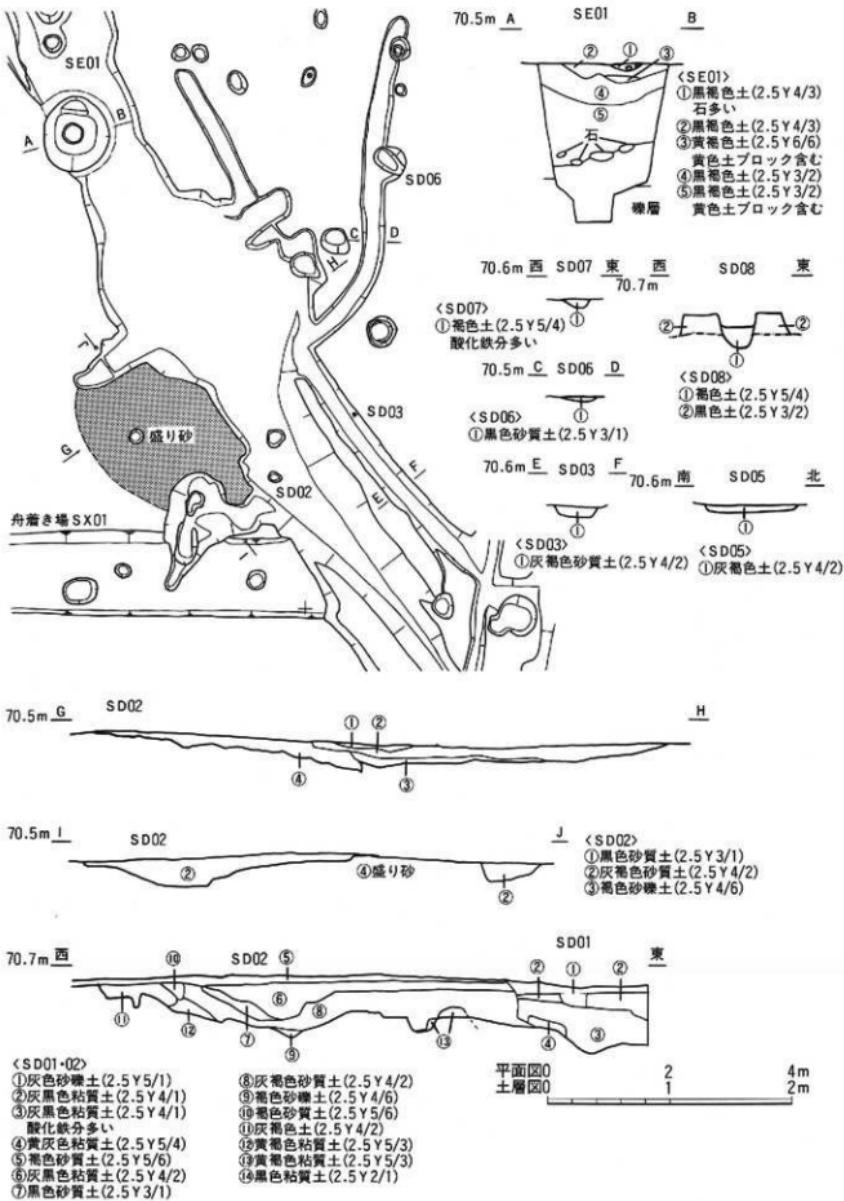
第12図 7地区の造構(3) SB03-05-02



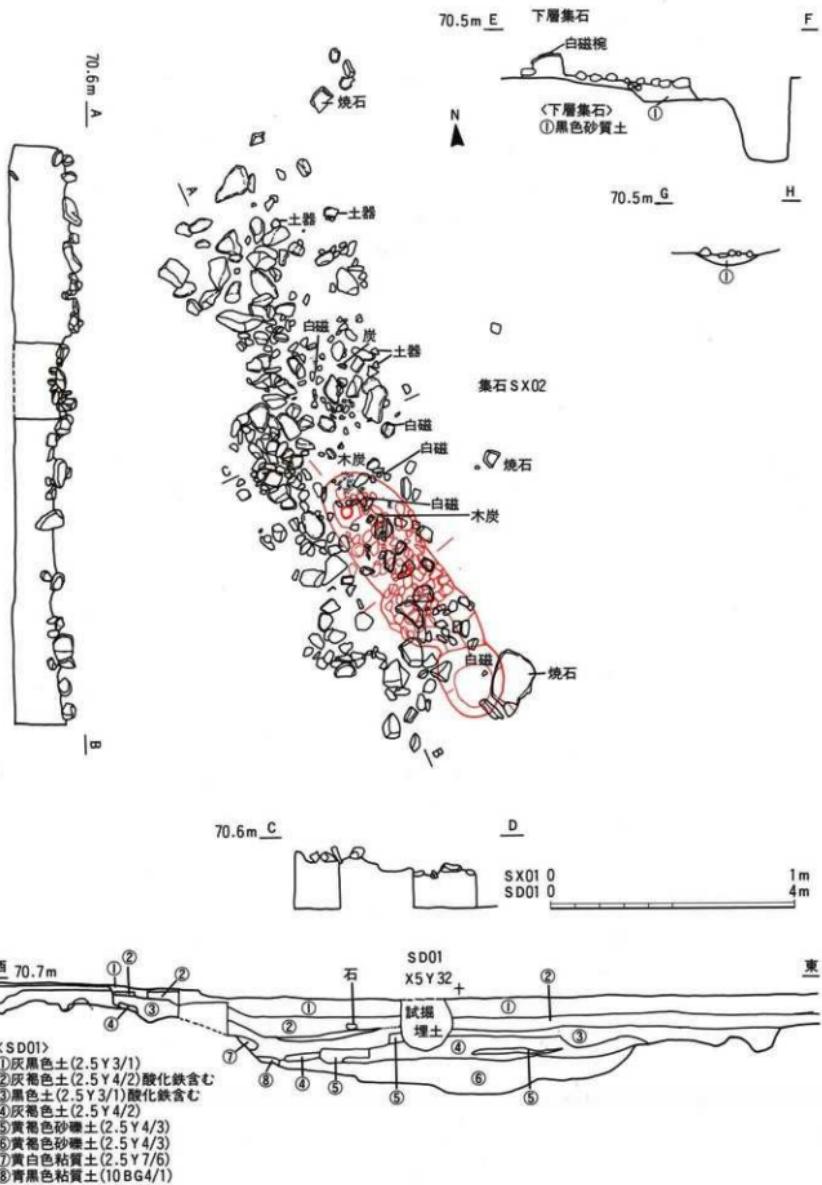
第13図 7地区の遺構(4) SB04・SK05



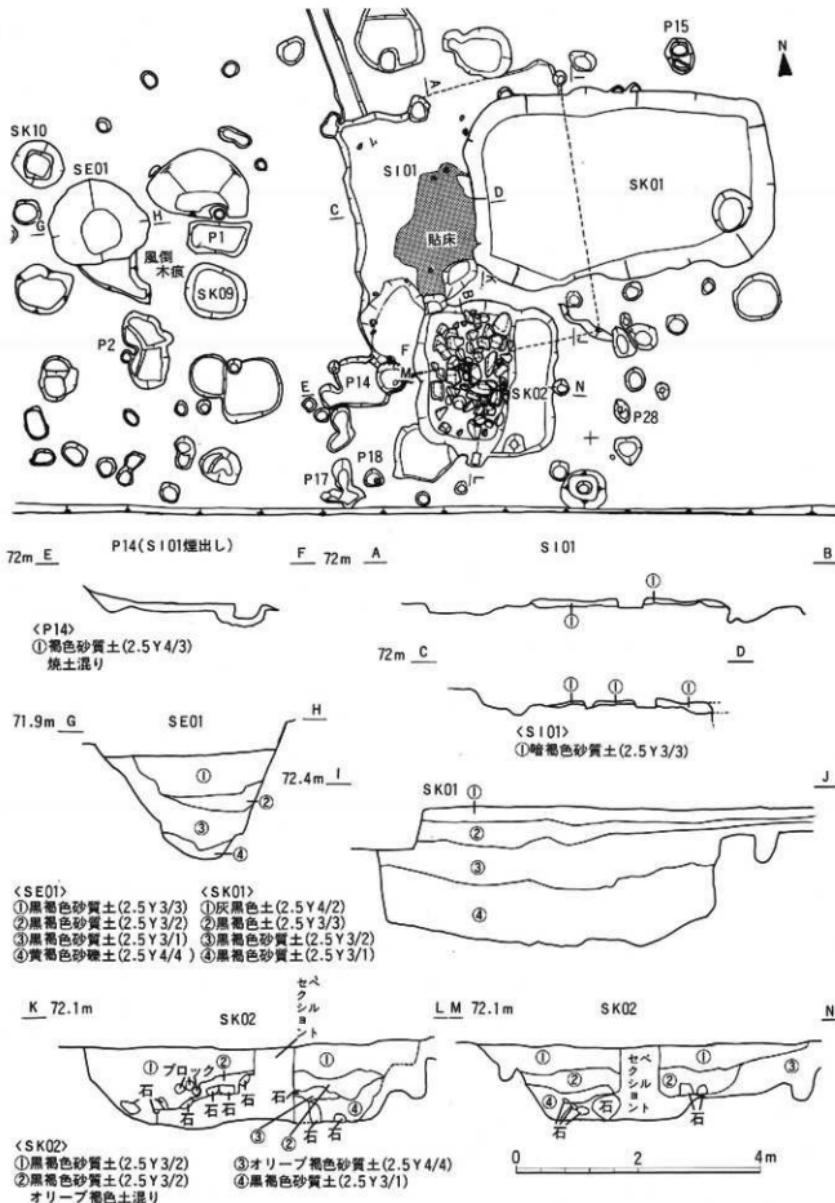
第14図 7地区の遺構(5) SK03-04



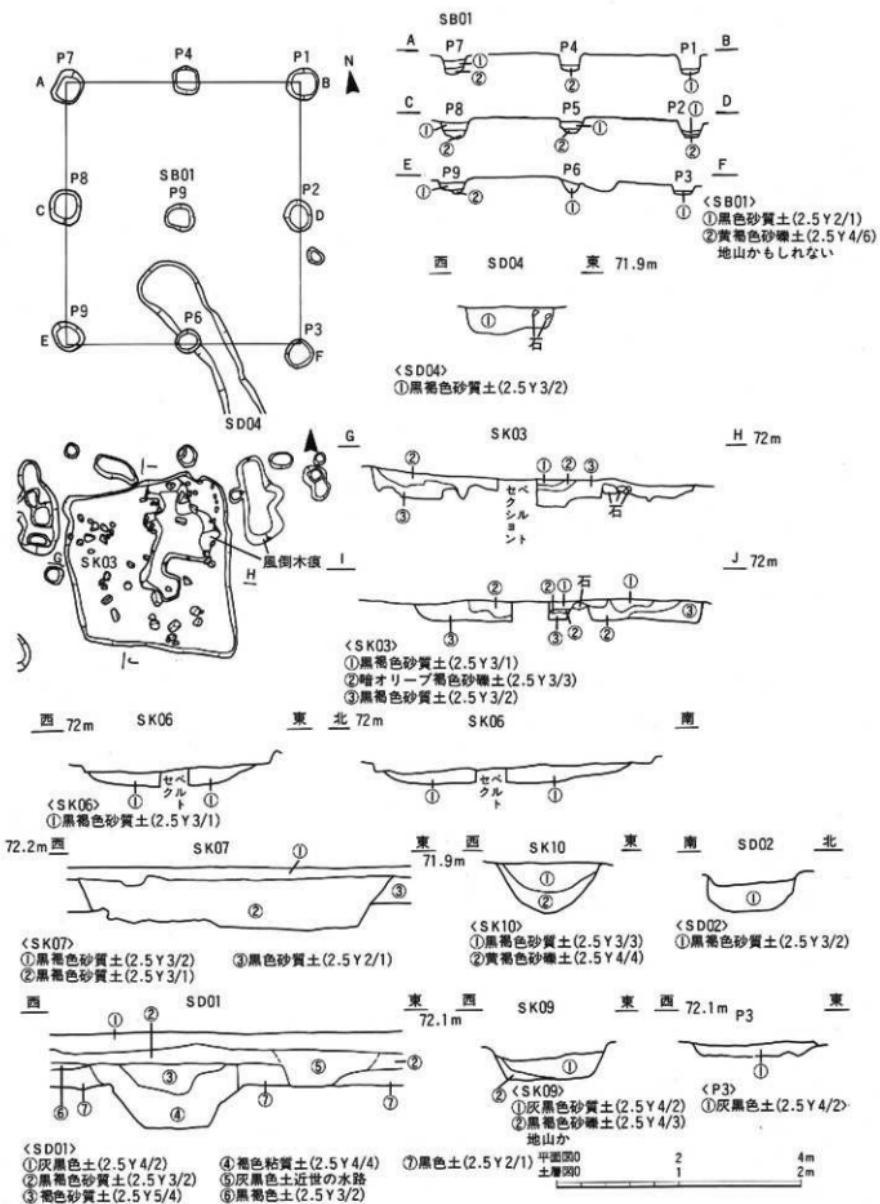
第15図 7地区の構造(8) SD02-SX01-SE01ほか



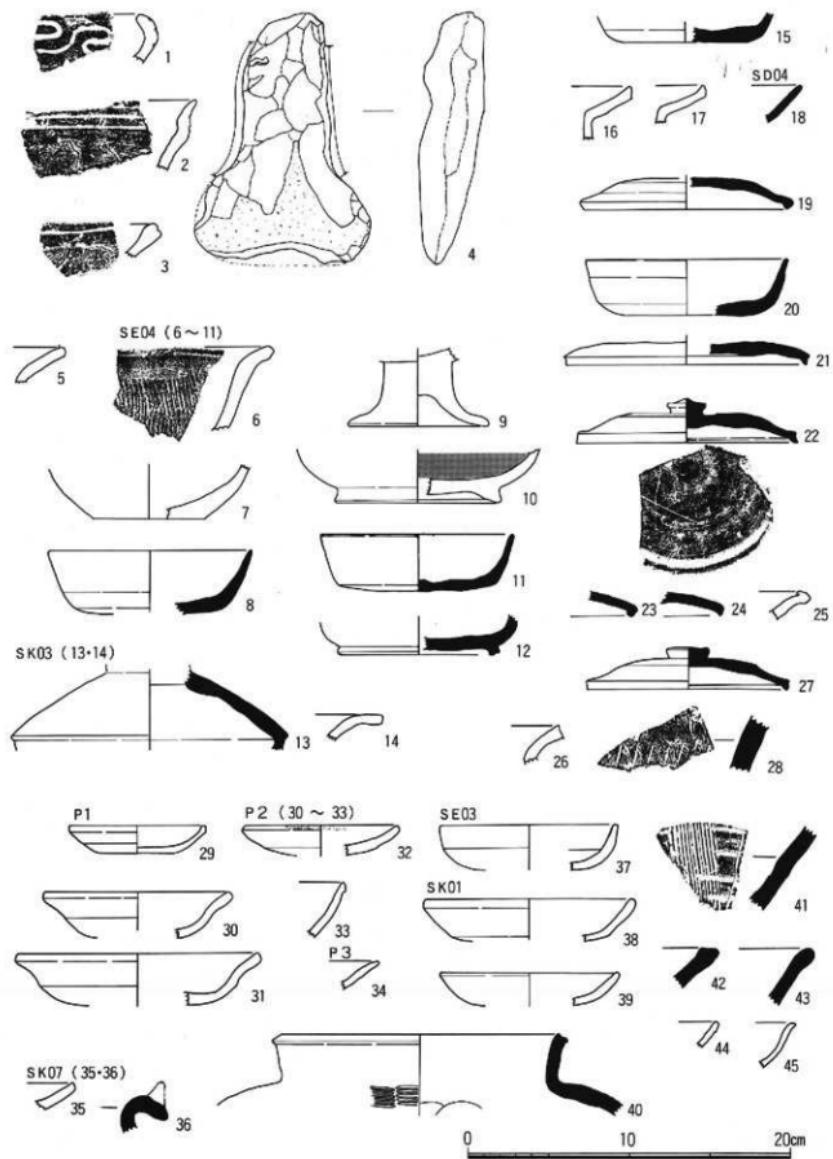
第16図 7地区の遺構(7) SX02・SD01



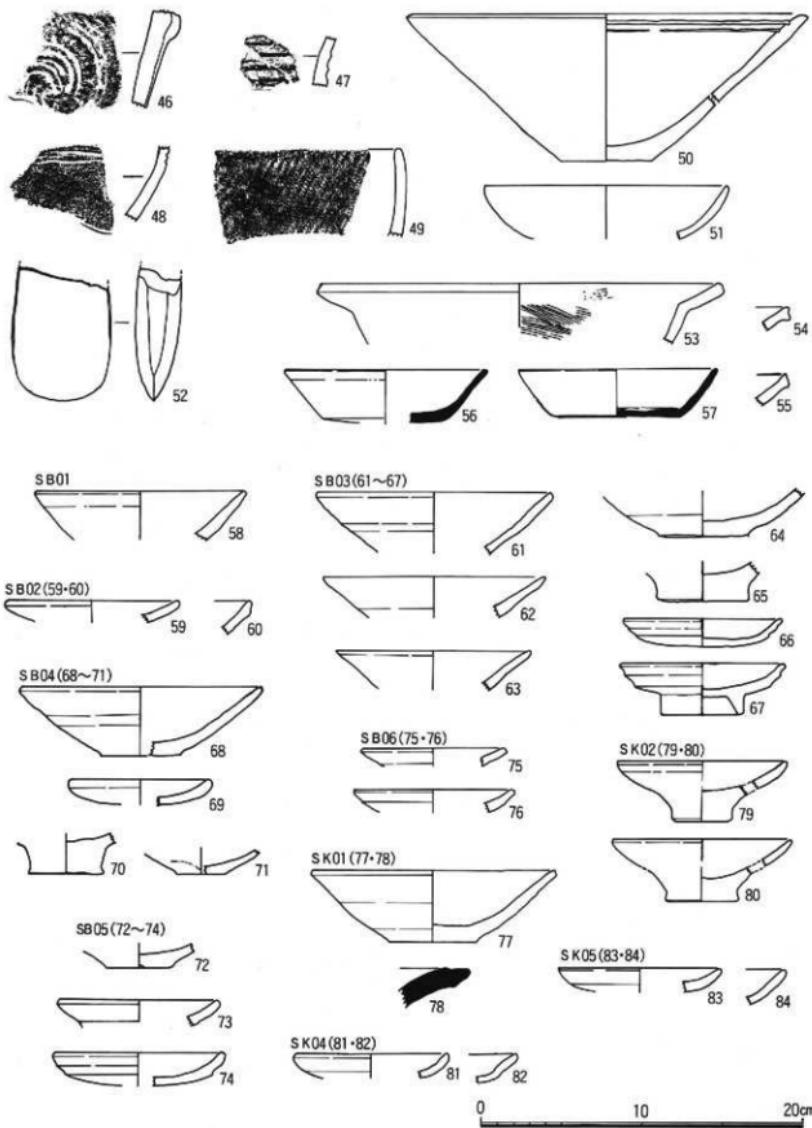
第17図 9地区の遺構(1) SI01・SK01-02・SE01



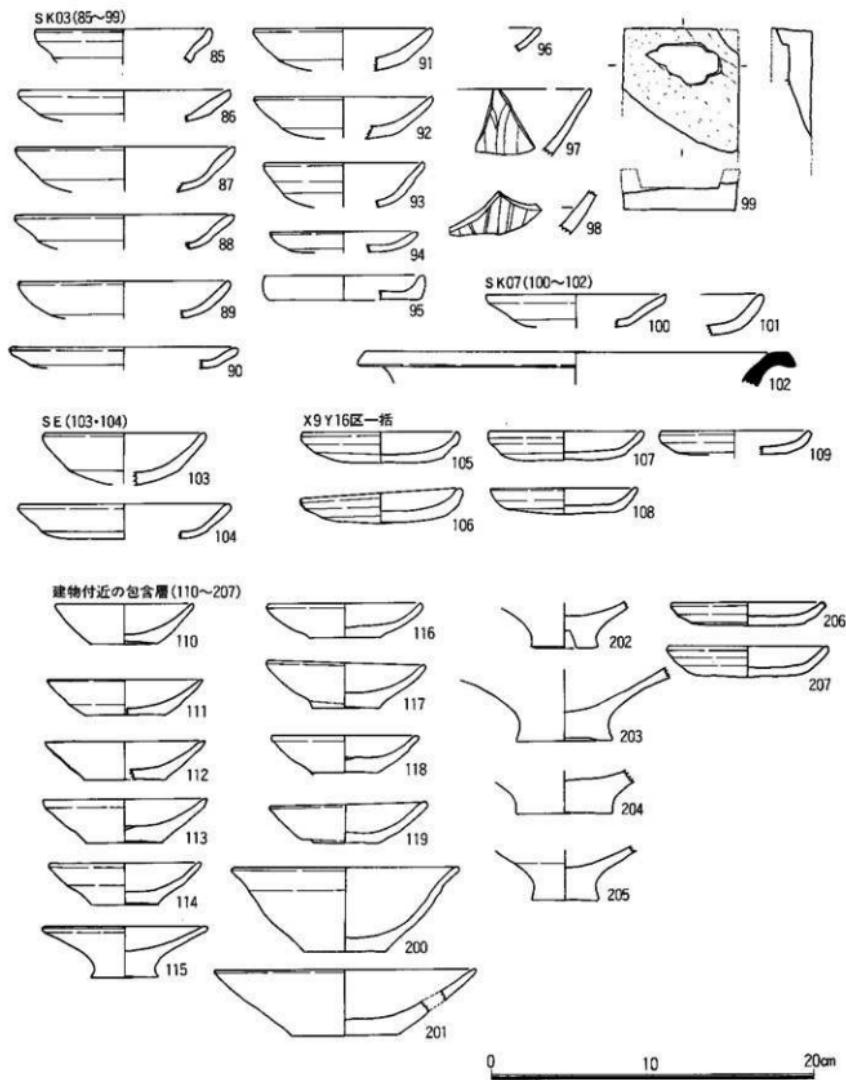
第18図 9地区の構造(2) SB01-SK03ほか



第19図 6地区出土遺物

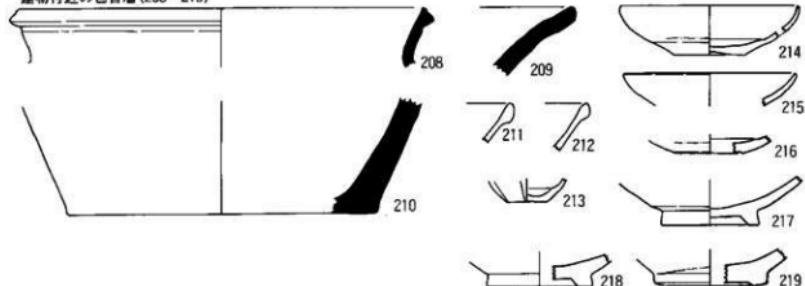


第20図 7地区出土遺物(1)

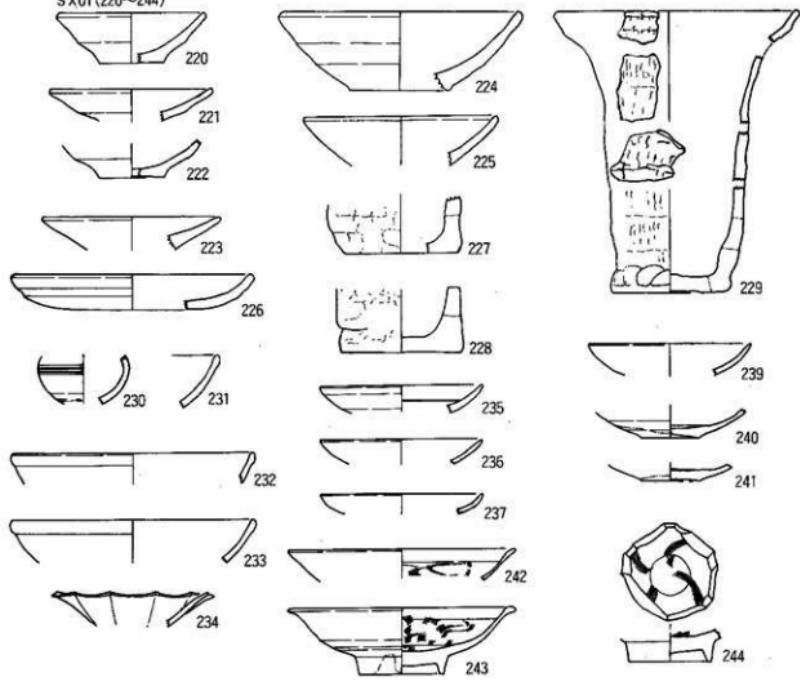


第21図 7地区出土遺物(2)

建物付近の包含層(208~219)



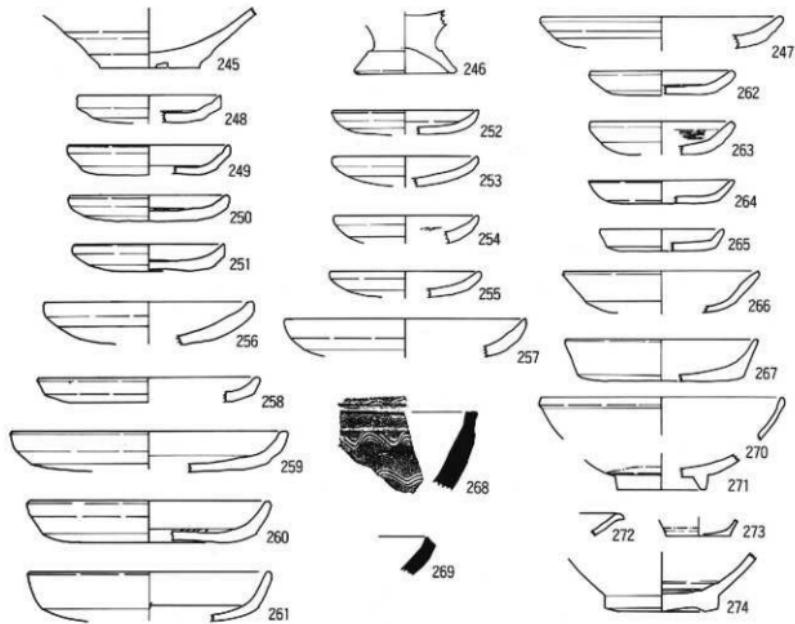
S X01 (220~244)



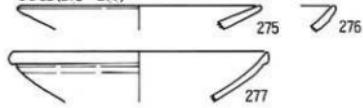
0 10 20cm

第22図 7地区出土遺物(3) 238は欠番

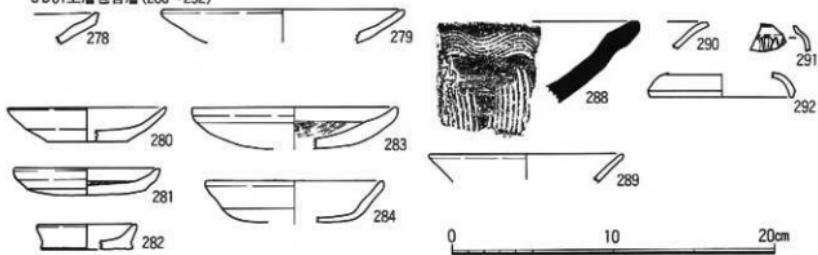
S D01(245~274)



S D02(275~277)

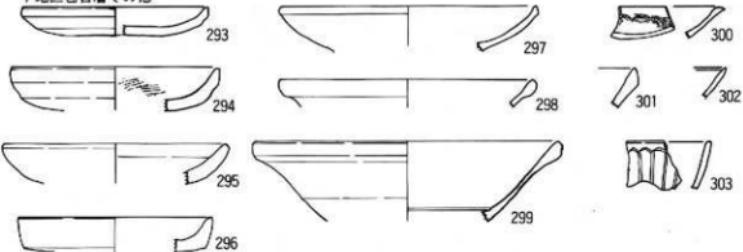


S D01上層包含層(280~292)

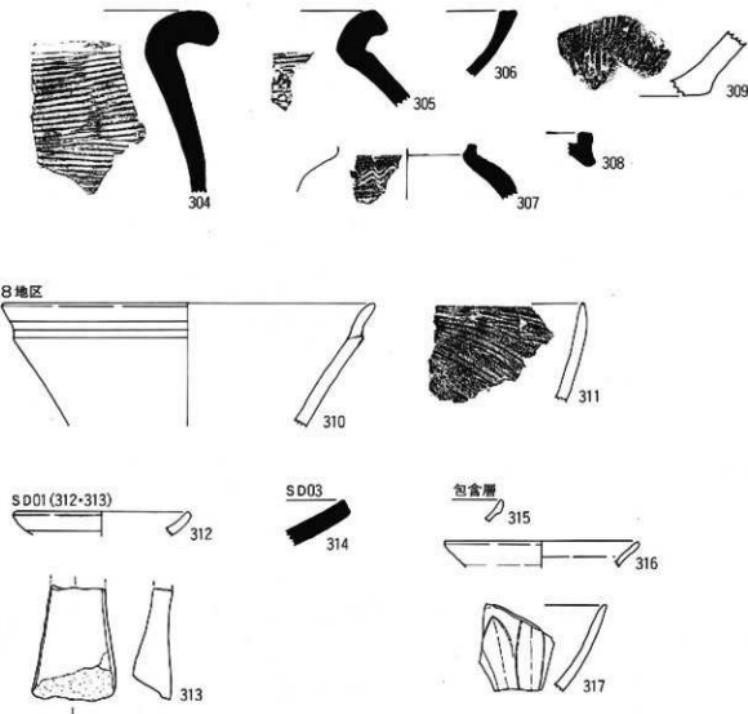


第23図 7地区出土遺物(4)

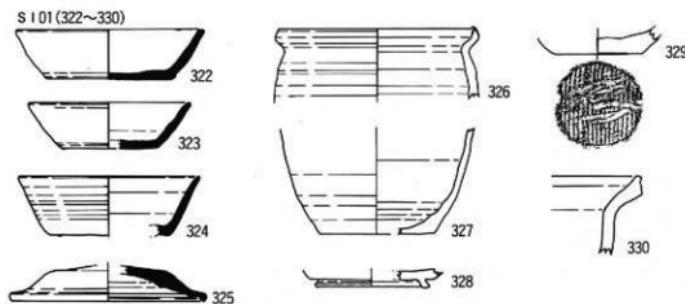
7地区包含層その他



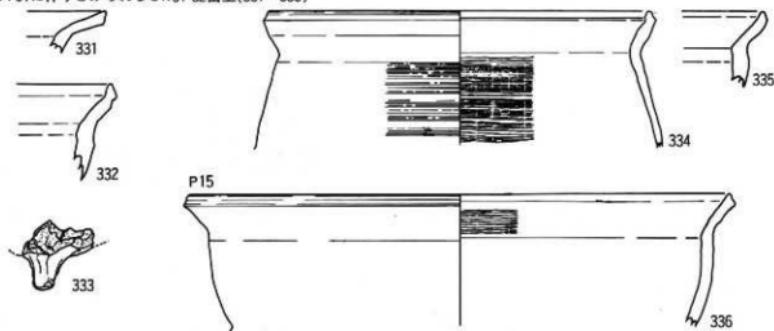
8地区



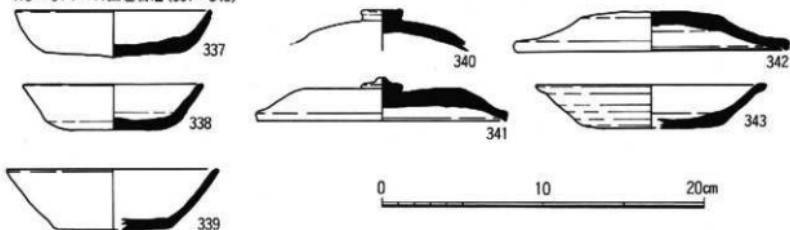
第24図 7地区(上)8地区(下)出土遺物



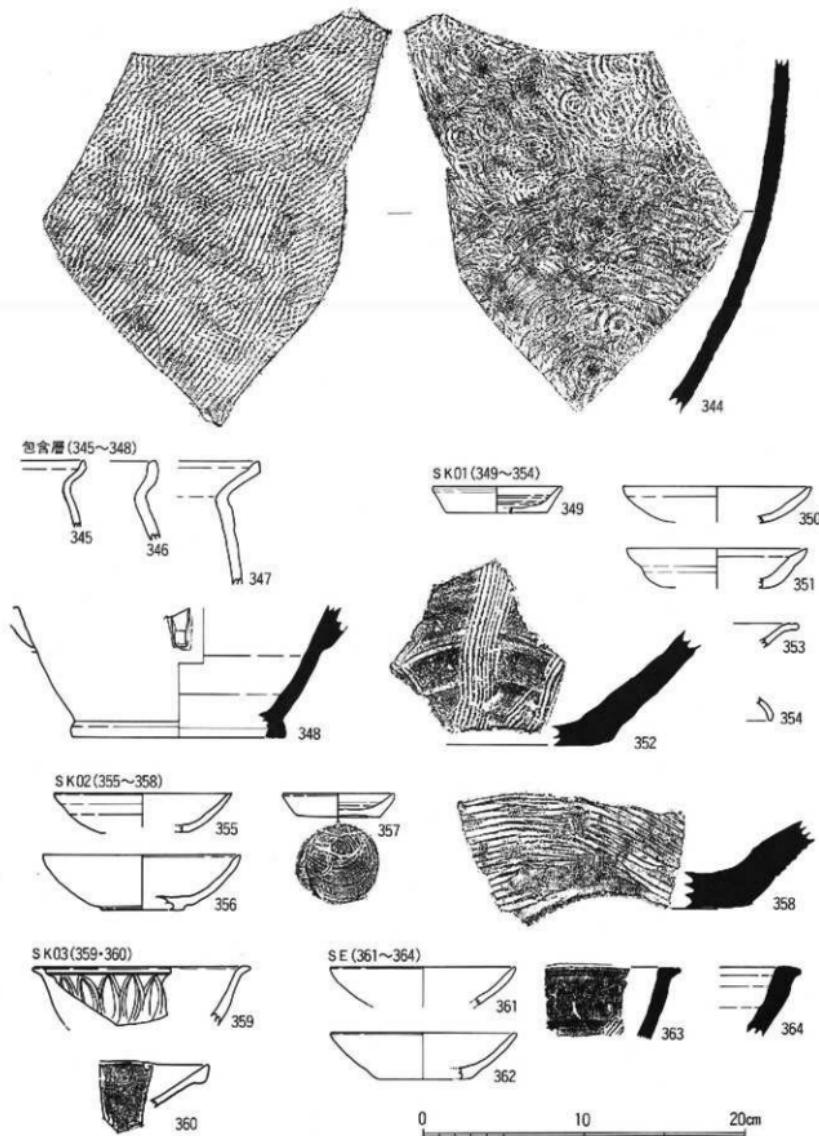
S I 01に伴うとみられる SK01-02出土(331~335)



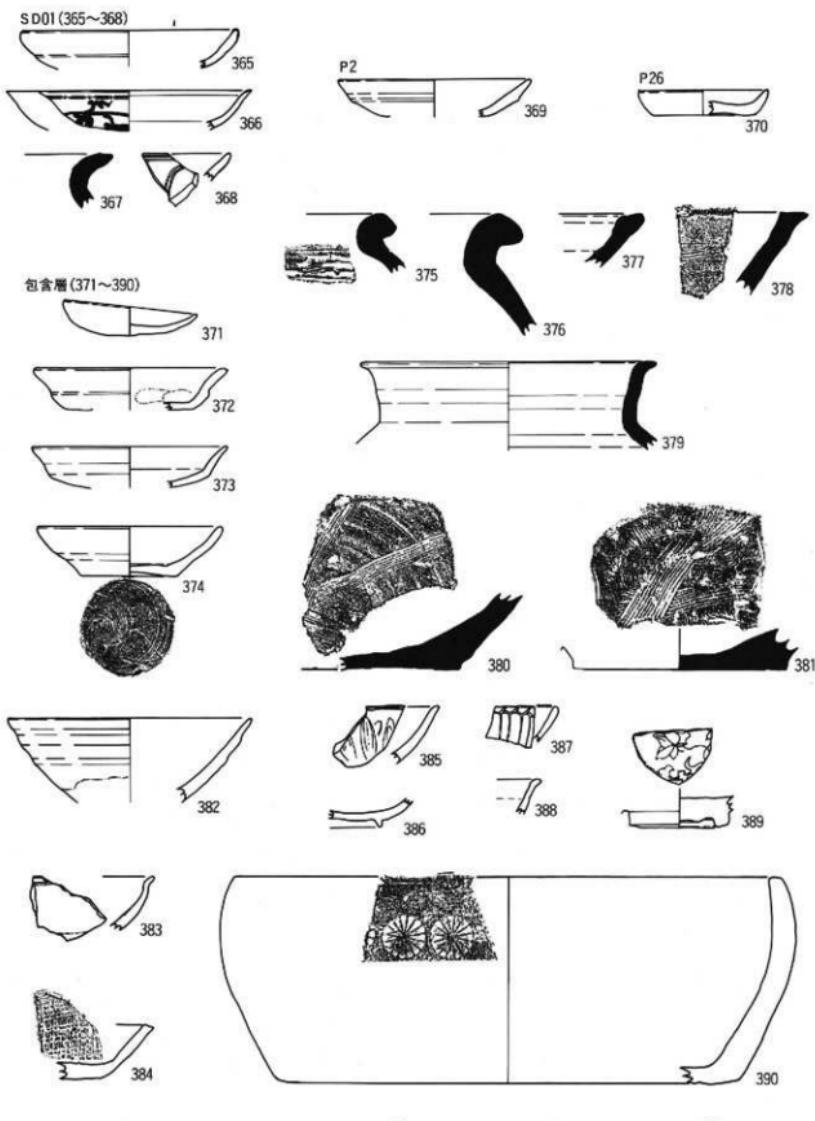
X6~9Y 7~11区包含層(337~343)



第25図 9地区出土遺物(1)



第26図 9地区出土遺物(2)

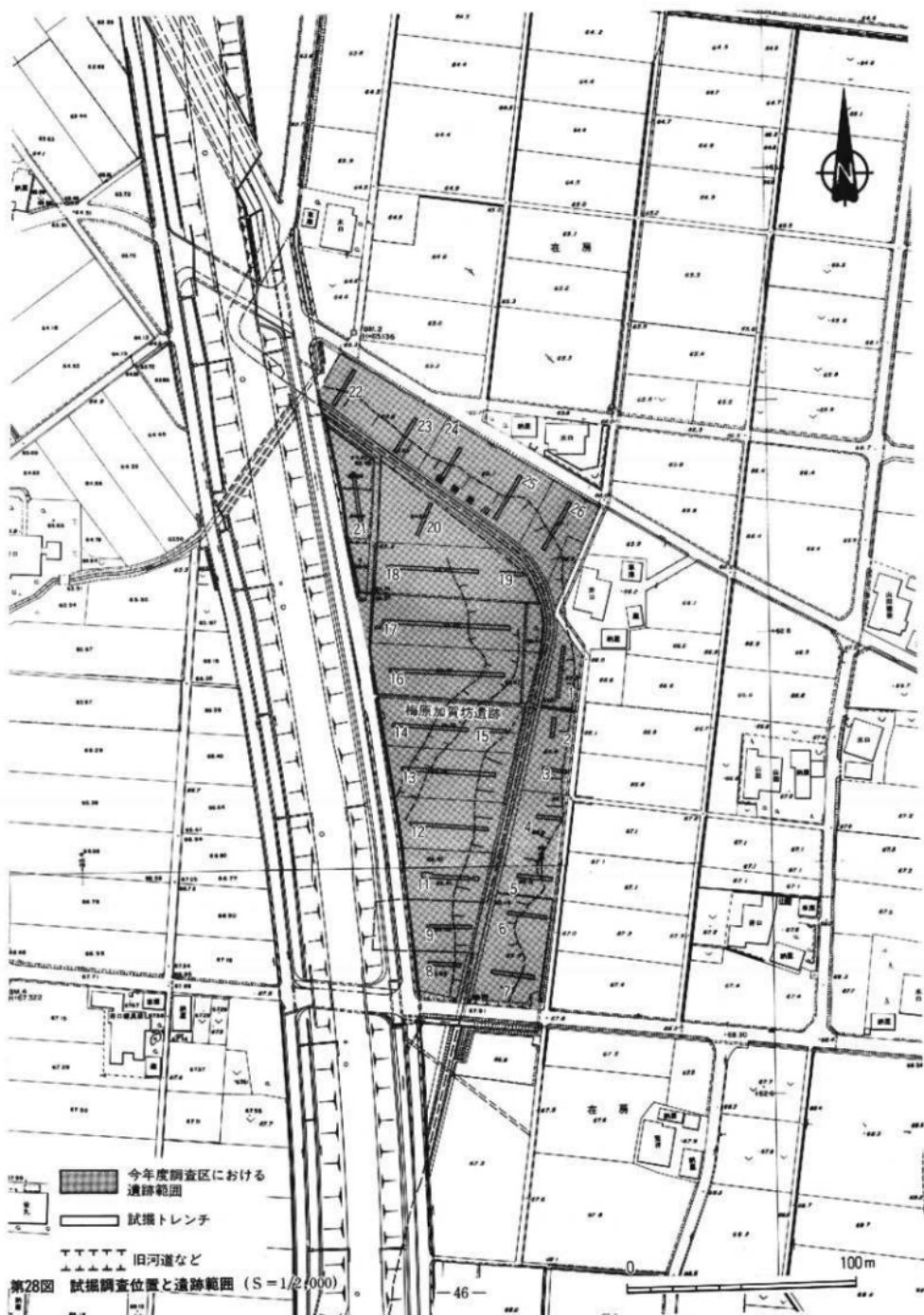


第27図 9地区出土遺物(3)

第2表 主な出土遺物および検出遺構一覧

番号	出土 遺 物	検 出 遺 構	番 号	出 土 遺 物	検 出 遺 構
(梅原加賀坊遺跡)			52T	須恵器、土師器、灰陶器	溝状遺構(区画溝)、土坑
1 T	近世陶磁器(近代の陶磁器を含む)	河川跡(権現堂川)	53T	縄文	溝状遺構
2 T	近世陶磁器	河川跡(権現堂川)	54T	中世土師器	穴、井戸
3 T	近世陶磁器	河川跡(権現堂川)	55T	中世土師器	穴、溝状遺構
4 T	近世陶磁器、珠洲	河川跡(権現堂川)	56T	中世土師器、近世陶器	穴、河川跡(権本川)
5 T	須恵器、唐津	上坑、河川跡(権現堂川)	57T	不明	穴、溝状遺構
6 T	近世陶磁器	下坑、溝状遺構、河川跡(権現堂川)	58T	縄文、珠洲、近世磁器	下坑、河川跡(権本川)
7 T	珠洲、近世陶磁器	河川跡(権現堂川)	59T		穴、溝状遺構
8 T	須恵器	河川跡(権現堂川)	60T		穴、溝状遺構
9 T	須恵器		61T		穴、河川跡(権現堂川)
10T			62T	近世陶磁器	川跡
11T		獨立柱建物、溝状遺構、河川跡(権現堂川)	63T	中世土師器、縄文	穴、溝状遺構
12T		穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)	64T	縄文、須恵器、土師器	穴、上坑、河川跡(権現堂川)
13T	中世土師器	穴、溝状遺構、上坑、河川跡(権現堂川)	65T	須恵器、土師器	穴、土坑、溝状遺構
14T		穴、溝状遺構、土坑	66T	須恵器、土師器	穴、溝状遺構
15T	近世磁器		67T	土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑
16T	伊万里	穴、溝状遺構、土坑	68T	須恵器、土師器	穴、溝状遺構、溝状遺構
17T		穴、溝状遺構	69T	土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑
18T		溝状遺構	70T	須恵器	溝状遺構
19T	伊万里		71T	須恵器	河川跡(権現堂川)
20T			72T	中世土師器	河川跡(権現堂川)
21T	近世陶磁器		73T	近世陶磁器	穴、河川跡(権現堂川)
22T		河川跡(権現堂川)	74T		穴、河川跡(権現堂川)
23T		穴、溝状遺構	75T	土師器	穴、溝状遺構、河川跡(権現堂川)
24T		河川跡(権現堂川)	76T	須恵器	穴、溝状遺構
25T	伊万里	穴、河川跡(権現堂川)	77T	中世土師器	土坑、河川跡(権現堂川)
26T	中世土師器	土坑、溝状遺構、河川跡(権現堂川)	78T	中世土師器	穴、河川跡(権現堂川)
(梅原胡摩堂遺跡)			79T		河川跡(権現堂川)
27T	中世土師器、珠洲	獨立柱建物、溝状遺構、土坑	80T	中世土師器	河川跡(権現堂川)
28T	中世土師器	穴	81T	須恵器、中世土師器	穴、溝状遺構
29T	縄文、中世土師器、越中新戸、瀬戸美濃	獨立柱建物、上坑	82T	須恵器、瀬戸美濃、越中新戸、吉洋	穴、溝状遺構
30AT	中世土師器、珠洲、鉄製品、常滑	穴、溝状遺構、土坑	83T	吉洋、近世磁器	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)
30BT	中世土師器	穴、土坑	84T	珠洲、越前	穴、溝状遺構、十戸、河川跡(権本川)
31T	須恵器、中世土師器、珠洲、青磁	川跡、土坑	85T	珠洲、青磁	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権本川)
32T	珠洲、青磁	川跡、穴、溝状遺構	86T	珠洲	穴、溝状遺構
33T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構(区画溝)、土坑	87T	中世土師器	穴、溝状遺構、土坑
34T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑	88T	珠洲	穴、溝状遺構、土坑
35T	中世土師器、瀬戸美濃、羽口	穴、土坑	89T	瀬戸美濃	穴、溝状遺構、土坑
36T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構	90T	近世陶器	溝状遺構
37T	礪文土器、打製石斧、中世土師器	穴、溝状遺構	91T	瀬戸美濃、近世陶器、鉄製品	礪石、その他の「以達寺」開闢の遺構検出
38T	縄文、須恵器、土師器、中世土師器、砾石	穴、溝状遺構	92T	珠洲、越中瀬戸、近江磁器	礪石、その他の「以達寺」開闢の遺構検出
39T	縄文、中世土師器	溝状遺構	93T	珠洲	穴、溝状遺構、土坑
40T	中世土師器	穴、溝状遺構(区画溝)、土坑	94T		穴、土坑
41T		穴、溝状遺構	95T	中世土師器	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権本川)
42T	中世土師器	穴、溝状遺構	96T	越中瀬戸、石臼	溝状遺構、井戸、河川跡(権本川)
43T	中世土師器	溝状遺構	97T	近世磁器	溝状遺構、土坑、河川跡(権本川)
44T		溝状遺構	98T	青磁	穴、溝状遺構
45T	縄文、珠洲、近世磁器	穴、溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)	99T	中世土師器	溝状遺構
46T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑	100T	中世土師器	溝状遺構
47T	中世土師器、近世陶磁器	穴、溝状遺構、土坑	101T	中世土師器、珠洲、青磁	穴、溝状遺構
48T	中世土師器、珠洲	溝状遺構、土坑、河川跡(権現堂川)	102T		穴、溝状遺構
49T	中世土師器(集中的に多く出土)	穴、溝状遺構、土坑	103T		穴、溝状遺構
50T		穴、溝状遺構	104T	中世土師器	穴、溝状遺構
51T	中世土師器、珠洲	穴、溝状遺構、土坑	105T	珠洲	川跡

*「穴」には、柱穴の可能性のあるものを含む。

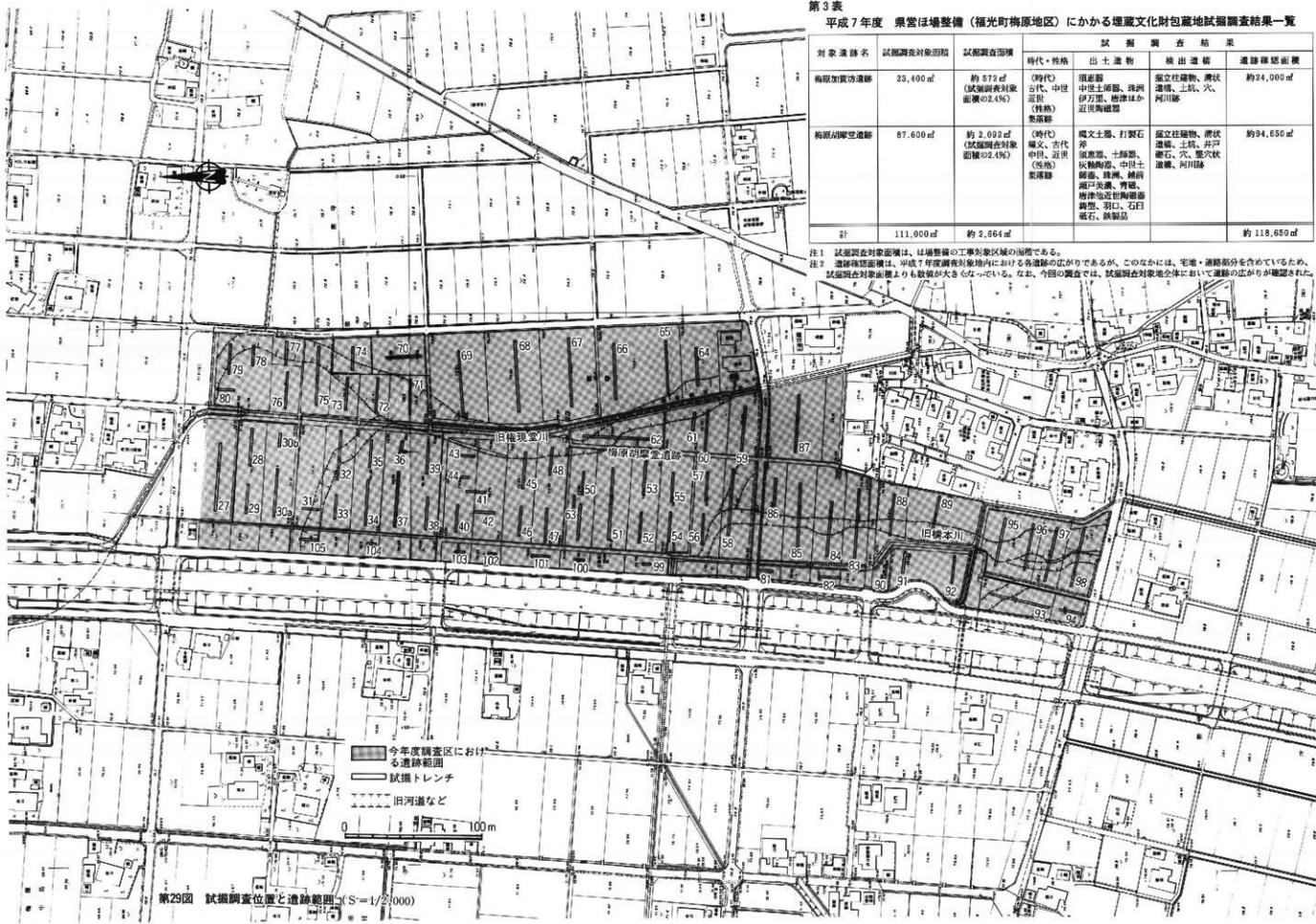


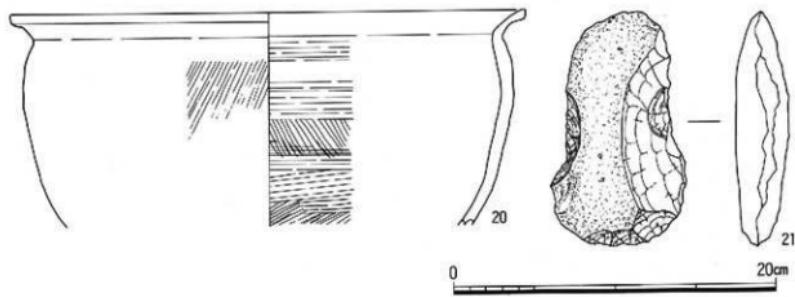
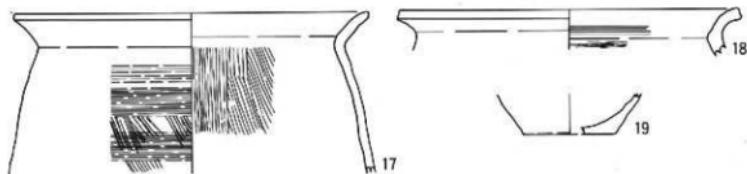
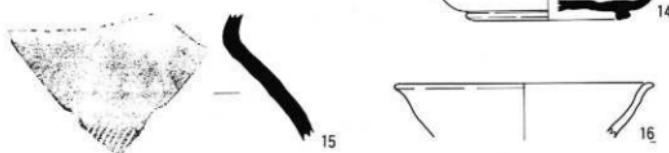
平成 7 年度 県営ば場整備（福光町梅原地区）にかかる埋蔵文化財包蔵地試掘調査結果一覧

劉家遺跡名	試掘調査対象面積	試掘調査面積	試掘調査結果			
			時代・性別	出土遺物	検出遺構	道跡認定面積
海原加實勿遺跡	33,400 m ²	約 572 m ² (試掘調査対象面積の2.4%)	「時代」 古文、中世 「性別」 未詳	鐵器類 中國・西周 伊万里窯 撲拂はか 近世陶器類	立柱建物、鐵 造像、土坑、火 葬、河川跡	約24,000 m ²
柳原胡御堂遺跡	87,600 m ²	約 2,102 m ² (試掘調査対象面積の2.4%)	「時代」 古文、中世 「性別」 未詳	鐵土器、打製石 器、鐵器、土器 等、土器陶器、 中國・西周 時代、青銅 時代、羽石 等、鐵製品	立柱建物、鐵 造像、土坑、井 口、礪石、火、墓穴 遺構、河川跡	約94,650 m ²
計	111,000 m ²	約 2,564 m ²				約 118,650 m ²

表1 対象別対象面積は、撮影範囲の工事面積による

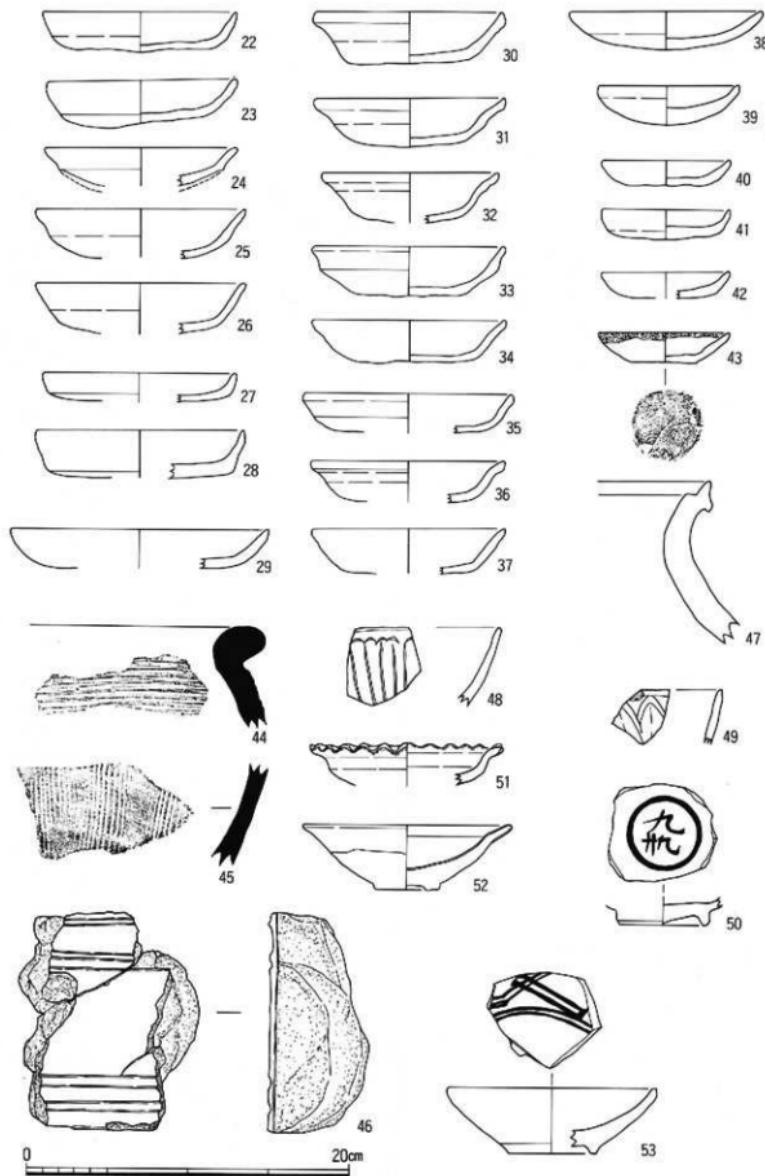
注1 地図調査用面積は、試験面積の対象地内全区域の面積である。
注2 調査面積は、平成7年度調査用面積内における道路の広がりであるが、このなかには、宅地・道路部分を含めているため、試験面積よりは数値が大きくなっている。なお、今回の調査では、試験面積対象地全体において道路の広がりが確認され





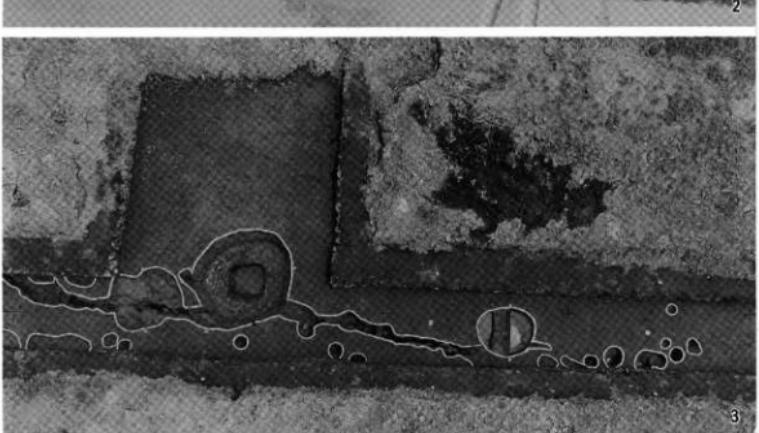
0 20cm

第30図 梅原胡摩堂遺跡出土遺物実測図 (S = 1/3)

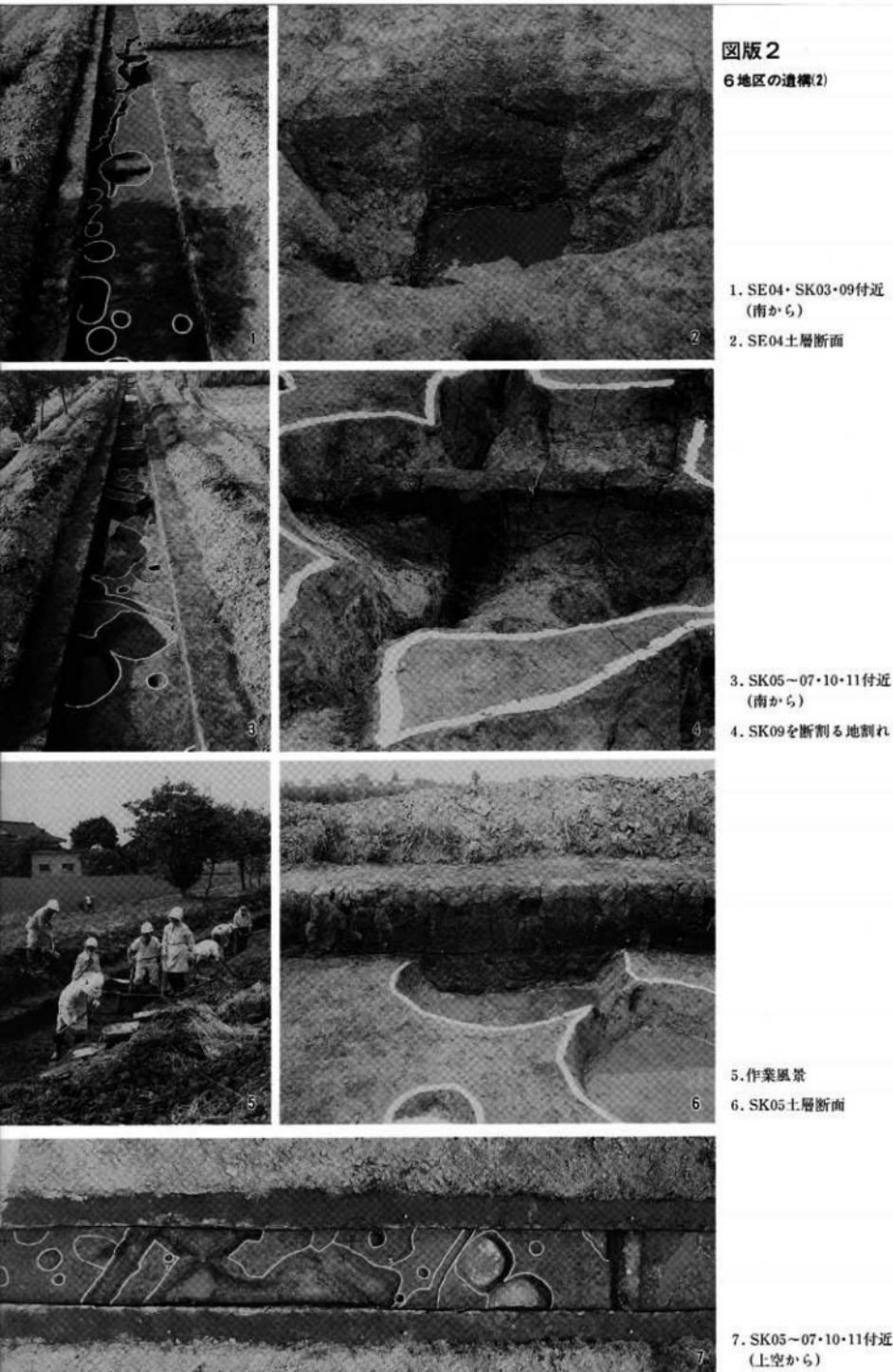


第31図 梅原胡摩堂遺跡及び梅原加賀坊遺跡出土遺物実測図 (S = 1/3)

図版 1
6地区の遺構(1)



図版2
6地区の遺構(2)



図版3

6地区の遺構(3)

1. 打製石斧出土状況



2. SD05(北から)



3. X 3・4列遠景
(上空西から)



4. Y74列遠景
(上空西から)



5. P 1・2・4付近
(東から)



6. X 3・4列東側
(西から)



7. X 3・4列東側
(東から)



8. SD03付近
(南から)



図版4
6地区の遺構(4)



図版5

7地区の遺構(1)

1.全景(東から)



2.建物群近景
(東から)



3.建物群近景
(北から)



図版6
7地区の造構(2)



1. 全景(上空から)

図版7

7地区の造構(3)

1. SB02・03・05
(西から)



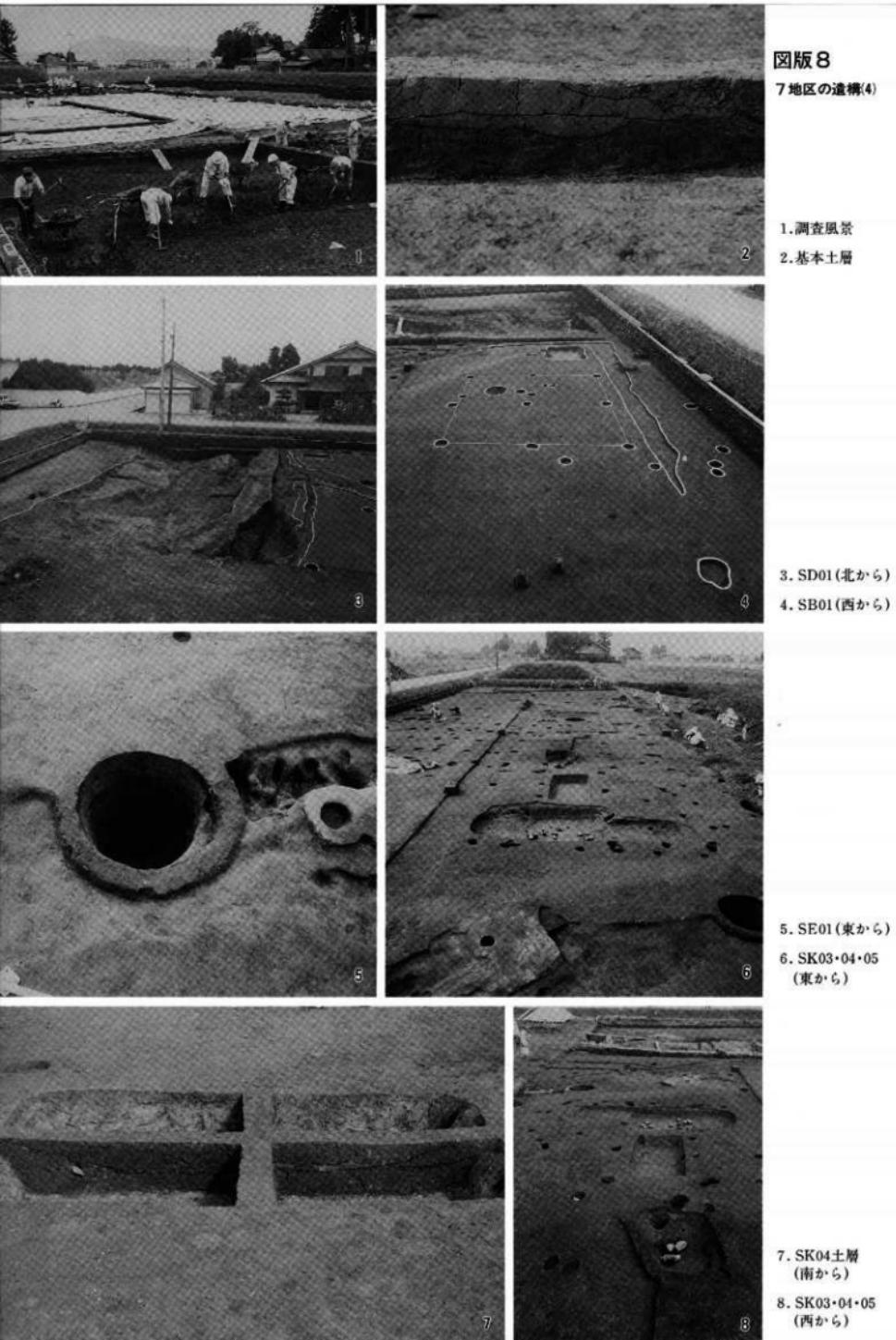
2. SD02・SX01
(北から)



3. SX02
(東から)

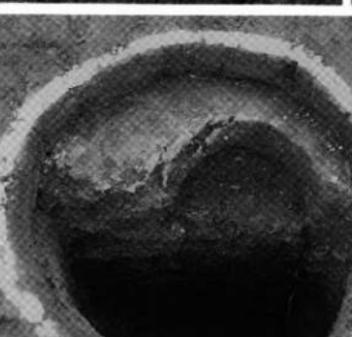
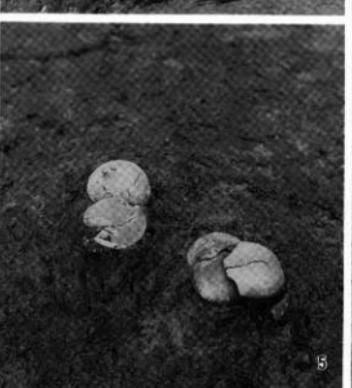
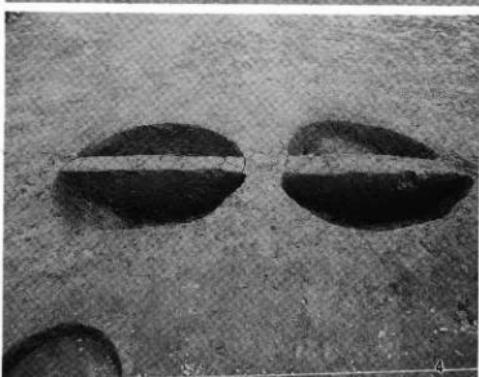
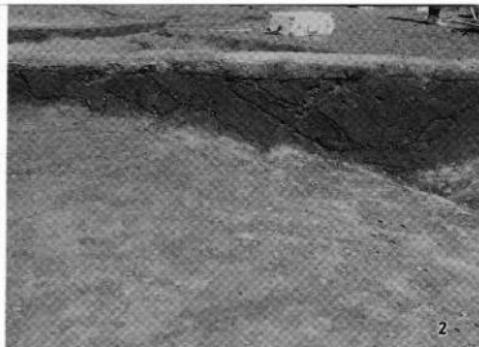


図版8
7地区の造構(4)

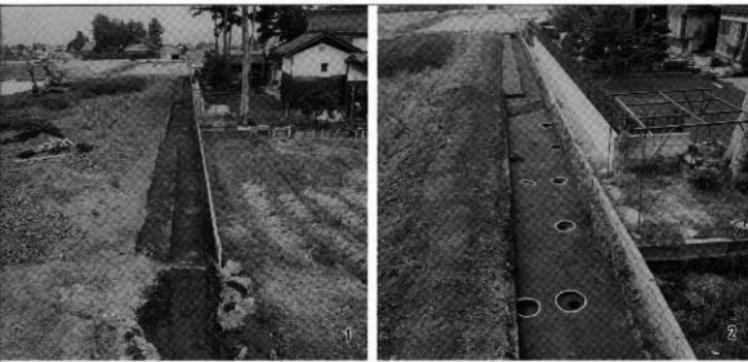


図版9

7地区の遺構(5)



図版10
7地区の造構(6)

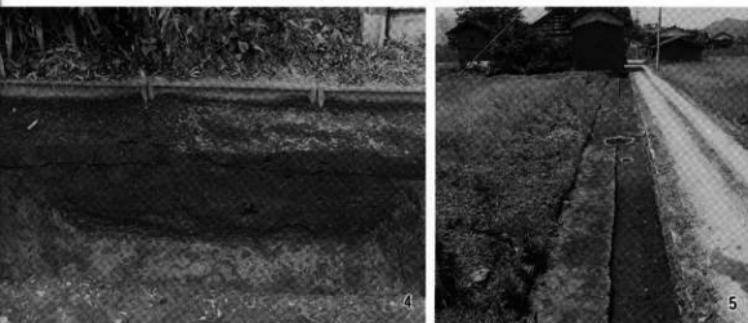


1. X22列(東から)
2. SB07(東から)

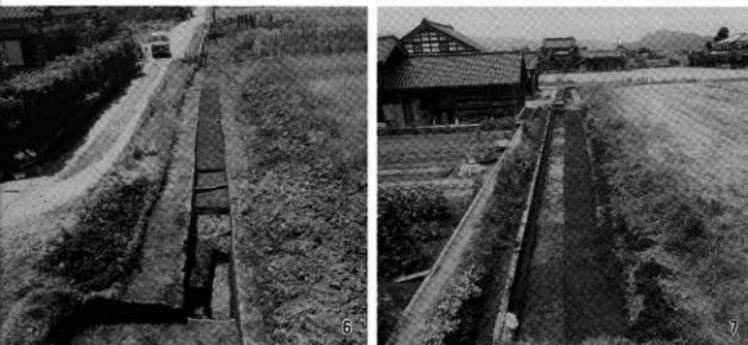
8地区の造構



3. SD03付近
(上空東から)



4. SD03西溝上層
5. X12列(東から)



6. SD01付近(北から)
7. X48列(東から)

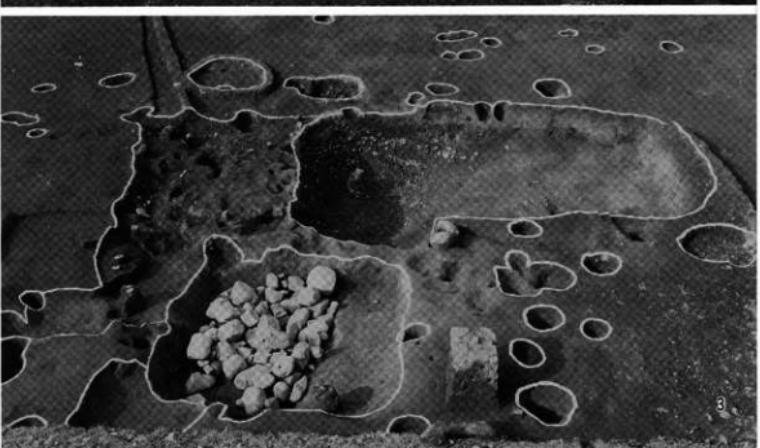
図版11
9地区の遺構(1)



1. 全景(西から)



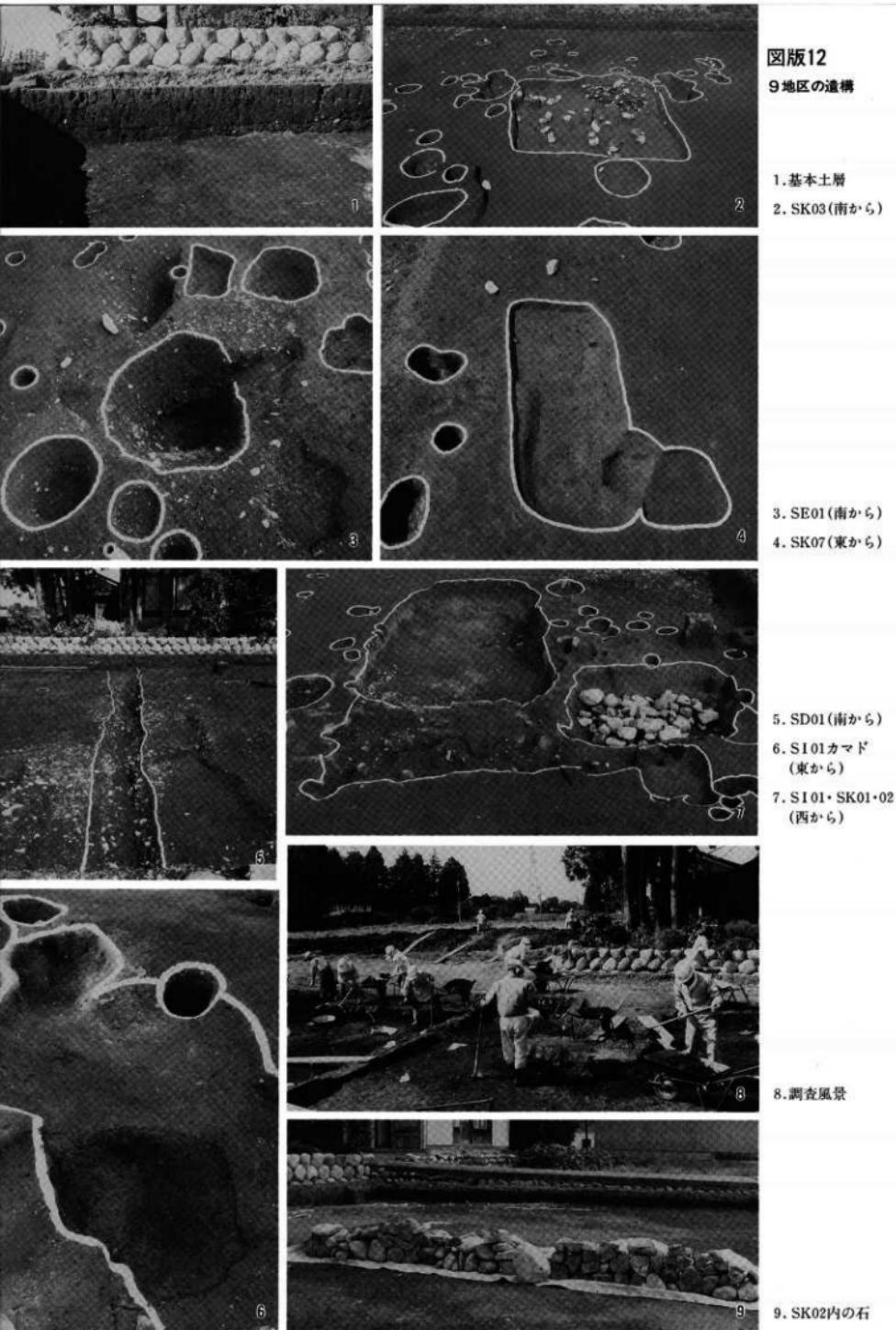
2. 全景(東から)



3. SI01・SK01・02
(南から)

図版12

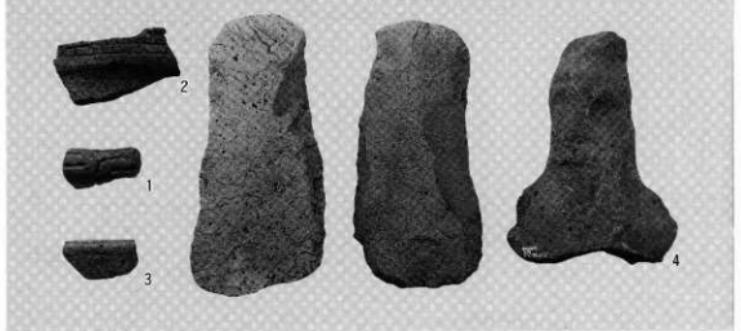
9地区の造構



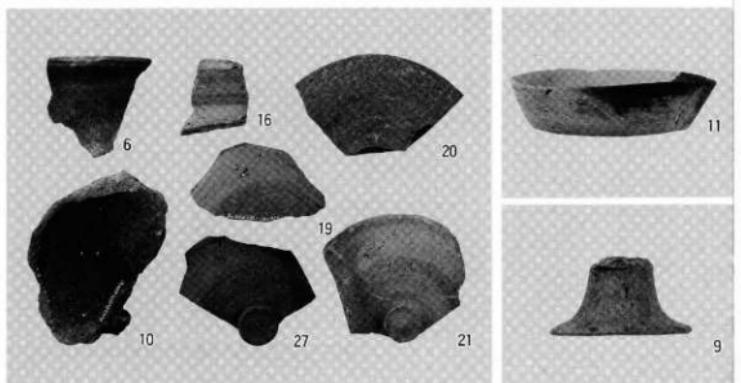
図版13

6地区の遺物

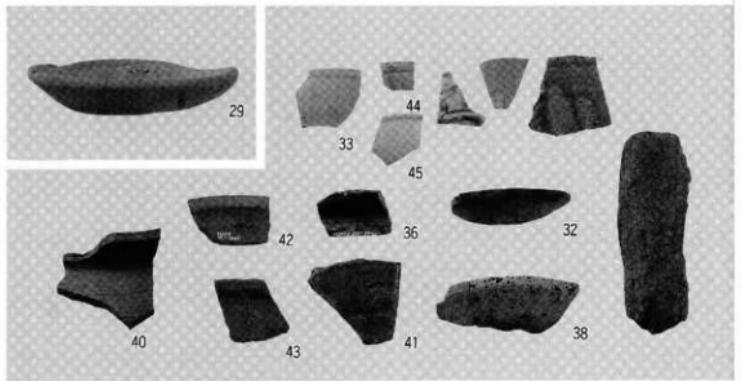
1:3



縄文土器・打製石斧



須恵器・土師器



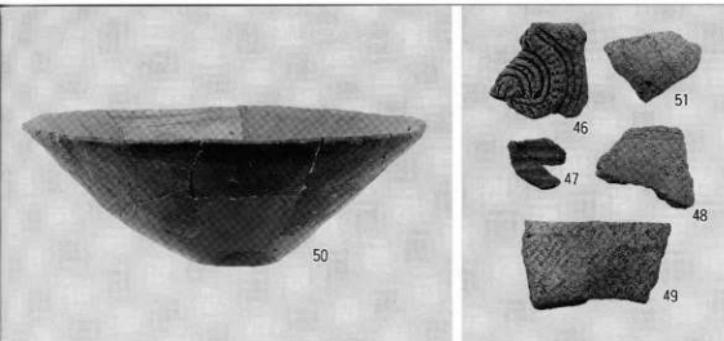
土師器・珠洲・白磁・青花
漸戸・砥石



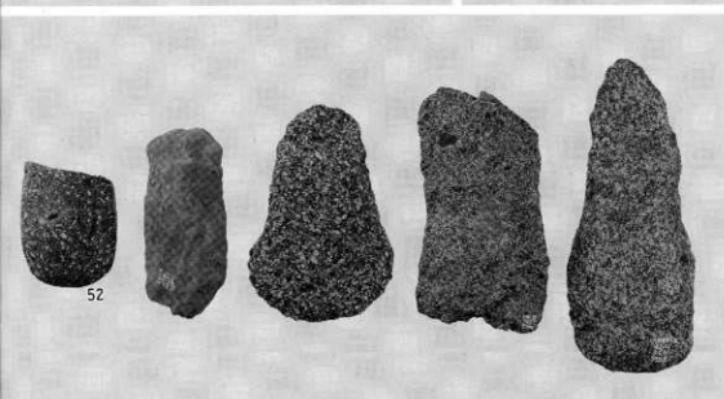
打製石斧・縄文土器
珠洲・白磁・青磁・砥石

図版14
7地区の遺物(1)

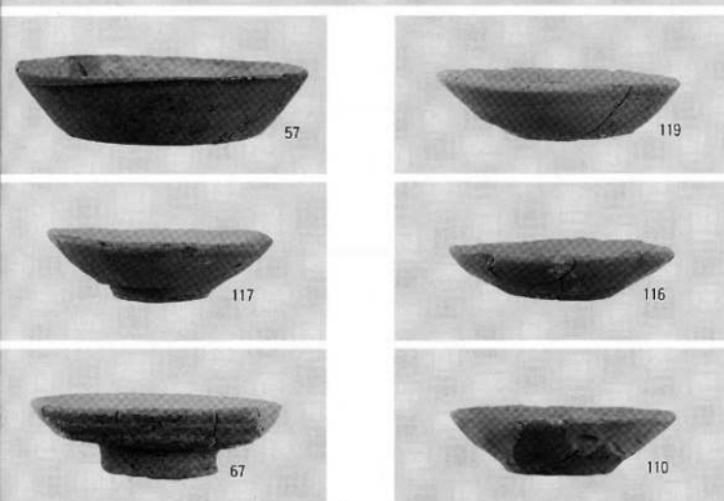
1:3



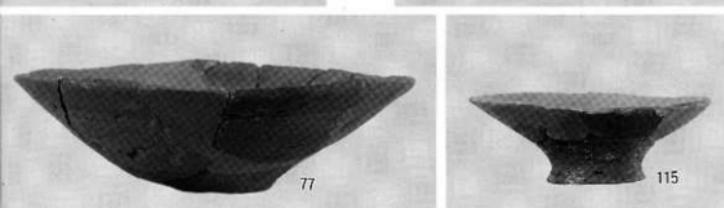
縄文土器



磨製石斧・打製石斧



須恵器(1・2)



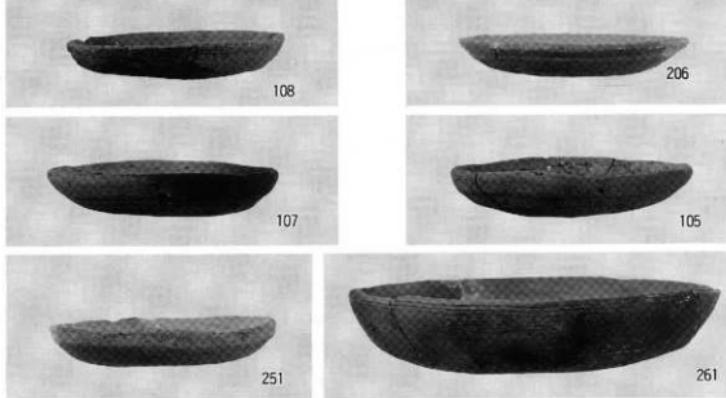
上師器(1・2)

図版15

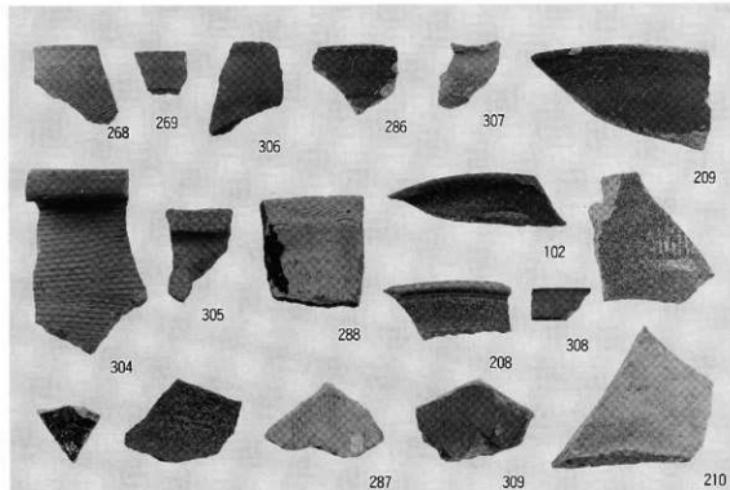
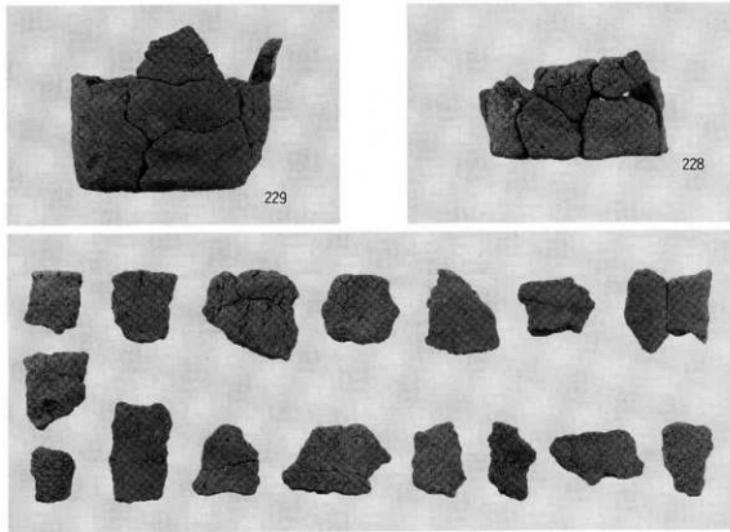
7地区の遺物(2)

(1:2)

土師器



製塙土器



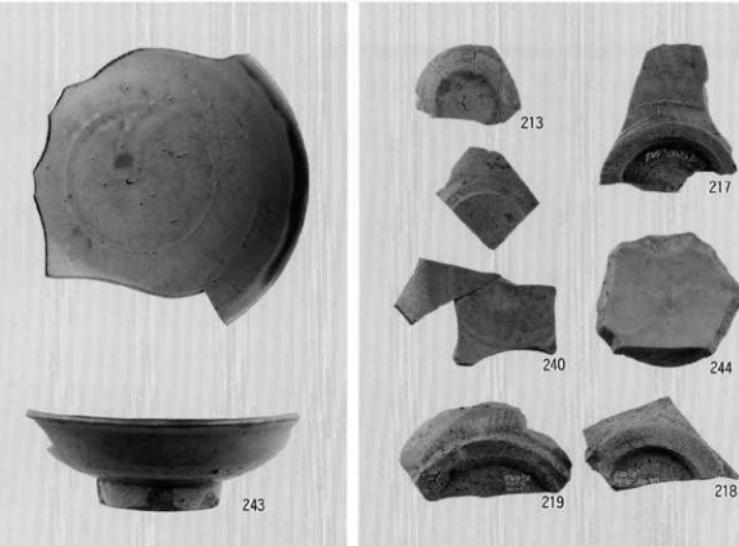
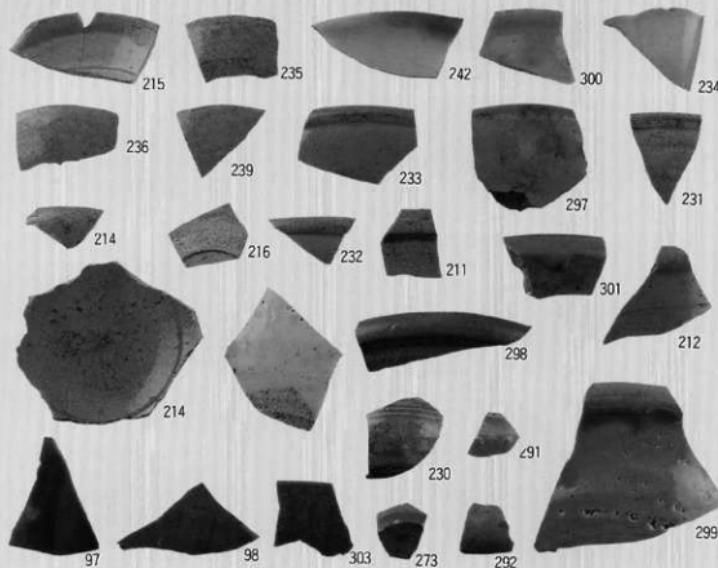
珠洲・常滑

漆付着土器・褐釉陶器

(1:3)

図版16

7地区の遺物(3)
(1:2)

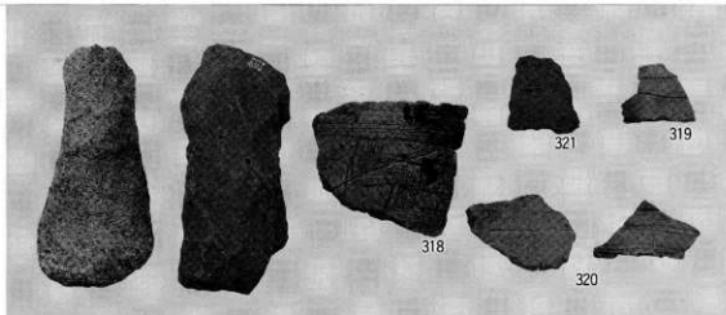


99

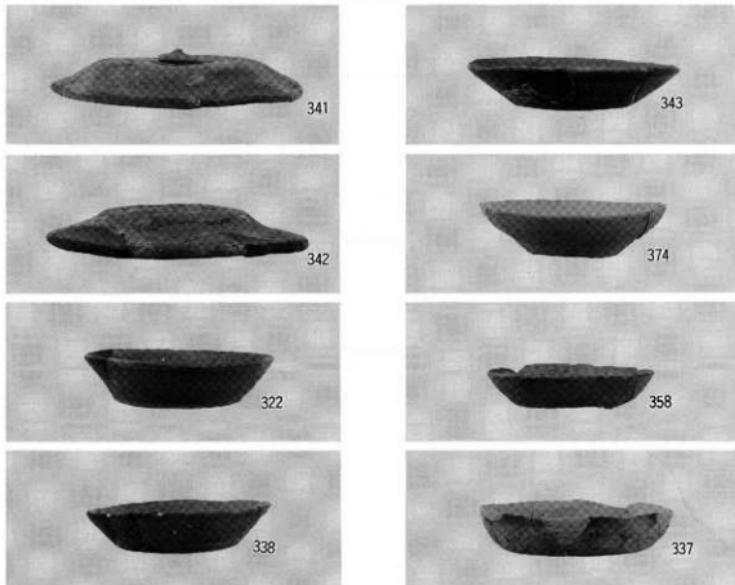
図版17

9地区の遺物(1)
(1:3)

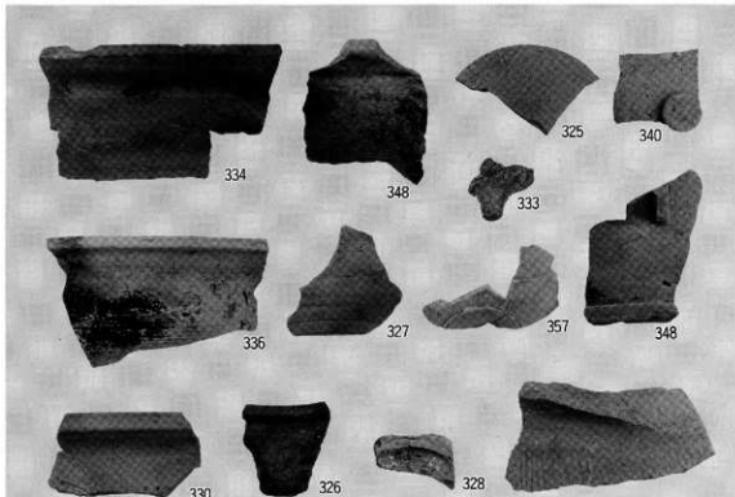
打製石斧・縄文土器



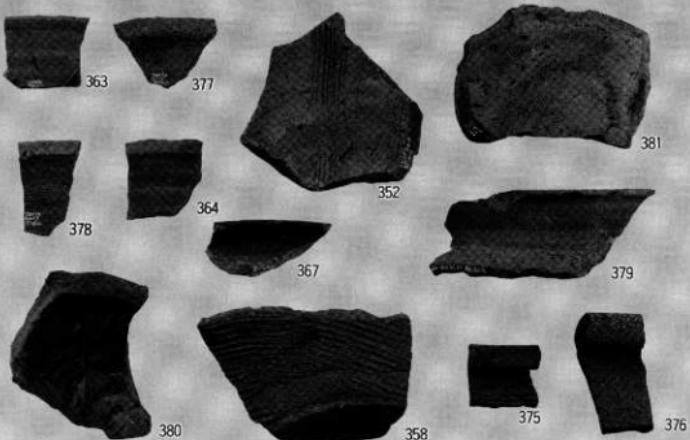
須恵器・土師器



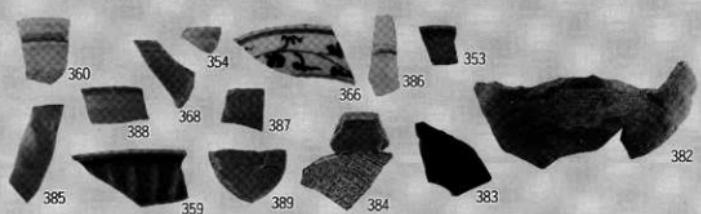
土師器・須恵器



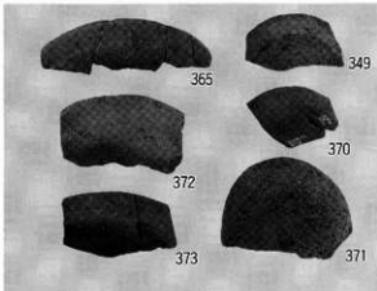
図版18
9地区の遺物(2)
(1:3)



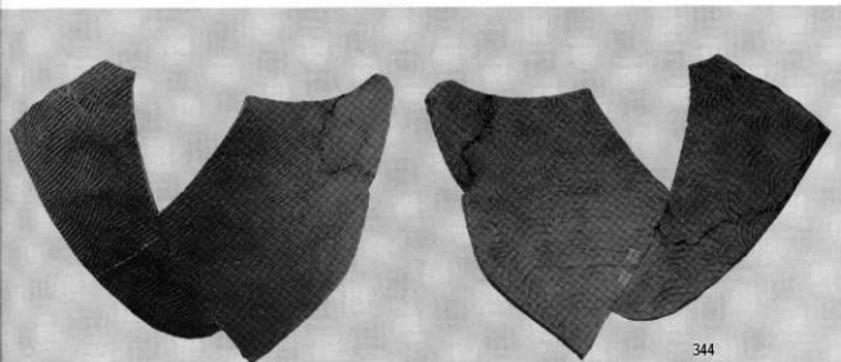
珠洲



白磁・青磁・青花
瀬戸



左:瓦器
右:土師器



須恵器

図版19

1.作業風景



2.造構検出状況



(掘立柱建物：
11T、東から)



3.造構検出状況
(溝状造構：
13T、西から)



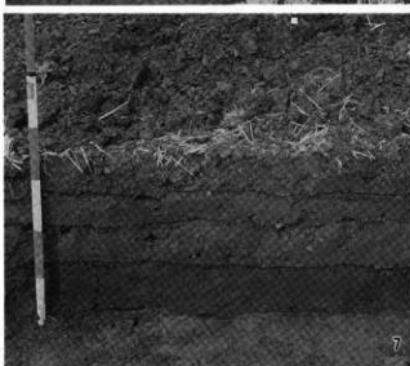
4.造構検出状況
(溝状造構：
18T、西から)



5.造構検出状況
(柱穴等30aT、
西から)



6.造構検出状況
(柱穴:38T、
北から)



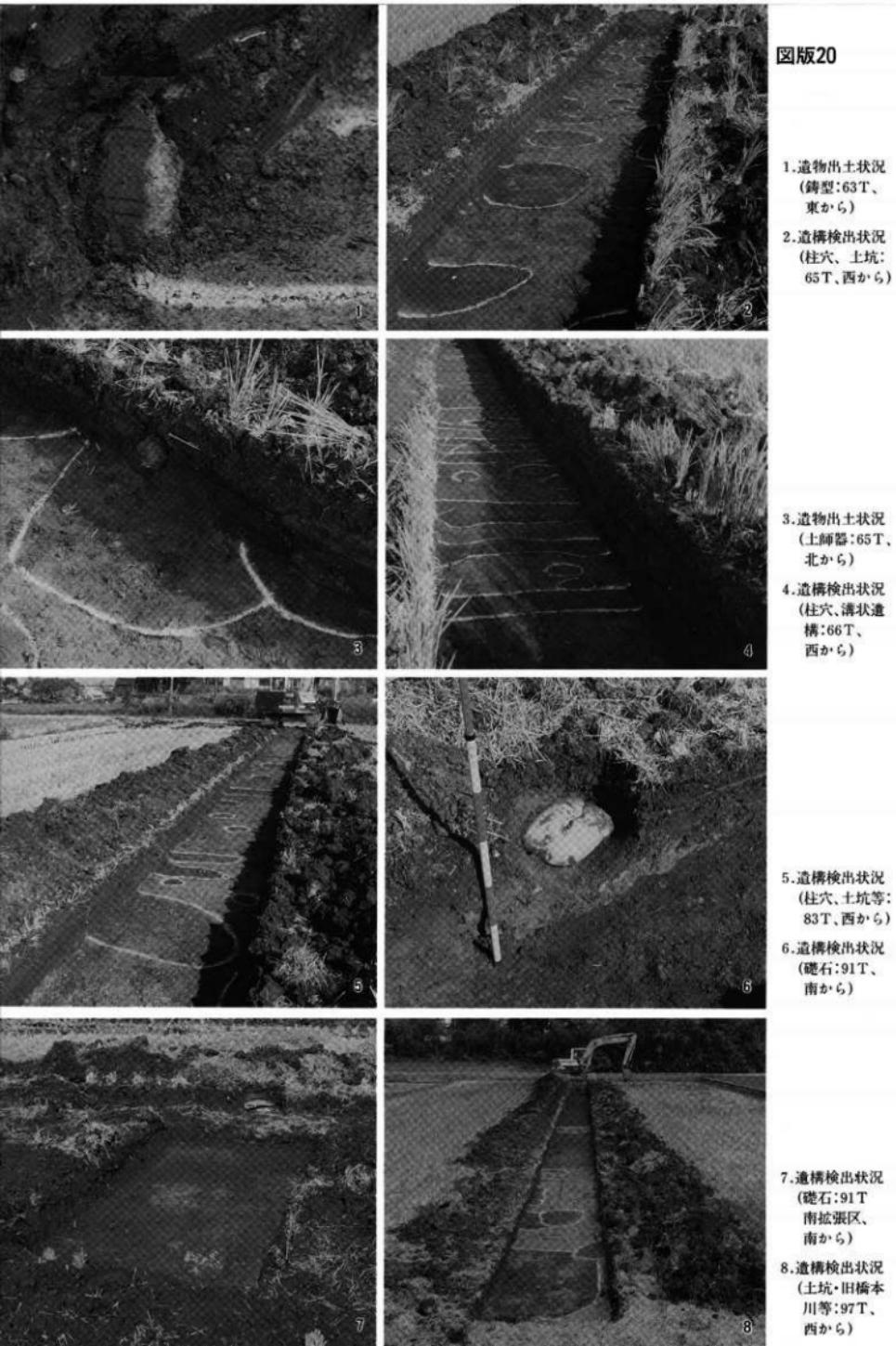
7.基本層位
(39T、南から)



8.中世土器集中
出土地点(東端)
49T、西から)

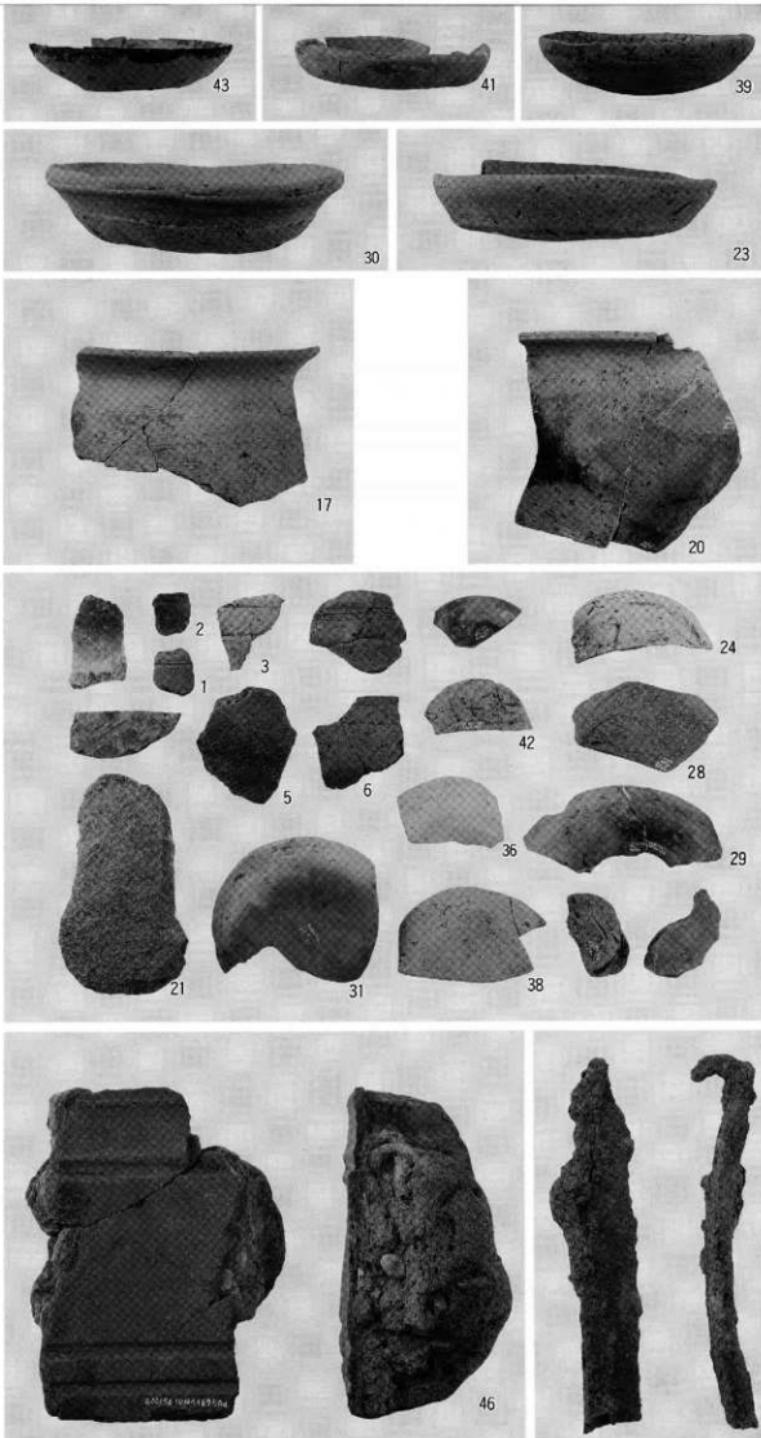
7

8



図版21

試掘調査出土遺物(1)



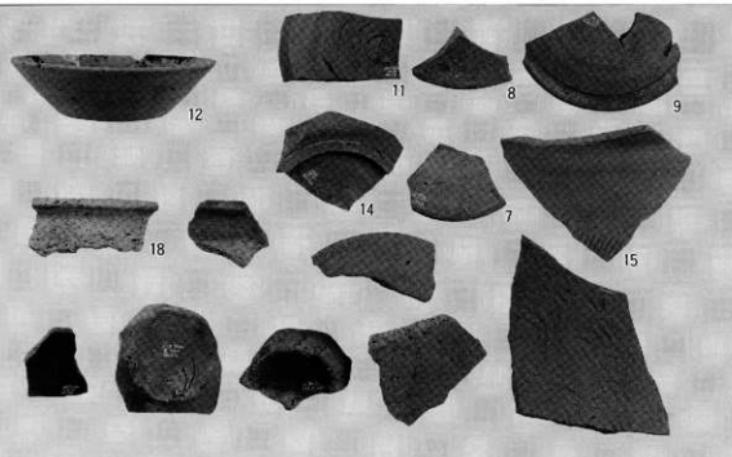
縄文土器、中世土器、
打製石斧、砥石、羽口

(1:3)

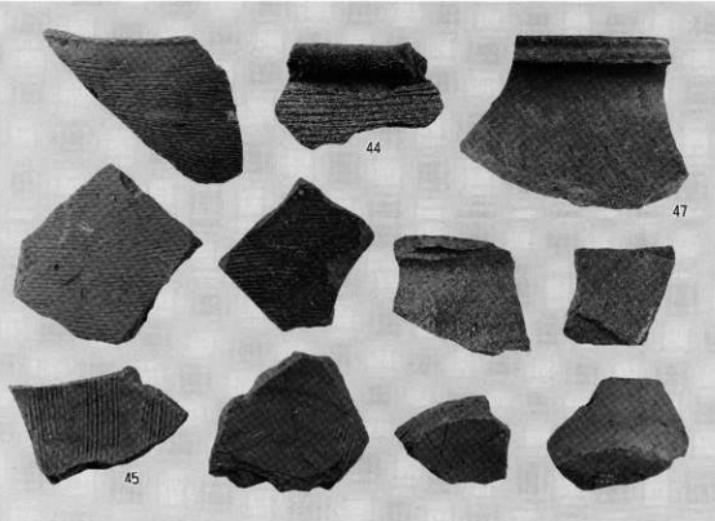
左:鉄型 (1:2)

右:鐵製品 (1:2)

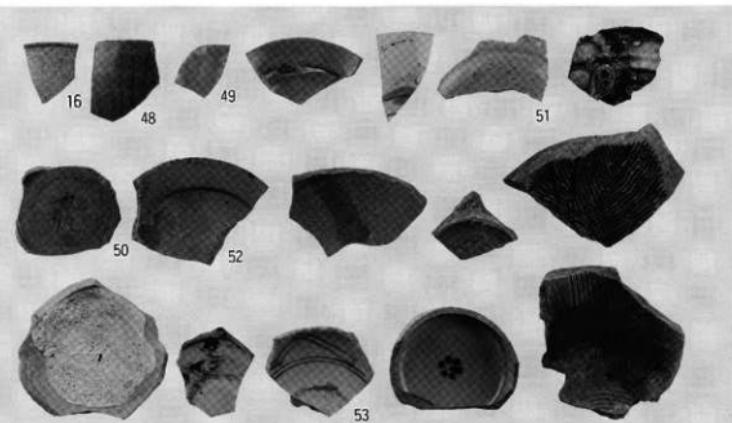
図版22
試掘調査出土遺物(2)



須恵器、土師器
(1:3)



珠洲ほか (1:3)



灰釉陶器、青磁、瀬戸
美濃、越中瀬戸、唐津、
伊万里 (1:3)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくろみつまちうめはらおとしどいせきぐん							
書名	富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅲ							
副書名	県営低コスト化水田農業ほ場整備事業(梅原地区)に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(6)							
編著者名	久々忠義、佐藤型子							
編集機関	富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-01 富山県西砺波郡福光町荒木1550 両 (0763)52-1111							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調 査 期 間	調査面積 (対象) m ²	調査 原 因	
梅原落戸	富山県福光町梅原	市町村 16421	遺跡番号 177	36度 33分 35秒	136度 54分 15秒	19950619 ~ 19951018	3,235m ²	県営ほ場 整備事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な 遺 構	主な 遺 物	特 記 事 項			
梅原落戸	集 落	縄文時代、 奈良・平安 時代、中世	井戸、掘立柱建物、 竪穴住居跡、竪穴、 溝、穴、集石遺構、 川跡、柱穴	繩文土器、石器、土師 器、須恵器、中世上師 器、珠洲、常滑、越前、 瀬戸、美濃、青磁、 白磁、青花、製壺土器、 火鉢、鐵洋、羽口、 砥石、硯、宋錢、炭化 米、種子、陶磁器	古代末～中世初期の集 落跡を発見した。			

県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業(梅原地区)
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(6)

富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅲ

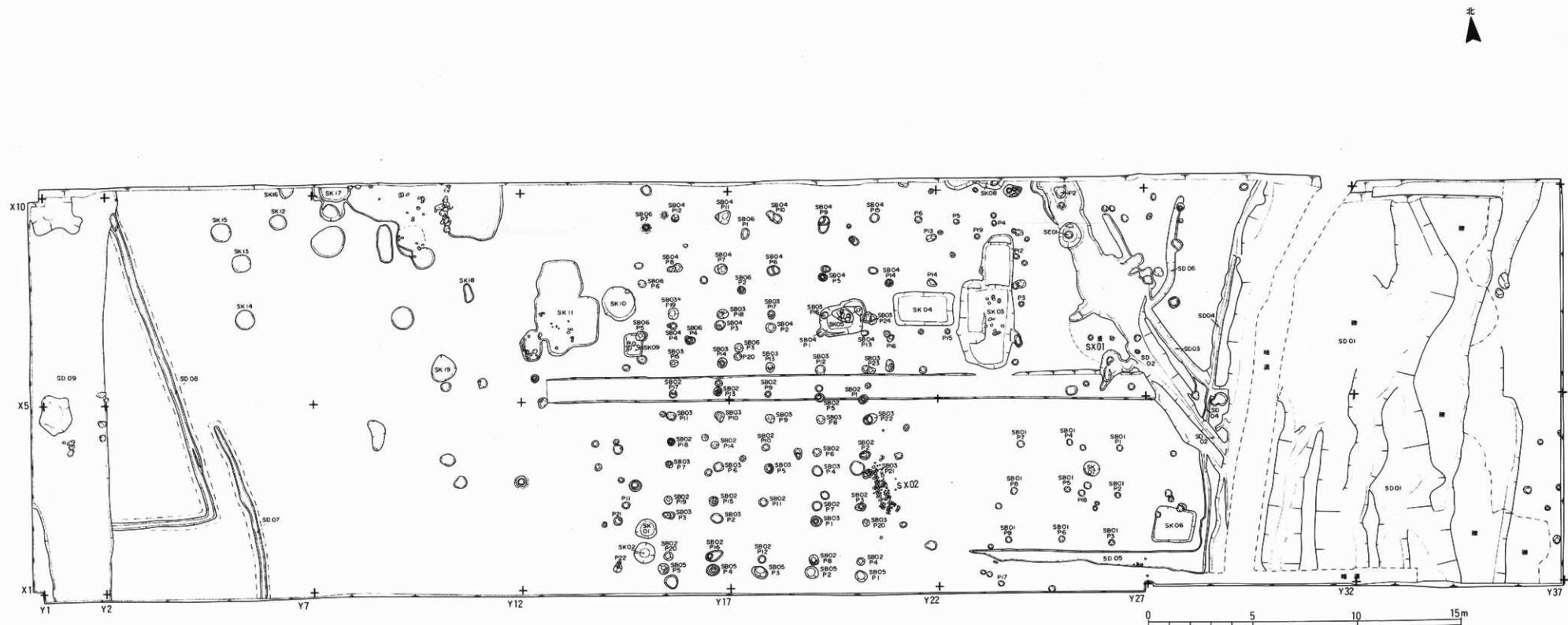
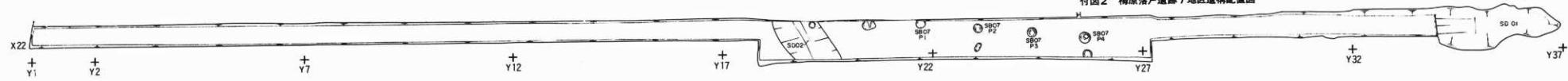
平成8年3月29日

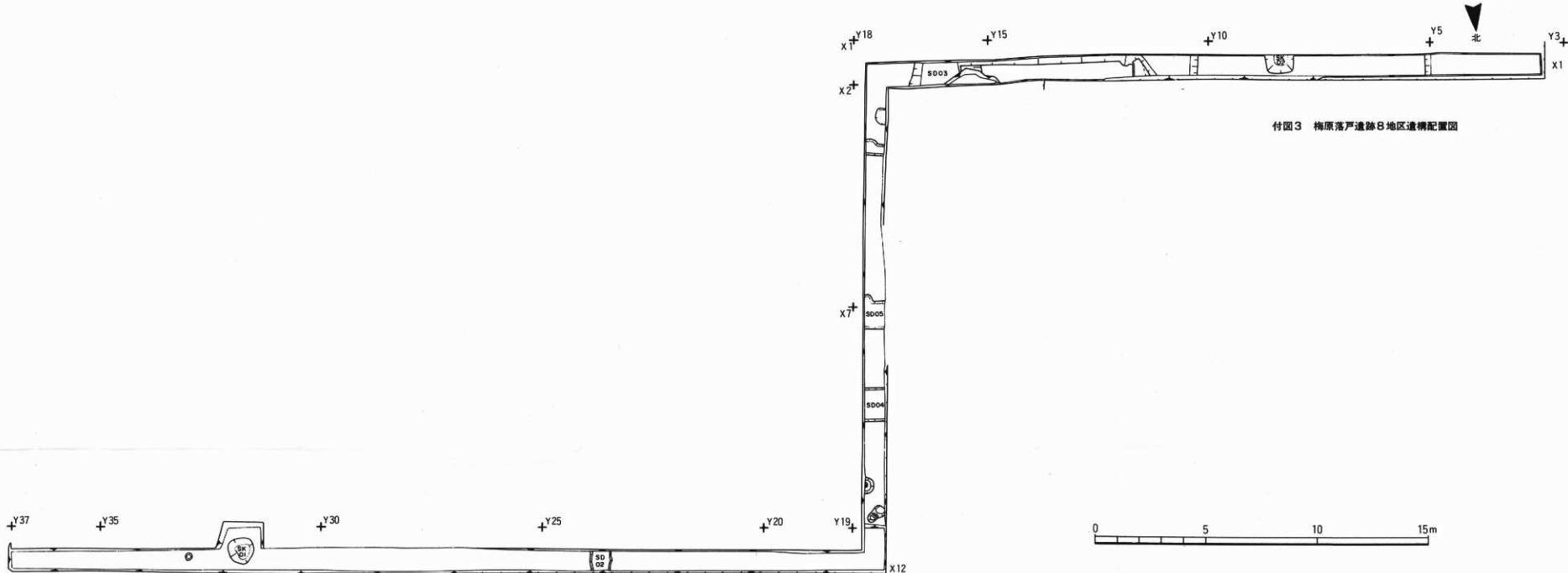
編集 福光町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター--

発行 福光町教育委員会

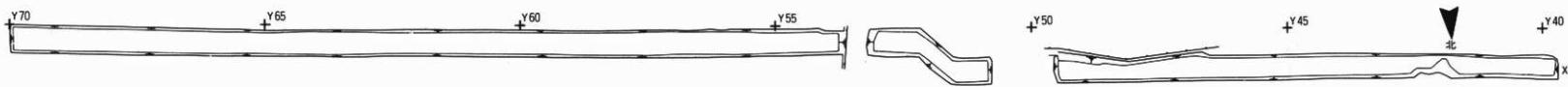
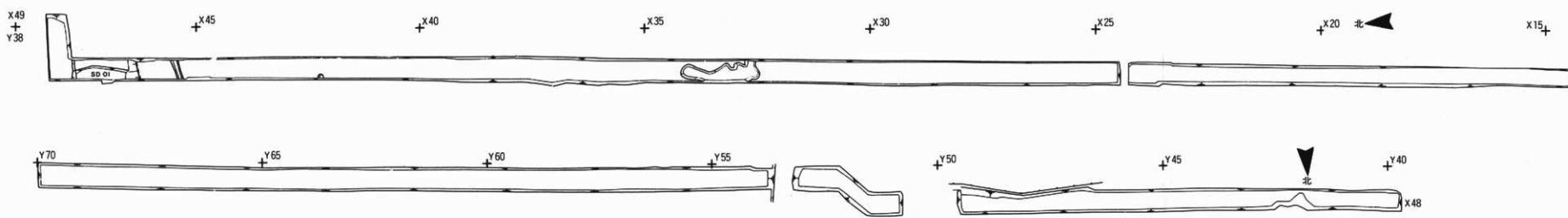
印刷 日興印刷株式会社

付図2 梅原落戸遺跡7地区遺構配置図





付図3 梅原落戸遺跡B地区造構配置図



付図4 梅原落戸遺跡9地区造構配置図

